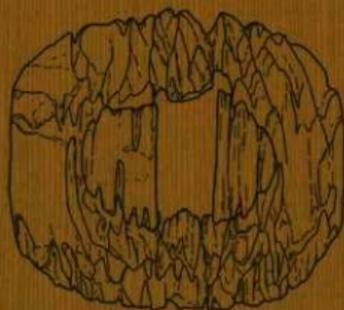


栗東町埋蔵文化財調査

# 1991年度 年報 II

— 下鈎・狐塚・上鈎遺跡 —



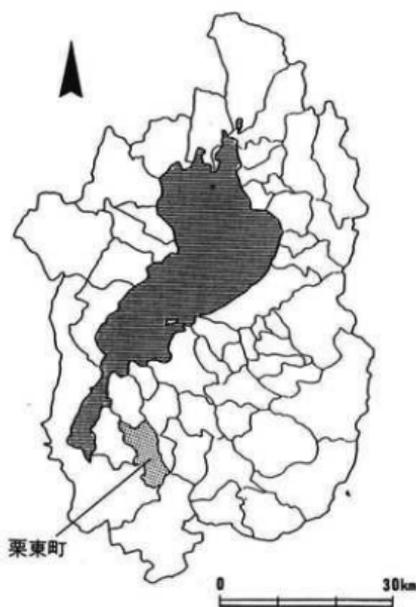
1993

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋藏文化財調査

# 1991年度 年報 II

— 下鈎・狐塚・上鈎遺跡 —



1993

財団法人 栗東町文化体育振興事業団

## 例 言

1. 本書は財団法人栗東町文化体育振興事業団が1991年度に実施した下鈎遺跡・狐塚遺跡発掘調査の成果報告、および1992年度の調査研究の成果である。
2. 本書の刊行は1992年度事業で実施し、『1991年度年報』を補足するものである。
3. 本書の執筆は第1章を近藤広、第2章1～3・5を雨森智美、第3章を佐伯英樹が行った。第2章4は、金原正明氏(天理大学附属天理参考館)、金原正子氏(環境文化研究所)、光谷拓実氏(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)に玉稿を賜った。全体の編集は、近藤広が行った。
4. 下鈎遺跡、狐塚遺跡の調査体制は以下のとおりである。

下 鈎 遺 跡	狐 塚 遺 跡
財団法人栗東町文化体育振興事業団	理 事 長 武邑 尚邦 常 務 理 事 渋谷 一夫 事 務 局 長 仙石 龍岳 埋蔵文化財発掘調査課係長 平井 寿一
埋文調査課技師 近藤 広 技師補 橋本奈保子	埋文調査課技師補 雨森 智美

5. 現地調査および報告書作成にあたり、以下の方々に御教示・御協力を得た。(敬称略)
  - 〈下鈎遺跡〉 網谷克彦、泉 拓良、小笠原好彦、北原隆男、高橋美久二、西田 弘、原口正三、帝塚山考古学研究所縄文部会
  - 〈狐塚遺跡〉 泉 武、大橋信弥、小笠原好彦、金原正明、西藤清秀、高橋美久二、中川正人、林 博道、林部 均、広瀬和雄、細川修平、丸山竜平、光谷拓実、和田晴吾
6. 現地調査および整理作業では以下の方々に御協力を得た。(敬称略)
  - 〈下鈎遺跡〉 上田和枝、大岡道代、太田好枝、鹿子島美津子、教野妙子、辻井一二美、西村憲子、堀部アキ子、牧野富子、横山こと、吉川恵理子
  - 〈狐塚遺跡〉 井上妙子、井原ちえみ(滋賀大学)、今村梅子、今村康博、奥村美枝子、木下政子、久徳良子、竹村ヒロ子、辻かほる、西村寮子
7. 遺構写真および遺物写真の撮影にあたっては、松村 浩(栗東歴史民俗博物館)の御協力を得た。遺物復元・実測にあたっては、畑本陽子(同館調査員)、田中たまき(同館整理員・京都精華大学)、大橋美和子(調査員)の御協力を得た。(敬称略)
8. 遺構の略号を使用する場合は、奈良国立文化財研究所の方式による略号を使用した。
9. 図面に使用した方位は特に明記しないかぎり全て磁北である。
10. 本書で使用した標高はT P(東京湾平均海面高度)である。

# 目 次

例 言

目 次

## 第1章 下鈎遺跡

1. 位置と環境	1
2. 調査の経緯	4
3. 調査の概要	4
4. 考 察	24
5. 小 結	29
図版1～16	31

## 第2章 狐塚遺跡

1. 位置と環境	47
2. 調査の経緯	48
3. 調査の概要	50
4. 考 察	73
5. 小 結	79
図版1～14	83

## 第3章 資料紹介

井戸出土の祭祀遺物 上鈎遺跡	97
----------------	----

# 第1章 下鈎遺跡

## 1. 位置と環境

下鈎遺跡は、六地藏古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川中流域の右岸に位置する。

遺跡の存在する平野は、沖積層によって形成され、主として野洲川によってもたらされた砂や礫からなる扇状地層である。

今回の調査地点は、下鈎遺跡を仮にA～F地区の6地区に分けた場合のA地区にあたり、坊袋遺跡と上鈎遺跡が近接した位置にある。(図1)

縄文時代における下鈎遺跡は、遺構としては明確なもの確認されていないが、遺物が各地点で出土している。D地区では、1990、1991年度の調査で前期と考えられる土器細片と、船橋、長原式に比定される晩期の土器が出土している。さらにD地区の北側では、1984年度の調査で後期の土器が包含層から出土している。D地区以外では、F地区の南側で確認されている旧河道から、弥生時代の遺物に混じって縄文時代中期前葉と考えられる土器が少量出土している。縄文時代中期の土器は、A地区の蓮台寺周辺の調査でも包含層から少量出土している。

弥生時代の下鈎遺跡は、現段階では中期後葉からの遺構が確認されている。なかでもB地区で、1983年度と1986年度の2回にわたる調査において確認された断面V字状をした溝(幅約3m、深さ約2m)は、集落をとりまく環濠の一部ではないかと考えられている。さらに近年、F地区南西側の調査においては、弥生時代後期と考えられる棟持柱をもつ5×2間(床面積47.5㎡)の巨大な掘立柱建物や、鳥居状の遺構をはじめ、数棟の掘立柱建物が確認されている<sup>①</sup>。これらの建物のまわりには旧河道が巡っており、環濠の役割りを果たしていた可能性が考えられる。この旧河道からは、銅鏡9本をはじめ、コンテナで100箱以上の土器がかたまって出土している。これらのことからB、F地区には、弥生時代中期後葉と後期後葉を中心とした2時期に拠点的な集落が存在していたことが考えられる。

古墳時代では、1988年度区画整理事業に伴うD地区の調査で、旧河道より4世紀から5世紀を中心とする木器や多量の土器が出土している。A地区南東では、1987年度の調査で、4世紀代と考えられる掘立柱建物数棟と円形状に巡る溝が確認されている。下鈎遺跡では、野洲川左岸沿いに位置する岩畑・辻遺跡のような竪穴住居を主体とする大規模な集落は未だ認められていない。

白鳳から奈良時代では、1986年度のB地区東側で、7世紀代と考えられる方位をそろえた掘立柱建物が4棟確認されている。また、D地区東隅で奈良時代の2間×2間の総柱式

建物が2棟確認されている。(1991年度の調査報告<sup>②</sup>では、下鉤東遺跡としている)この時期の遺構、遺物は次の平安時代前半と伴に、現段階では一部の地区でしか確認されていない。

平安時代前半では、A地区とB地区の境に、延暦年間(789年)に創建されたと伝えられる蓮台寺が存在するが、その付近の調査(1989年度)で、9世紀代の井戸が2基確認されている。B地区では、1980年度に調査した旧河道から人形が出土している。

平安時代末期から鎌倉時代前半以降では、各地区で遺構、遺物が数多く確認されている。特に注目すべきものとして、D地区北東の1985年度の調査で、屋敷をとりまく溝の一部と思われるものが確認されている<sup>③</sup>。このあたりは、字名から下鉤城とされている場所であり、その関連する遺構であろう。また、前述の蓮台寺周辺の調査では、幅2.5m、深さ1.1mの断面V字状をした溝が確認されており、一般集落とは思われない屋敷もしくは寺に関連した溝ではないかと考えられている<sup>④</sup>。一方、A地区の葉山川改修工事に伴う調査では、近世墓(久徳家の墓)が確認されている<sup>⑤</sup>。



- |              |          |         |          |
|--------------|----------|---------|----------|
| 1. (A~F)下鉤遺跡 | 2. 蓮台寺遺跡 | 3. 小杉遺跡 | 4. 中沢遺跡  |
| 5. 野尻遺跡      | 6. 下鉤城跡  | 7. 柿屋遺跡 | 8. 下鉤東遺跡 |
| 9. 手原遺跡      | 10. 上鉤遺跡 | ● 調査地点  |          |

図1 遺跡位置図(1:20,000)



## 2. 調査の経緯

本調査地は、滋賀県栗太郡栗東町大字下鈎袂440-1に所在する。調査は、井上正次氏が計画する倉庫建設に伴う事前調査である。

調査面積は、対照面積580㎡の内、約500㎡について発掘調査を実施し、トレンチは、東側(T1)、西側(T2)の2ヶ所に設定した(図2)。現地調査は、1990年10月1日から1991年1月24日にかけて行なわれた。

## 3. 調査の概要

### (1)基本層序(図3)

上層から数えて第Ⅰ層は、耕作土(層厚約20~22cm)、第Ⅱ層は、橙黄色床土層(層厚2~20cm)、第Ⅲ層は、灰褐色粘質土層(層厚8~16cm)で、この面が弥生時代から中世の遺構が認められる面(上層遺構面)となる。続いて第Ⅳ層は、褐色土層(層厚18~30cm)、第Ⅴ層は黄橙味茶色土層(層厚4~20cm)で、縄文時代の遺構が認められる面(下層遺構面)となる。

### (2)検出遺構

遺構は、前述のごとく上層と下層の2面で確認されている。

#### ①下層遺構

耕土から約70cm下げた地点で確認できる。確認した遺構は、縄文時代前期と考えられる竪穴住居、竪穴状建物遺構、土坑、ピット等である(図4)。

#### 1) 竪穴住居(SH-1・2)

##### SH-1(図版2・図5)

調査区西側に存在し、南側に竪穴状建物遺構1が接している。住居は、直径4.06m、短径3.48mのほぼ楕円形プランを持つ竪穴住居である。住居壁の立ちあがり、床面から直に立ちあがるものではなく、なだらかに立ちあがる形状(皿状)をもつ。深さは、最深で約0.45mである。住居内に30以上のピットを検出した。支柱穴は4本と8本によって構成されていた住居が考えられる(4節考察を参照)。付属施設としては、南側に貯蔵穴と考えられる楕円形の土坑(SK-20)\*が付属し、北側には、約1.2×0.6mの入口と思われる張り出した部分がみられる。また、床面中央に焼土は認められなかったが、炭化物の堆積がみられ、炉が存在していた可能性がある。床面東側では、石皿が据え置かれた状態で出土している(図版2-3)。堆積状況で注目されるのは、住居床面中央付近から東方向に、拳大前後の石が一面に廃棄された状態で検出され(図版2-5)、その上に土器や石器を多量に含んだ土が、検出面まで堆積していた。このことから、住居としての機能を失ってから

は、廃棄場として利用していたことがいえる。出土遺物には（1～4、11～15）等の土器や石器（126、132、154、155.）が存在する。

### SH-2（図版3・図6）

調査区北側隅に存在し、南西側に建物E等が接する。住居の平面形は、西側に辺をもちその向いが円形状をした不整形（以後、仮に不整方形形と呼んでおく）であり、方形と円形の中間形態をとる。住居の壁は、SH-1と同様に、なだらかに皿状にたちあがる。深

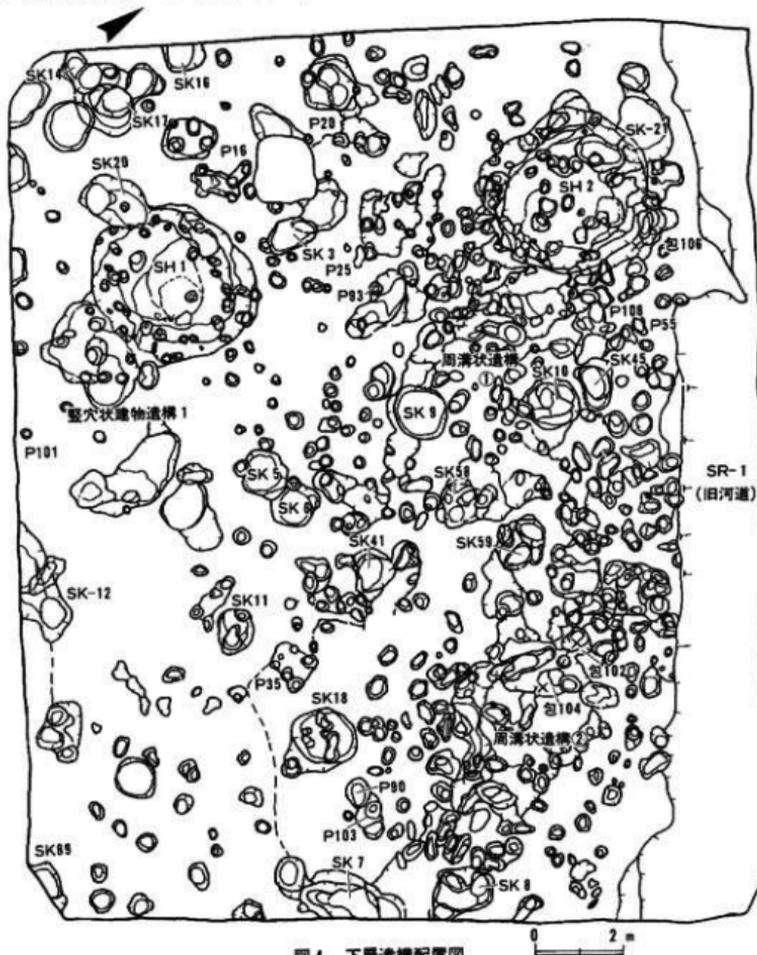
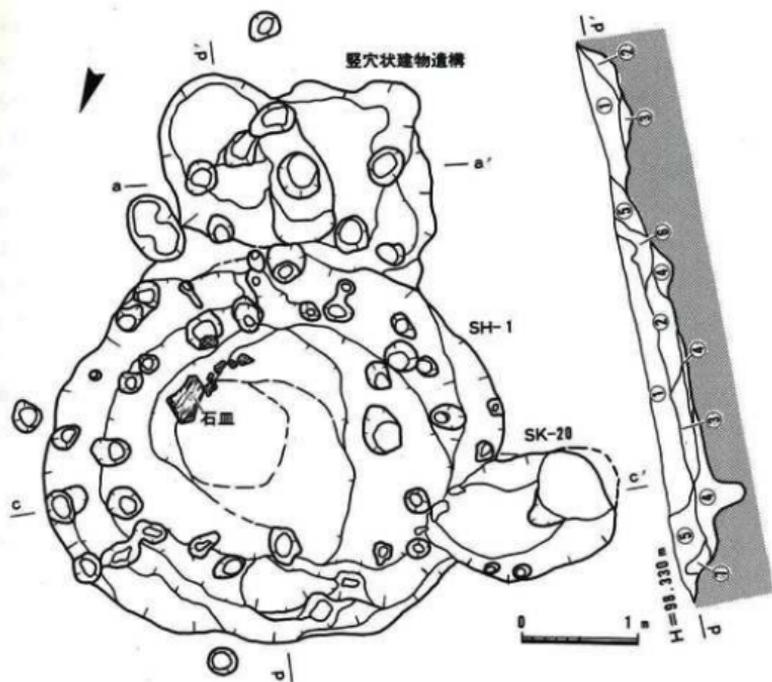


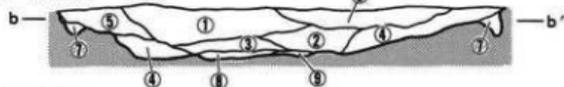
図4 下層遺構配置図



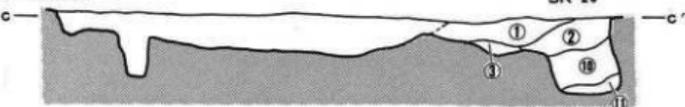
H = 98.330 m



H = 98.330 m



H = 98.330 m



- |             |              |                |
|-------------|--------------|----------------|
| ① 暗茶褐色土(礫混) | ⑤ 茶色土(礫混)    | ⑨ 炭化土          |
| ② 暗茶黒林褐色土   | ⑥ 茶褐色粘質土(礫混) | ⑩ 黒褐色土         |
| ③ 茶色砂礫土     | ⑦ 淡黒茶色土      | ⑪ 黒褐灰味色土(やや粘質) |
| ④ 淡黒茶色土     | ⑧ 黒茶色土(炭混)   |                |

図5 SH-1 豎穴狀建物遺構平面図

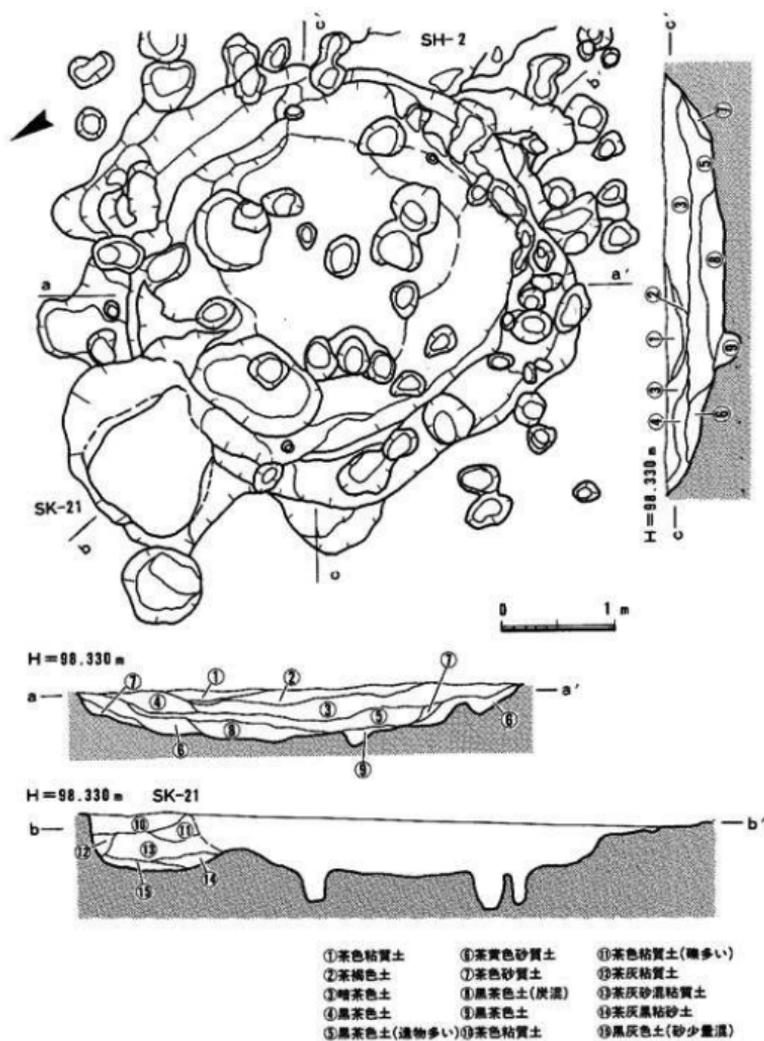


図8 SH-2・SK-21 平面・断面図

きは、最深で約50cmである。住居内のピットは、大小含めて30以上存在する。その内支柱穴は、4本であった可能性が考えられ、2回以上の建て替え、もしくは拡張の痕がみられる(4節考察参照)。付属施設としては、東辺の中央付近に入口と思われる張り出し部分(約1.0×0.4m)がみられる。床面には、SH-1と同様に焼土は認められず、明確な炉と判断できるものはなかったが、炭化物の堆積している部分が存在した。また、北側には土坑が2個接して存在し、ひとつは住居外に張り出す状態で存在し(SK-21<sup>®</sup>)、もうひとつは住居内に存在する。住居内の土坑は平面形がほぼ楕円形で、直径1.10m、短径0.65mの大きさをもつ。深さは、確認できた面から約15cmである。土坑周辺からは、深鉢(141)等が出土している。堆積状況は、SH-1と同様に床面や上の層一面に、拳大前後の石がたくさん含まれており(図版3-9)、その上から検出面まで土器や石器等を含んだ土が堆積していた。出土遺物には、(56、144、155~157)等がある。

## 2) 竪穴状建物遺構1(図版2・図5)

以前、建物H地点<sup>®</sup>として報告した遺構である。調査区の西側に位置し、SH-1の南側に接する状態で存在する。北側がSH-1に重複し、形状が明らかではないが、現存する部分では隅丸方形状となっている。規模は、2.3×1.6m以上で、深さは検出面から床面まで12~30cmである。ピットは7ヶ所認められ、その内の4本が支柱穴と考えられる。

## 3) ピット群P

ピットは、300以上確認されている。その中で以前、ピットの並び、深さ等から竪穴住居もしくは、掘立柱建物等の何らかの建物になるとと思われる地点をA~Iとして9ヶ所を想定した<sup>®</sup>。この中で、H地点は前述したように竪穴状建物遺構として報告した。また、SH-2とC地点の間にも建物を新に確認し、J地点とした(図17)。詳しくは第4考察を参照されたい。

遺物の出土した主なピットにP72、93、103がある。P103はP90に接しており、深鉢(142)がつぶれた状態で出土し(図版6-23)、拳大前後の石も同時にいくつか投げこまれていた。P72からは石匙(138)、P93からは石斧(169、図版6-22)がそれぞれ出土している。ピットの遺物は、小片が多くて時期を判断しにくい、特殊突帯文系の土器(前期後葉~末葉)が目立っている。

## 4) 土坑SK(図版5・図7、8)

土坑は20基以上確認され、平面形、規模、深さ等を表1に示した。平面形は、円形、楕円形、不整形等が存在し、一様ではない。深さは、大きく55cm以上(SK-7、12、14、17、20、41、45、58)、45cm以上54cm以下(SK-5、10、16、59)、40cm以下(SK-3、9、11、18、89)の3グループに分けられる。断面の形態で特徴があるのは、壁が下部で

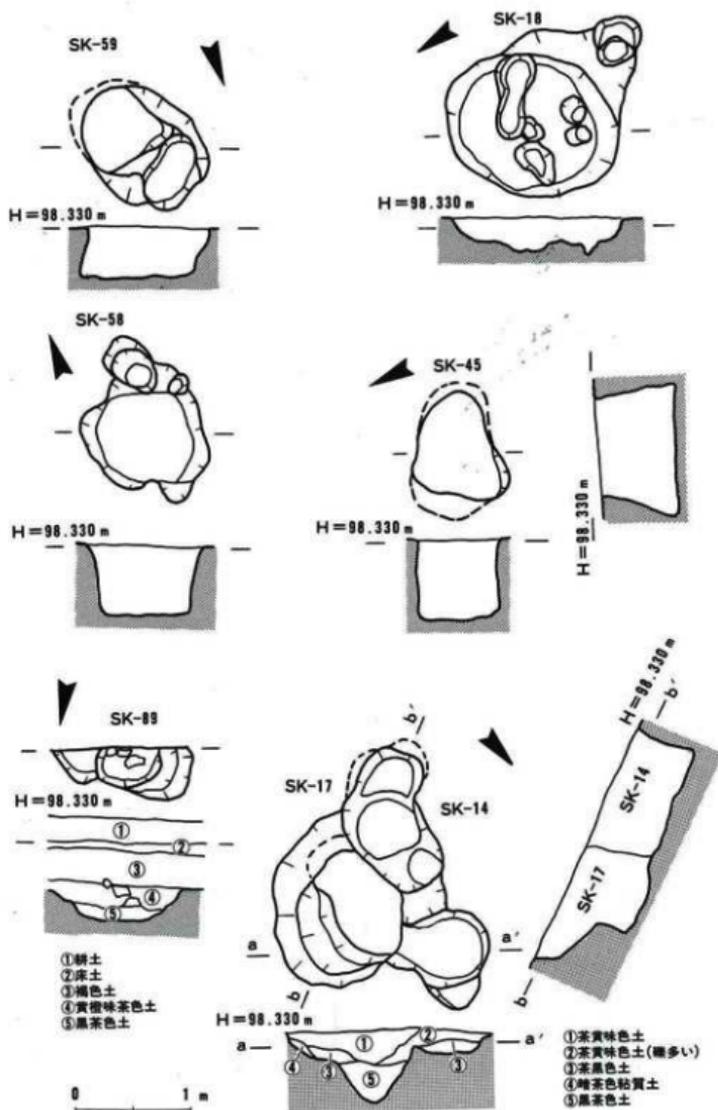


图7 土坑平面・断面图

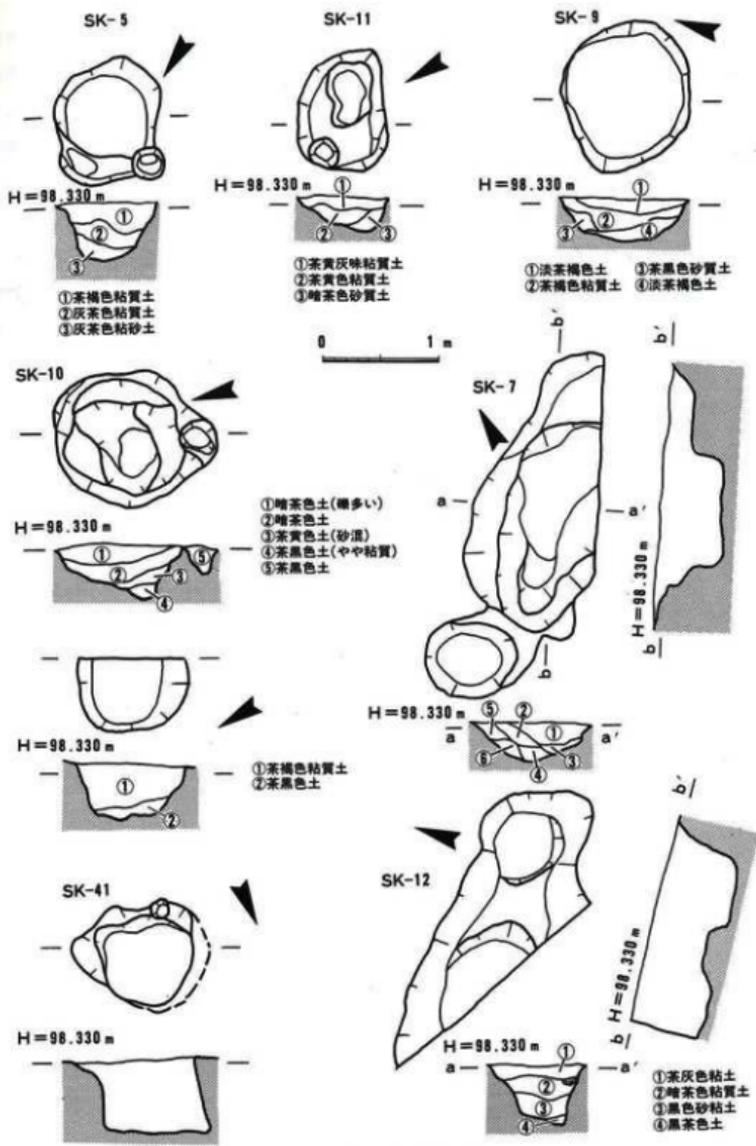


図8 土坑平面・断面図(2)

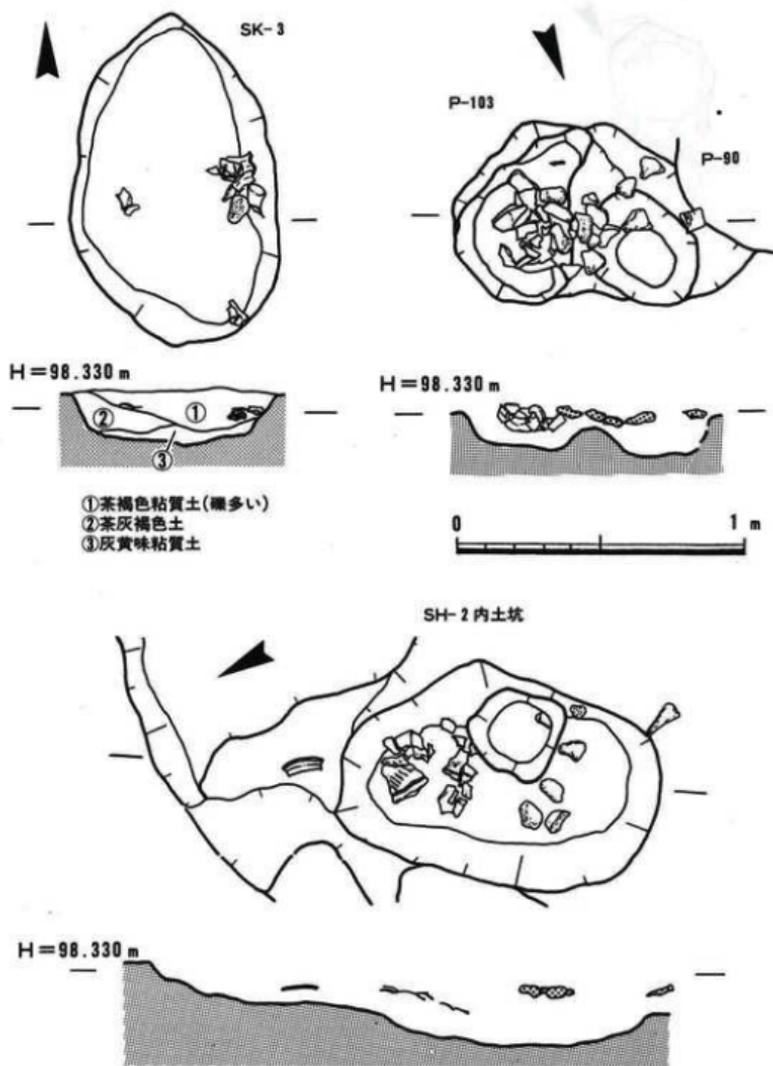


図9 土坑・ピット遺物出土状況図

袋状になっているもので、7基（SK-14、17、20、21、41、45、59）認められる。また、袋状となるものに一部重なるが、浅いテラスをもち、深い部分につながる2段掘りになるものが4基（SK-7、14、17、20）認められる。平面形態等から考えればSK-12も2段掘りになる可能性をもっている。時期的には、特殊突帯文系土器を出土する土坑が多くみられることから、前期後葉から末葉のものが中心を占めていたと考えられる。

#### 5) その他の遺構

周溝状の浅い落ち込みが、建物A地区周辺と建物D地区周辺の2ヶ所に認められる。形態は、南西にコの字状もしくは、半円状にまわったものである。規模は、周溝状遺構①が直径約3.5~4.0m、周溝状遺構②が直径約3~3.5mである。幅は、いずれも約60~70cmで、深さは最深で15cm程度である。建物に関連する遺構の可能性もあるが、性格は不明である。類例をまっけて今後の検討課題としたい。

遺跡名	規模(cm)内下部	平面形	深さcm	備考	出土遺物
SK3	115×72	楕円	19		143
SK5	160×88	隅丸方	50		
SK7	230×110	不整長円	58	東と西側がテラス状になる2段掘り。	
SK9	114×126	円	37		32.39
SK10	118×110	円	46		
SK11	80×140	不整円	30		
SK12	240以上×94	不整形	64		
SK14	130×60	不整形	60	北側がテラス状になる2段掘りで、袋状になる。	29.36
SK16	98×62以上	円	48		
SK17	146×110	楕円	68	北側がテラス状になる2段掘りで、袋状になる。	146
SK18	150×120	円	30		
SK20	170×130	楕円	62	SH-1に付属	
SK21	170×100	不整楕円	52	SH-2に付属	
SK41	108×80 (120×94)	円	64	西から北側にかけて袋状になる。	
SK45	90×70 (120×70)	楕円	70	東と西方向が袋状になる。	
SK58	110×100	不整円	62		
SK59	120×96 (136×96)	楕円	46	南側が袋状になる。	
SK89	84×40以上	楕円	20	上層に石皿出土。	

表1 土坑一覧

## ②上層遺構

上層遺構は、地表面（耕作土上面）から約25～30cm下げた地点で確認できる。確認した遺構は、弥生時代後期から中世以降と考えられるもので、旧河道、溝、井戸、ピット、耕作痕等がある（図10）。以下、主な遺構について記述する。

### 1) 旧河道SR-1（図10）

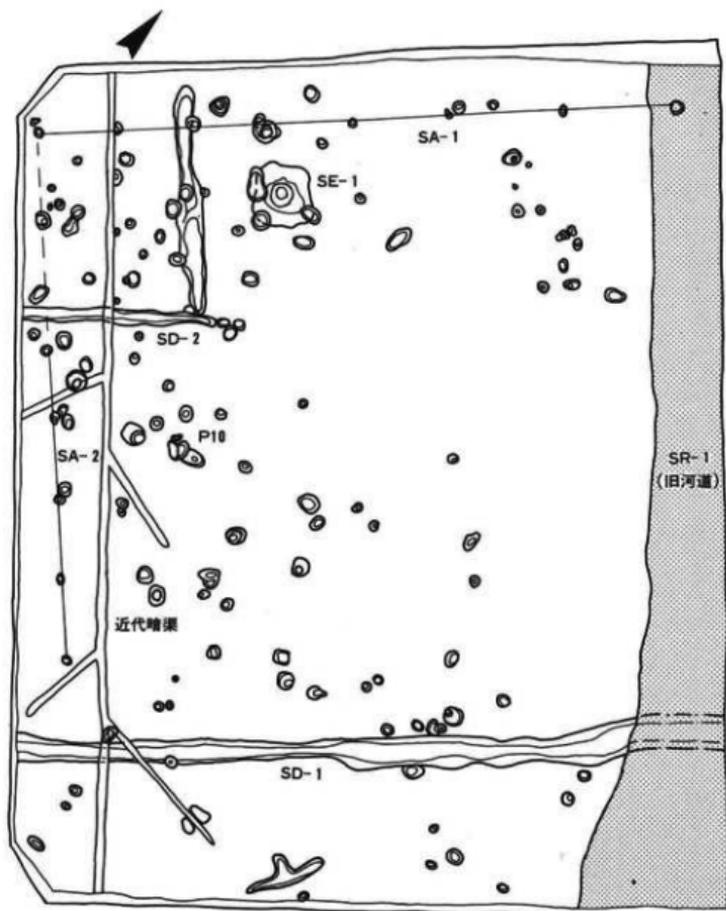


図10 上層面遺構配置図

0 5 m

葉山川の支流と思われる旧河道で、南北方向から北西方向にのびている。トレンチ1では、調査区全体に旧河道が取まった状態で検出され、トレンチ2では、北壁に沿う形で検出された。大きさは、最大幅10m強、深さ1m以上である。出土遺物に弥生時代後期から古墳時代の甕、壺、高杯、平安時代後半から鎌倉時代にかけての黒色土器、土師器等が出土している。

## 2) 溝SD-1、2 (図10)

溝は2条確認されている。いずれも栗太郡条里 (N33°-W) にほぼ一致するもので、南西から北東方向にのびるものである。SD-1は、調査区の東壁より南から東方向に位置する。規模は、検出長で15m強、幅40~100cmである。深さは4~15cmである。SD-2は調査区西側に位置する。規模は、検出長で4.6m強、幅25~40cmである。深さは3~5cmと浅めである。

## 3) 柵列SA-1、2 (図10)

SA-1は、7間からなる柵列で、柱間は、北から2.8、2.8、2.4、2.4、1.7、1.9、1.9mである。北から数えて、1、2間と、3、4間目がそれぞれ同じ間隔 (2.8mと2.4m) で柱が並び、続いて残りの3間が1.7~1.9mのほぼ等間隔で柱が並び、

SA-2は、南壁付近のほぼ中央に存在する。3間からなる柵列で、柱間は2mのほぼ等間隔である。SA-1とSA-2は、ほぼ直角にL字状に並び、埋土、柱穴の深さ等から考えて、同時期の所産と考えられる。遺物はSA-1、2ともに出土していない。

## 4) 井戸SE-1 (図11)

調査区西壁の中央やや南よりに位置する井戸で、大きさは直径1.6m、短径1.2mの隅丸方形に近い平面形をもつ。深さは、検出面より約1.3m強である。検出面より約20cm下げた部分で、石組が検出され、約60cm下まで続いた後、その下には曲物が組み込まれていた。曲物は、大小 (径約50cmと30cmのもので、高さ両者とも約18~20cmである) 2段ずつの4段で構成されている。出土遺物に常滑焼の甕 (図15-166)、黒色土器の碗 (図15-103-18) 等がある。時期は常滑焼が出土していることから14世紀頃のものと考えられる。

この他、ピットの集まりが何ヶ所かみられ

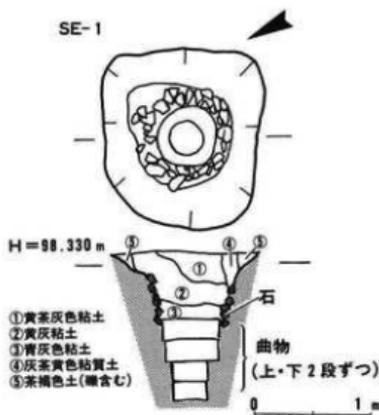


図11 SE-1 平面・断面図

るので、今後の検討によって建物になる可能性は充分に考えられる。

### (3)出土遺物

#### 〈縄文土器〉

縄文土器は、一部中期と考えられる土器が包含層を中心にみられる以外は、大半が前期に比定される土器である。以下、土器をおおまかに分類することにする。

#### J 1 爪形文系土器 (図版7-1・図12)

連続爪形文を施す土器で、北白川下層II a式を主体としたものである。器種は、深鉢と鉢がある。口縁は、内湾するもの(1・3)とやや内湾気味にたちあがるもの(2・4)、外へ開くもの(7)に大きく分けられる。施文幅は、8mm~14mmで半数が11mmである。また、注目すべきものとして、内面と外面の両方に爪形文を施した鉢(153)が存在する。

#### J 2 突帯文系土器 (図版7-2・図版8-3・4・図13・14)

突帯を付属する土器で、北白川下層II c式に比定できるものが大半を占める。器種は、深鉢が中心を占め、口縁は通常のものに加え、波状口縁もよくみられる。突帯の条数から、1条のもの(142)、2条のもの(11、13~18、20~22、25)3条のもの(18、19、24)、4条以上のもの(12)の4つに大きく分けられる。2条のものが大半を占め、1条のものおよび4条以上のものは少ない。突帯上には、縄文を施すもの(図版8-3)、ヘラ状工具等による刻みもしくは斜線を施すもの(図版8-4)竹管で押し引いたもの(141)や無文のもの(14、15)等がある。また、口縁部には、刻み(X線状、斜線等)を施したり、粘土紐や小突起を付けたりするものがある。(142)は、P103から出土した深鉢で、口縁の先に突帯を1条付けたものである。一件、晩期の口縁部に似た感じを受ける。表面にはRLの縄文を施す。(11)は、突帯がみみずばれ状になったもので、北陸地方の蜆ヶ森式に類似するものである。また、表面に赤色顔料を塗った土器(14)がわずかにみられる。

#### J 3 特殊突帯文系土器 (図版9-5・6、図版10-7・図14)

特殊突帯文を付属する土器で、北白川下層III式と大蔵山式に比定されているものである。器種は、深鉢、鉢、台付鉢等が存在する。口縁の形態から、やや受口状にたちあがるもの(29、158)、外反させるもの(39)、口縁の内外面に粘土紐を貼付け、先端をΣ状の工具によって刻んだもの(31~33、36~38、41~43)に大きく分けられる。口縁の先端をΣ状の工具によってしあげたものは大蔵山式の典型的なものである。(143)は、SK-3から出土した台付鉢で、地文をRLの縄文でしあげたものである。口縁下部と体部下半にそれぞれ1条の突帯を巡らせ、頭部から体部には、木の葉状の突帯をはり付ける。内面には明瞭な指オサエの痕が残る。

#### J 4 無文系土器 (図版12-11)

表面に縄文や爪形文を施さず、突帯も付属しないもので、ナデや指オサエ等の調整のみでしあげたもの。(82)には、補修孔がみられる。

#### J 5 縄文地系土器 (図版12-12)

表面に爪形文や、突帯をもたず縄文を主体とした土器である。縄文を口縁部まで施したもの(88)や、口縁部をナデしているもの(104)、口縁に刻みを施すもの(86)等がある。

#### J 6 沈線文系土器 (図版13-13・図14)

へら状工具や半裁竹管等による道具で、直線や斜格子、X字や山形状等に線を施したものである。(98、99)や(100)は、京都市北白川小倉町遺跡で類例が認められる。一部、諸磯系に含めてもいいものを含んでいる。

#### J 7 諸磯系土器 (図版10-8・図版11-9・10・図12)

中部、関東地方によくみられる諸磯式の系統をもつ土器を一括した。時期的には、諸磯bの中段階の土器が大半を占める。器種は、有孔浅鉢、浅鉢、深鉢等がある。有孔浅鉢(56~59・61~63)は、いわゆるUFOに似た形態をもつもので、無文のものが多い。有文のものは、半裁竹管による木ノ葉文や、平行沈線文、肋骨文等が施されている。これらの土器には、赤色顔料が塗られているもの(56、58、64、69)も少なくない。

#### J 8 底部 (図版13-14・図12)

J1~J6に分類したいずれかに相当する底部である。底径から10cm以上のもの、5~10cm未満のもの、5cm以下の3つに大きく分けられる。形態からは、底部の先端が突出するもの(102、105)と突出しないもの(104、110)がある。また、諸磯系の鉢の底部と思われる、高台状の底部(107)がある。一方、表面の調整では縄文を施すもの(104、106、110)、沈線および、刻み等を施すもの(102、103、105)、無文のもの(108、109)がある。

以上おおまかに分類したが、主な遺構の土器構成を簡単に述べると、SH-1、SH-2の土器は、いずれも北白川下層II a式から大蔵山式の土器を含んでいる。破片数が多いのは、圧倒的に北白川下層II c式に比定される土器である。各時期の土器をみていくと、SH-2では破片数で特殊突帯文系土器がSH-1の約3倍出土している。爪形文系土器(北白川下層II a式)に関していえば、その逆の割合を示している。また、竪穴状建物遺構1の土器もSH-1、2同様に、北白川下層II c式が中心を占めている。土坑、ピットの土器は前述したとおりである。

#### 〈弥生式土器・古式土師器〉

器台(165) 口縁に向かってやや外反して開く受部をもつ。口縁端部は、下方に拡張して面をつくり、外面に円形浮文を張り付ける。調整は外面にハケを施し、内面はナデによる。

甕(162~164) (163、164)は受口状口縁で、(162)は短く外側へ開く口縁をもつ。調

整は、内外面ともにナデと思われるが、磨減が著しいために文様等は不明である。これらの土器は(162)が古墳時代後期と思われる以外は全て弥生時代後期後葉と考えられる。出土地点は、(165、167)がT 2 包含層、(162、164)が上層面P 1、(163)が上層面P 14である。

〈須恵器〉

杯身(161) 内傾するたちあがりをもつもので、陶色TK<sup>®</sup>209、に相当し、7世前葉に比定される。上層面P 14から出土している。

〈黒色土器〉

碗(159、160) 内面に炭素吸着させた黒色土器A類の碗である。形態は、底部から内湾しながら上部へのび、口縁に続く。口縁内面に沈線を巡らす。調整は、外面を指オサエとナデにより、内面にらせん状の暗文を施す。口径は(159)が15.6cm、(160)が15cmで、高さは残存高で(159)が4.7cm(160)が3.8cmである。出土地点は、(159)が上面P 12、(160)がSE-1から出土している。

〈常滑焼〉

甕(166) 口縁から肩部にかけて存在する。口縁部は上下に幅広の縁帯を有するもので、14世紀中頃のものと考えられる。出土地点はSE-1である。

〈石器〉

石器には、石鎌、石錐、石匙、石斧、石皿等が出土している。

石鎌(図版14-15・図16) 石鎌は、確認できたもので58点を数える。形態は、赤堀英三氏の分類<sup>®</sup>に従うと、有茎鎌(A型)、無茎鎌(B型)、尖・円基鎌(C型)の3つに大きく分けられる。無茎鎌は、基部に抉入のある凹基無茎鎌(111~122)、基部が直線的な平基無茎鎌(126)に分けられる。有茎鎌は、基部が直線的になる平基有茎鎌(129)で、包含層から1点出土している。円基鎌は、基部が丸味を帯びるもので、幅が1.5cmとやや広めのもの(125)と、1cmほどのもの(123)がある。石鎌の材質は、チャート製が4個ある以外は、全てサヌカイト製である。

石錐(図版14-15・図16) 石錐は、全て明瞭なつまみ状の頭部をもつもので、錐部の長いものである。頭部が素材である剥片の形状を留めるもの(131)と、つまみ状の頭部も全面に調整が施されたもの(127・130)が存在する。材質は全てサヌカイト製である。

石匙(図版14-16・図16) 横型石匙と縦型石匙に大きく分けられる。ここでは五味一郎氏の分類<sup>®</sup>に従う。横型石匙は、爪鎌形(132・133・134)と草取鎌形(135)とに分けられ、(134)は爪鎌形のミニチュアである。縦型石匙は、鎌形と尖頭器形の2種類が存在する。鎌形は、鈍角鎌形(138)、厚鎌形(137)に分けられる。尖頭器形では、先端が通常の尖頭器に類似したもの(139)と、やや錐の先のように細く加工したもの(140)がある。

材質は、(138) がチャート製、(136) が凝灰岩である以外は全てサヌカイト製である。

石斧(図15) 石斧は、全て摩製石斧で、定角式のもの(170)と乳棒状のもの(169)がある。(170)以外は刃部を欠いている。材質は(170)が緑泥片岩で、他は砂岩系である。

その他、石皿、摩石が出土している。

〈装飾品〉

管玉(図版16-161・図16) SK-17から出土した滑石製の管玉である。長さ3.6cm、厚み1.4cm、孔径0.6~0.7cmである。共伴した大蔵山式土器より、縄文時代前期末葉のものと考えられる。

耳栓(図版16-160・図16) SH-1の埋土中から多量の土器と伴に出土した土製の耳栓である。形態は、鼓形をしたもので、長さ2.6cm、厚み2cm(中央部分は1.4cm)、孔径約0.6cmである。表面には、赤色顔料が塗られている。時期は、SH-1出土遺物と他の遺跡から出土している例<sup>9)</sup>から、縄文時代前期末葉以降の可能性が高い。

〈植物遺体〉(図版16-162~167)

ドングリ類の一種と思われる種子が、SH-1、竪穴状建物遺構から出土している。全て、炭化したものである。大きさは、直径1.2cm~1.3cmのもの、1.6cm~1.8cmのものに大きく分けられる。

No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点	No	出土地点
1	SH-1	23	包含層	45	SH-1	67	SH-1	89	SH-1	111	SH-1	133	包含層	155	SH-2
2	#	24	#	46	SH-2	68	#	90	#	112	#	134	#	156	#
3	#	25	SH-1	47	P-2	69	#	91	#	113	SH-2	135	SH-1	157	#
4	包含層	26	SH-2	48	P-18	70	#	92	#	114	#	136	P-49	158	上面P12
5	SH-1	27	#	49	P-17	71	#	93	#	115	#	137	P-72	159	#
6	#	28	SH-1	50	表探	72	SH-埋藏跡	94	包含層	116	P-44	138	包含層	160	SE-1上層
7	#	29	SK-14	51	包含層	73	#	95	SH-1	117	SH-2周 辺包含層	139	SH-1	161	上面P14
8	包含層	30	P-67	52	P-59	74	#	96	SH-2	118	包含層	140	#	162	上面P1
9	#	31	P-101	53	SH-2	75	SH-2	97	SH-1	119	SH-2	141	SH-2内 土坑周辺	163	上面P14
10	表探	32	SK-9	54	P-83	76	SH-埋下層	98	SH-2	120	P-90	142	P-103	164	上面P1
11	SH-1	33	SE-1	55	P-91	77	#	99	#	121	SH-2	143	SK-3	165	包含層
12	#	34	P-55	56	SH-2内 土坑周辺	78	#	100	#	122	#	144	SH-2	166	SE-1上層
13	#	35	包含層	57	SH-2	79	#	101	#	123	SH-1	145	SH-1	167	包含層
14	竪穴状建 物遺構	36	SK-14	58	SH-1	80	#	102	P-58	124	SH-2	146	SK-17	168	表探
15	SH-1	37	包含層	59	包含層	81	#	103	P-89	125	包含層	147	SH-1	169	P-93
16	#	38	P-16	60	SH-2	82	SH-2	104	SH-1	126	SH-1	148	#	170	表探
17	#	39	SK-9	61	#	83	SH-1	105	#	127	包含層	149	#	#	#
18	SH-2	40	包含層	62	#	84	包含層	106	#	128	表探	150	#	#	#
19	#	41	#	63	#	85	SH-2	107	#	129	包含層	151	#	#	#
20	#	42	#	64	SH-1	86	SH-1	108	#	130	#	152	#	#	#
21	包含層	43	竪穴状建 物遺構	65	#	87	#	109	#	131	SH-1	153	#	#	#
22	SH-1	44	竪穴状建 物遺構	66	#	88	#	110	#	132	包含層	154	#	#	#

表2 遺物出土地点一覧

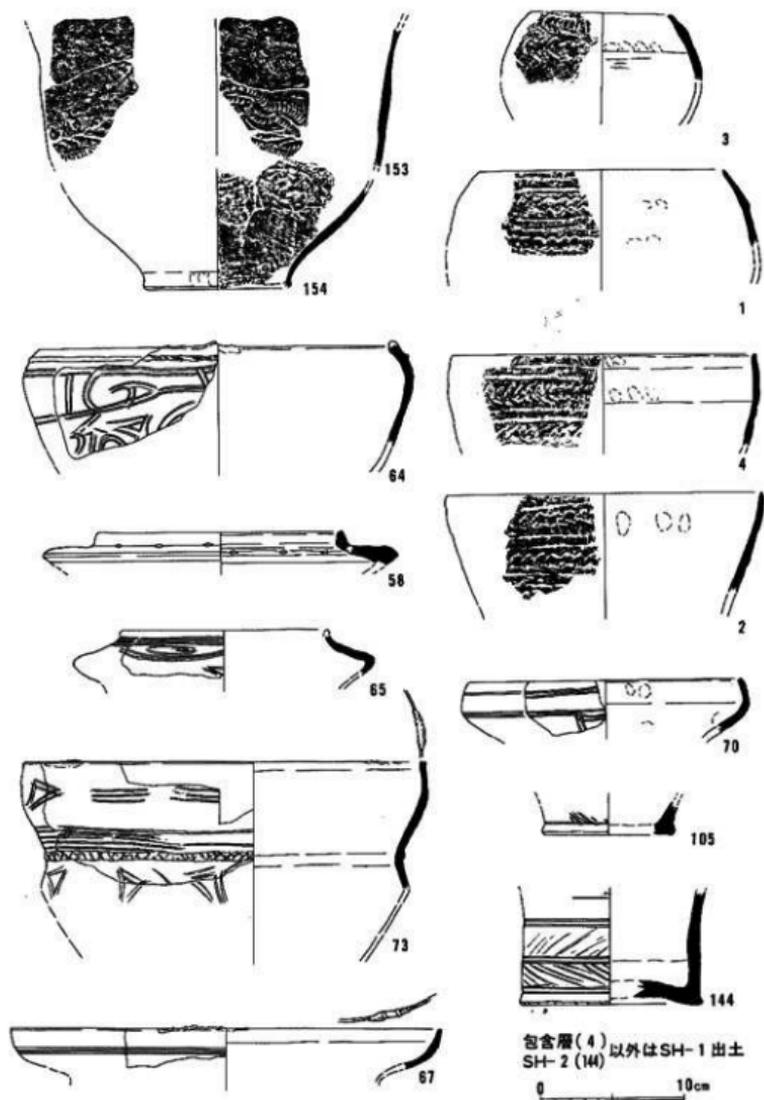
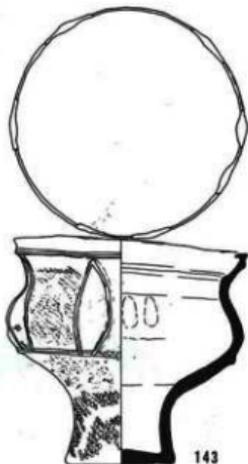


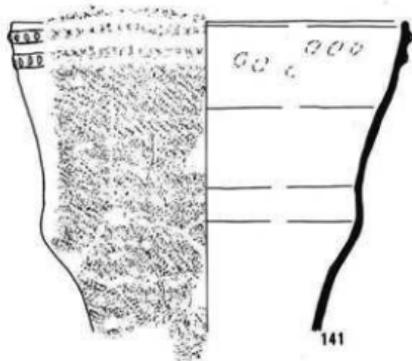
图12 SH-1·SH-2·包含層出土遺物



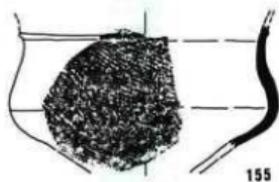
142



143



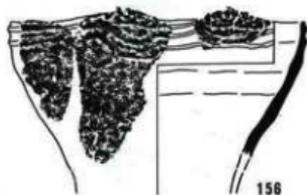
141



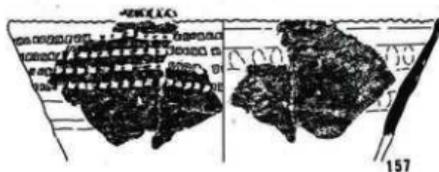
155



56



156



157

0 10cm

SH-2 (56, 141, 155~157)  
SK-3 (143)  
P-103 (142)

图13 SH-2·SK-3·P-103 出土遺物

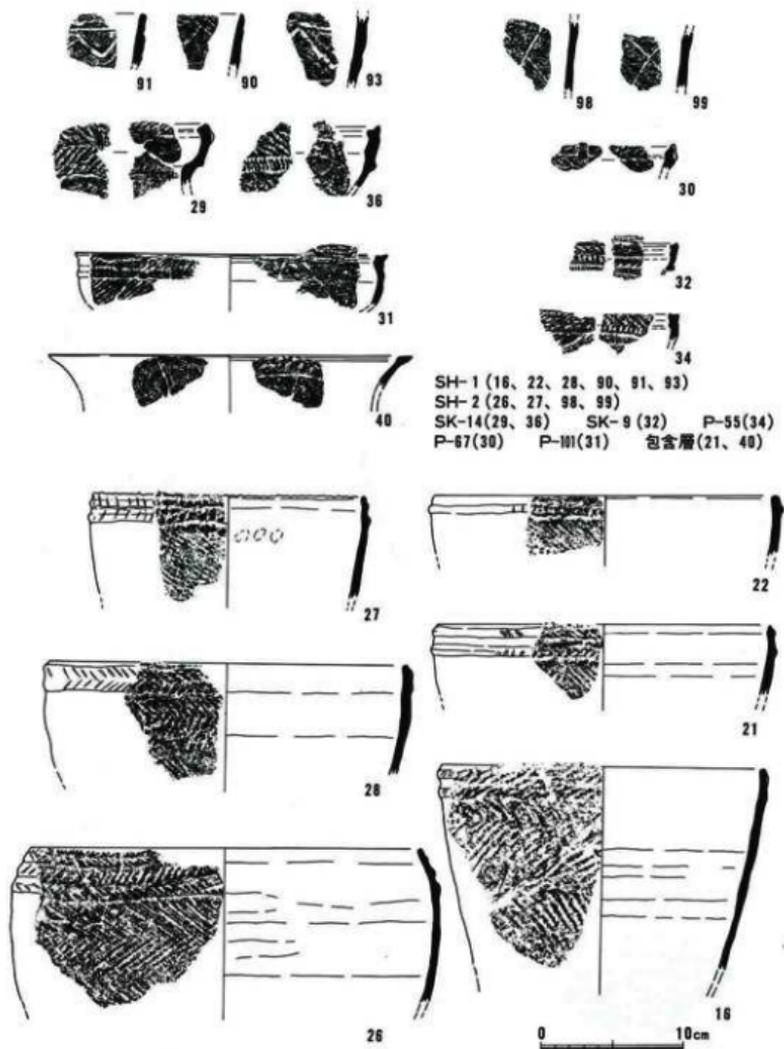


図14 SH-2・土坑・ピット出土遺物

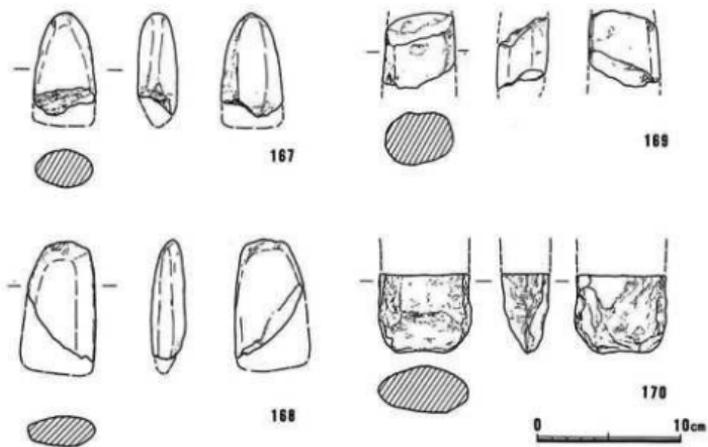
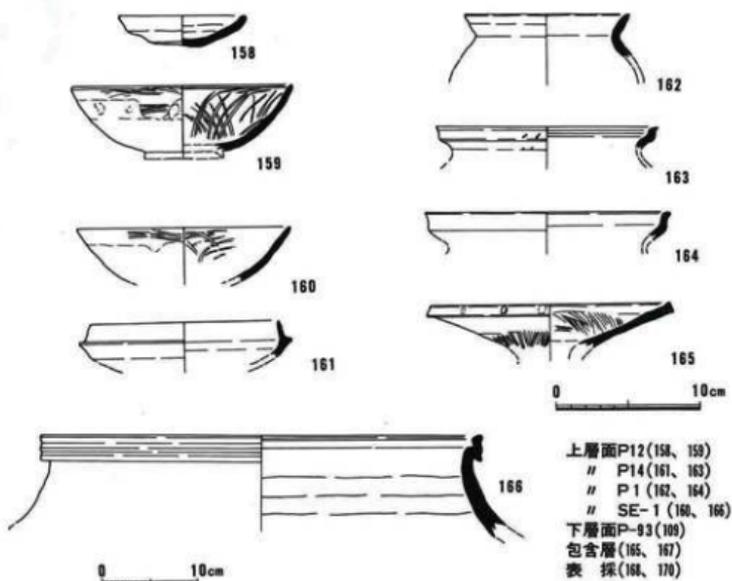


图15 石器·上層面出土遺物

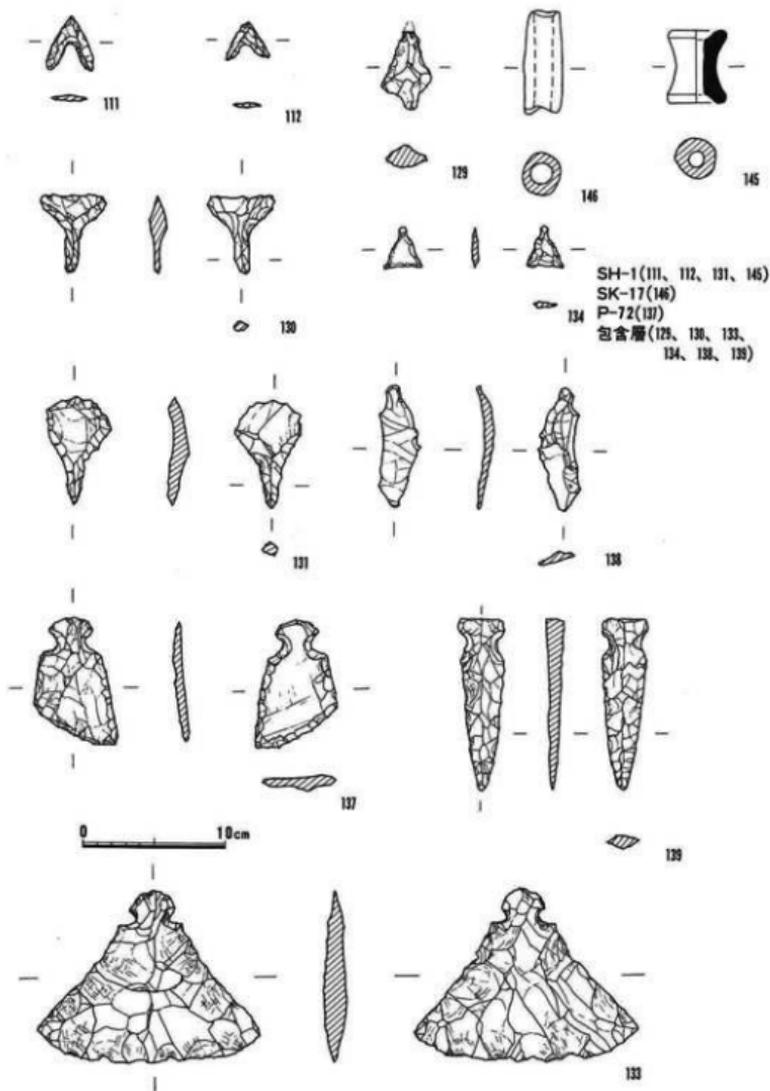


图16 石器·装饰品

#### 4. 考察

縄文時代における建物の柱配置について一下鈎遺跡の例を中心に—

##### (1)はじめに

縄文時代における竪穴住居の研究は、東日本を中心に古くから研究が進められていた。しかし近江を含んだ西日本においては、検出例が少ないために研究がたちおけている。そこで、下鈎遺跡において確認された前期と考えられる竪穴住居および建物と思われる遺構を分析し、延いては他地域の遺跡例との関連を検討し、今後の研究のステップとしていきたい。

縄文時代の竪穴住居は、柱穴がたくさん確認されていても、柱がどのように構成されていたかを記述したものは少ないので、あえて以下の方法で分析する。まず、柱穴と思われるものを深さ、位置等を考慮し、ピックアップする。これらの柱穴を検討しながら線で結ぶことによって、ある一定のパターンをみいだす。上屋構造については検討していないので問題点もあるが、とりあえずこの方法で行う。従って今後の検討いかんによっては、構造が変化する可能性もあることをあらかじめことわっておく。

##### (2)下鈎遺跡の建物群の検討

###### 1) 竪穴住居の柱構成 (図17・18)

SH-1は、前述したように4本による構造のもの(aプラン)と、8本による構造のもの(bプラン)が存在する。4本構成の建物は、西側の辺(P2とP3を結ぶ線)がやや短く、東側(P1とP4を結ぶ線)の辺に向かってやや開く台形状のプランをとる。東側よりに炭化物の集中した部分と、石皿がすえ置かれていた場所から考えれば、この場所に炉があったと思われる、西側が入口であったと考えても不自然ではない。柱間は東側と西側の辺が約2.4m、南と北側の辺が約1.4mである。8本構成の建物は、8角形プランをもつ。ピットが深くやや大きめのP3とP6を結ぶ線を基準軸として、北側の面積が広く、南側が狭いプランをとっている。また北側の広い方は、前述したように入口とした張り出した部分の両脇にP4、P5が存在している。そのピットを結んだ線は、南側のP1、P8を結んだ線と平行する位置にある。楕円形に掘られたプランは、8本による建物構造のときにつくられたものであろう。付属するSK-20は、先の4本柱建物の入口と同じ方向に存在するので、8本柱建物のときに付属する土坑と考えられる。またSK-20に伴う柱穴が、住居と土坑の境に2ヶ所(P9、P10)存在する。さらに拳大の石が土坑の入口に存在していたことから、仕切りを意識していたと思われる。

SH-2は、4本柱を主とした建物(aプラン)と6本柱の建物(bプラン)が存在する。4本柱の建物は、住居の掘り込みのほぼ中心付近に存在し、ピットを少しずらして建

て替えの痕がみられる。それぞれの辺の長さはほぼ等しいが、プランは正方形ではなく、ややくずれている。6本柱の建物は、ほぼ東西方向に主軸をとる住居で、張り出し部分の存在する西側が入口と考え、その両脇にP1とP6が存在する。それとつながるのが、P2、3、4、5を結んだ六角形配置（b1プラン）と、P2、7、8、5を結んだ六角形配置（b2プラン）があり、いずれもP2、P5を結んだ線を軸とするものである。前者は、東側が台形構造をとるもので、後者はほぼ正方形構造をとるものである。P1とP6を入口に付属する柱とするならば、4本柱を基本とした変形タイプと考えられる。SK-21は柱の配置と主軸方向から考えれば、6本柱構造の建物に伴うものであったと考えたい。また、SH-1bの土坑が入口の右側に付属している点も共通していることになる。aプランとbプランの新旧関係は、bプラン時に存在したと思われる屋内土坑がaプラン時の柱に切られているのでbプランの方が古い建物であることがいえる。

#### a) 竪穴状建物遺構と建物A~Jの柱構成（図17・18）

竪穴状建物遺構1（旧建物H）の柱構成は、前述したように4本柱を支柱穴とするものである。南の辺（P2とP3を結ぶ辺）より北の辺（P1とP5を結ぶ線）が長い台形状プランをとる。中央付近にやや大きめのP5が存在するが、他にもピットが存在するので建て替え時のピットであった可能性も考えられる。

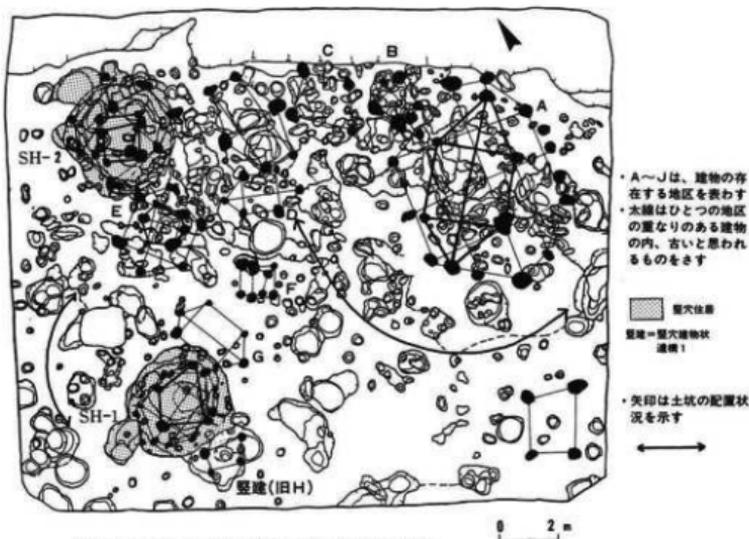


図17 竪穴住居と建物の柱配置試案と位置関係

建物A地区 2棟の大型建物が重なっている。A1は12本の支柱穴によって構成されたもので、P12とP6を結ぶ線（東西ライン）、P3とP9を結ぶ線（南北ライン）の2本を基準軸とした八角形プランの建物である。中心となるP3とP9はやや柱穴が大きい。平面形ではP3・P9ラインを中心として西が狭く、東が広い面積につくられる。A1のプランは、SH-1bプランに類似している。A2は、東西方向に長い六角形プランをとるもので、P2とP5を結んだ線を基準軸として、北側の面積が広く、南側がやや狭い形をとる。

建物B地区 6本を支柱穴とした六角形配置の小型建物である。P6とP3を結んだ線を基準軸にほぼ左右対称形をとる。南側のP1、P6、P5が隣接して存在している点に特徴がある。

建物C地区 4本を支柱穴とした台形プランをとる。北側の辺（P1とP2を結ぶ線）が短く、南側（P2とP4を結ぶ線）の辺がやや長い。同様なプランとして、建物IやSH-1aがある。

建物D地区 6本を支柱穴とする東西に細長い六角形プランをとる。P2とP5を結んだ線を基準軸として、北側の面積が広く、南側が狭い。建物A2を小さくしたプランである。

建物E地区 2棟の建物が存在する。E1は、6本を支柱穴とした六角形プランである。P2とP6を結ぶ線を基準軸として北側がやや広く、南側がやや狭い。基準軸と直交する2本の辺の長さにあまり差がない点に特徴がある。このタイプは建物E1のみである。E2は、6本を支柱穴とする六角形プランである。南側ピットの3つ（P1、6、5）が隣接して存在する点や大きさの点で建物Bと類似する。

建物F地区 4本を支柱穴としたプランで、建て替えが認められる。SH-2aプランの建て替え方と類似している。

建物G地区 6本を支柱穴とした南北に細長い六角形プランをもつ。P2とP5を基準軸として、西側が東側よりやや広い面積をもつ。建物A2に類似している。

建物I地区 建物Cと同様な台形プランをもつ。

建物J地区 P2とP5を結んだ線を基準軸とした六角形プランで、基準軸に直交する2つの辺が基準軸より長いタイプである。主軸方向は、ほぼ東西を向く。このタイプは、SH-2のb2プランに比較的類似している。

以上、建物の柱配置を簡単に記述したが、これらを整理すると4角形（4本柱）、6角形（6本柱）、8角形（8、12本柱）のものが存在する。4角形のプランは台形と正方形に近いプランの2種類が存在する。6角形プランは一番多く、以下の4つに細分できる。

6 I型…基本軸に直行する2本の辺の長さが、一方が長く、もう一方が短いもの。

6 II型…基準軸の長さが直交する2本の辺より2倍以上長いもの。

6 III型…基準軸の長さが直交する2本の辺の長さの2倍未満であるもの。もしくは、両者の長さがほぼ同じか、長さにあまり差がないもの。

6 IV型…基準軸の長さが直交する2本の辺より長いもの。

また柱配置内の空間面積のとり方は、基準軸を境にある一方を広くとる方法と、両者をほぼ同じ面積にとる方法があり、基準軸の位置によって変化する。このことは、入口の位置や、炉の位置、上屋構造等が影響していることが想定できる。

一方、大きさからは6m以上の大型、3～4mの中型、2m前後の小型に分けられる。

大型は、集会場的な役割をもち、中型の建物を通常の住居とすれば、小型のものは倉庫もしくは作業場的な性格をもっていたとする考え方もできる。問題は、これらの建物が全て同時期に存在していたわけではないので、各時期ごとにどの建物が存在していたのかを考えていかなければならないことである。しかし建物に確実に伴う土器は少ないので、あえて前述した分類と建物間の距離を考慮して図19のように試案として提示してみた。ここで考えられるのは、各時期に2～3棟で構成している場合が多いことがいえ、4期、5期には、集会場的な大型建物と2棟からなる建物による構成がみられ、5期では建物A1を中心に、SH-1とSH-2が両側にほぼ対

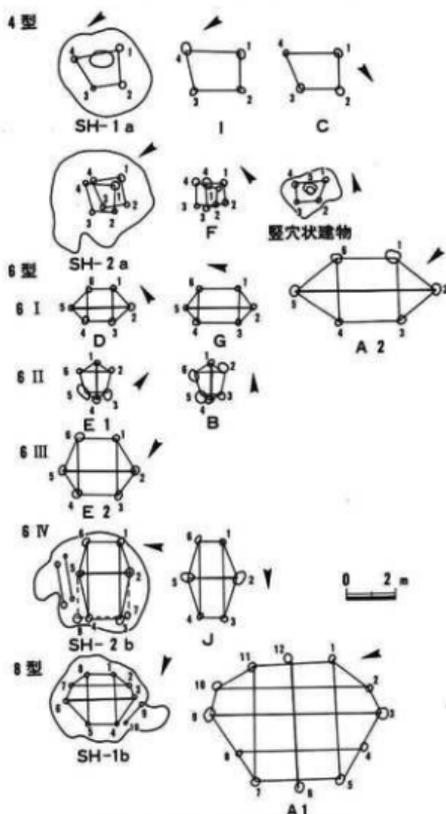


図18 下鉤遺跡縄文建物配置プラン

象的に配置されている状況となっている。土坑に関しては、一部を除いて建て物と重ならないように配列されているように思われる。土坑の存在する位置は、建物A1の周囲とSH-1の北側の2ヶ所に集中している。いずれも矢印に示したように場所をきめて、環状に意識して配列させていたことが考えられる。

### (3)おわりに

最後に、他の遺跡例との比較を述べてまとめとしたい。

下鈎遺跡で想定した柱構成プランを、比較的残りがよく、柱構成のよくわかる近江における縄文時代の竪穴住居にあてはめてみた(図20)。栗東町孤塚遺跡<sup>9</sup>例と能登川町林石田遺跡<sup>10</sup>例は、いずれも6Ⅲ型となる。この2例は、中期末葉から後期初頭頃の住居であるが、掘り込みプランは前期と考えられる下鈎SH-2の不整方円形プランに類似する。これらは掘り方のプランを柱配置に合わせて、直線的な辺をもたせたり、円形状に成形させたりしている。また、中期と考えられている五箇荘町新堂遺跡<sup>11</sup>の住居は、下鈎の建物A1のような2本の基準軸(十字状)によって構成されていたと考えられ、基準軸を境に左右対象の8角形プランをもつ。埋壘が基準軸に通る位置に存在し、計画的な配置がみられる。掘り込みプランは下鈎SH-1b同様に楕円形である。

一方、山東町番ノ面遺跡<sup>12</sup>例は、近江において円、楕円、不整方円形が多く占める中で数

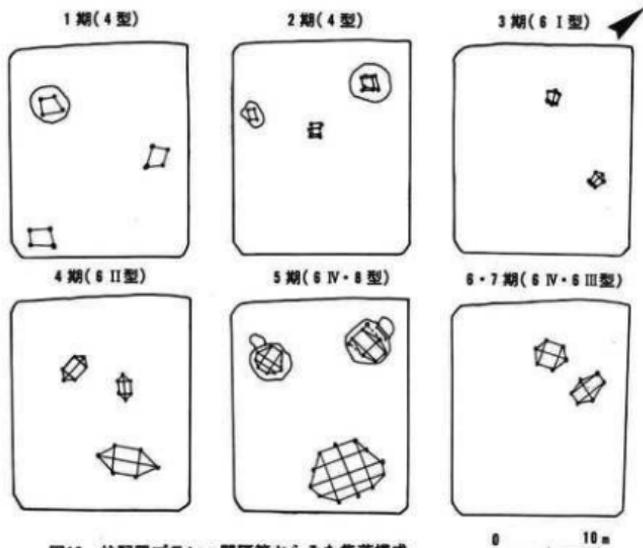


図19 柱配置プラン・間隔等からみた集落構成

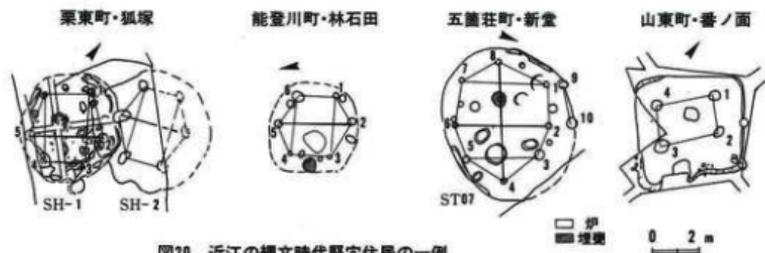


図20 近江の縄文時代竪穴住居の一例

少ない方形の掘り込みプランをもつ住居である。柱構成のプランは、4本柱による長方形である。湖北地域ということもあって東日本文化的な要素が強いともいえるかもしれないが、東海地方の住居が、方形と円形が同じくらいみられる<sup>9)</sup>ので、一概には判断できない。近江の場合は、現段階では方形が少ないように思えるが、そのかわりに円形と方形を混合した不整方形プランが多く存在していたことが想定できる。下鈎遺跡にみられた4本柱構成の建物も、方形もしくは不整方形形状をした掘り込みをもつ住居であった可能性が考えられる。

次に土坑を付属した竪穴住居は、現段階では近江には下鈎遺跡例を除いて認められていない。このタイプの竪穴住居は、長野や富山等の地域に認められる。富山県吉峰遺跡の報告<sup>9)</sup>では土坑の付属位置によって時期分けを行っており、下鈎遺跡のように住居の隅に付属するものは、前期中葉頃のものとしてされている。このことは下鈎SH-1、SH-2の年代と大きく開くものではないが、やや新しくなる可能性をもっている。近江より西の地域では、兵庫県神鍋遺跡例の方形住居に屋内土坑が認められる以外は、下鈎のような土坑を付属した住居は管見の限りでは知られていないので、近江という東西文化の接点という地域性から、東日本文化（中部、北陸の文化）が建物にも浸透していたと考えておきたい。

## 5. 小結

今回の調査では、縄文時代前期を中心とした下層面の遺構と、弥生時代後期後葉から室町時代以降にいたる上層面の遺構が確認された。特に縄文時代前期と考えられる建物群の遺構は、西日本では数少ない資料のひとつとして今後の集落研究にはかせない資料である。住居形態では、後の中期から後期へとつながる形態がみられるように一定のパターンがみられ、主柱穴は4本から6本へ変化していく傾向が考えられる。また住居の隅に屋内土坑を付属する点から、中部・北陸（東日本）との関連を想定できた。東日本との関連は、住居形態以外に遺物にも如実に表われている。土器では、中部・関東地方の諸磯式土器を

はじめ、北陸地方の規ヶ森式土器に類似したものや、岐阜県落合五郎遺跡<sup>⑩</sup>にみられるような土器に類似したもの(12)もみられる。また、SH-1から出土した耳栓も東日本によくみられる遺物のひとつである。さらに石器では、東北地方に主流があるとされる尖頭器形石匙が2点出土していることから、広範囲な交流が行われていたことがいえる。

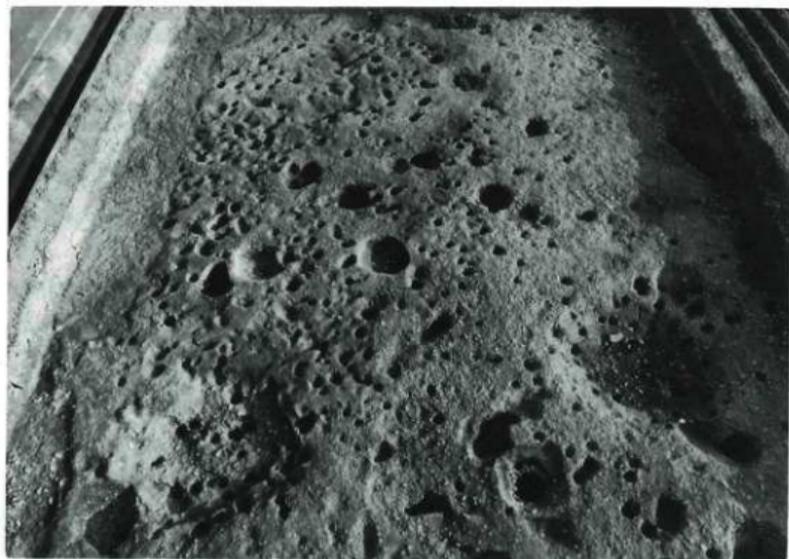
以上の要素は、近江が東日本と西日本の接点にある立地条件から生まれたものであり、両者の文化を解明する上で重要な資料を与えてくれた。

## 注・参考文献

- ① 佐伯英樹「弥生時代後期の大規模な掘立柱建物」『滋賀考古』第8号 滋賀考古学研究会 1992
- ② 佐伯英樹「Z1下町東遺跡」『埋蔵文化財発掘調査1990年度年報』財団法人東東町文化体育振興事業団 1991
- ③ 松村浩「東東歴史民俗博物館」氏より教示。
- ④ 雨森智美「東東町下町遺跡蓮台寺跡地の調査について」『滋賀文化財』No167 財団法人滋賀県文化財保護協会 1992
- ⑤ 「埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報」財団法人東東町文化体育振興事業団 1989
- ⑥ 「埋蔵文化財発掘調査1989年度年報」財団法人東東町文化体育振興事業団 1990
- ⑦ 「埋蔵文化財発掘調査1990年度年報」財団法人東東町文化体育振興事業団 1991
- ⑧ 「東東町埋蔵文化財発掘調査1991年度年報」財団法人東東町文化体育振興事業団 1992
- ⑨ 赤堀英三「石器研究の一方一石鏝に関する二、三の試み」『人類学雑誌』44-3 東京人類学会 1929
- ⑩ 鈴木道之助「石鏝」『縄文文化の研究』7 道具と技術 雄山閣 1983
- ⑪ 矢島國雄・前山精明「石鏝」『縄文文化の研究』7 道具と技術 雄山閣 1983
- ⑫ 五味一郎「石器Ⅱ・石鏝」『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化 雄山閣 1983
- ⑬ 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第16冊 1935
- ⑭ 網谷克彦「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ 雄山閣 1981
- ⑮ 網谷克彦「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』草創期早期前期 小学館 1989
- ⑯ 谷口康浩「館儀式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』草創期早期前期 小学館 1989
- ⑰ 泉拓良ほか「第2館遺物」『粟津貝塚遺跡遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1984
- ⑱ 中村善則「掃磨大蔵山遺跡Ⅰ—縄文土器」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
- ⑲ 千葉豊・栗田哲郎ほか「先史時代の北白川」京都大学文学部博物館 1991
- ⑳ 土坑(P8、12)の墳を参照
- ㉑ 造酒 豊「粟山川改修工事に伴う東東町久徳家墓地発掘調査報告書」滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986
- ㉒ 紅府 弘・増子康真・山口 克・水野寛之著「東海先史文化の諸段階(資料編Ⅰ)」1977
- ㉓ 鳥浜貝塚研究グループ編「鳥浜貝塚縄文時代前期を主とする低湿地遺跡の調査」1～5 滋賀県教育委員会・若狭歴史民俗資料館 1979～1985
- ㉔ 小杉 康「木の葉文浅鉢形土器の行方—土器変形形態の一樣相—」『季刊考古学』第12号 雄山閣 1985
- ㉕ 越塚一也「北陸における縄文時代前期中・後葉土器の編年について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983
- ㉖ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1983
- ㉗ 玉田芳英「2. 出土遺物からみた東西交流」『粟津湖底遺跡—大津市晴嵐町地先—』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1992
- ㉘ 菅森健一「住まいのかたち—上層復元の試み—」『季刊考古学』第32号 雄山閣 1990
- ㉙ 西邦和「埋蔵を伴う縄文時代後期の竪穴住居—滋賀県神崎郡能登川町林・石田遺跡—」『滋賀考古』第9号 滋賀考古学研究会 1993
- ㉚ 林 純「新堂遺跡」『第62回滋賀県埋蔵文化財センター研究会レジュメ』1993
- ㉛ 小江康雄「滋賀県栗ノ園縄文式住居遺跡」『京都学芸大学学報A-No9』京都学芸大学 1956
- ㉜ 石野博信著「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館 1990
- ㉝ 柳井 睦・神保孝造「富山県立山町古峰遺跡第4次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会 1975
- ㉞ 長崎元廣「中部地方における縄文前期の竪穴住居」『信濃』第31巻第2号 信濃史学会 1979
- ㉟ 村田文夫「関東地方における縄文時代前期の竪穴住居について」『考古学雑誌』第53巻第3号 日本考古学会 1967
- ㊱ 樋口昇一「中部山岳地帯における前期縄文時代住居址」『信濃』第9巻第11号 信濃史学会 1957



1. T1からT2(西から東)方向を望む



2. T2調査区(西から東を望む)



3. SH-1 と竪穴状建物遺構全景



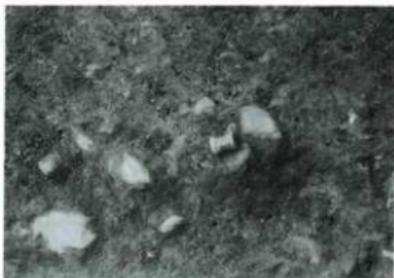
4. SH-1 上層遺物出土状況



5. SH-1 集石状況



6. SH-1 上層遺物出土状況近景



7. SH-1 耳栓出土状況



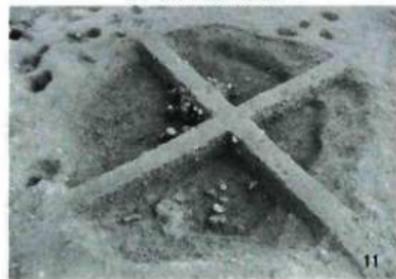
8. SH-2全景(左端SK-21)



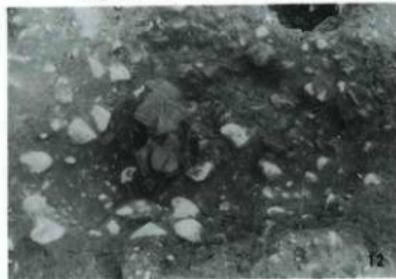
9. SH-2 集石状況



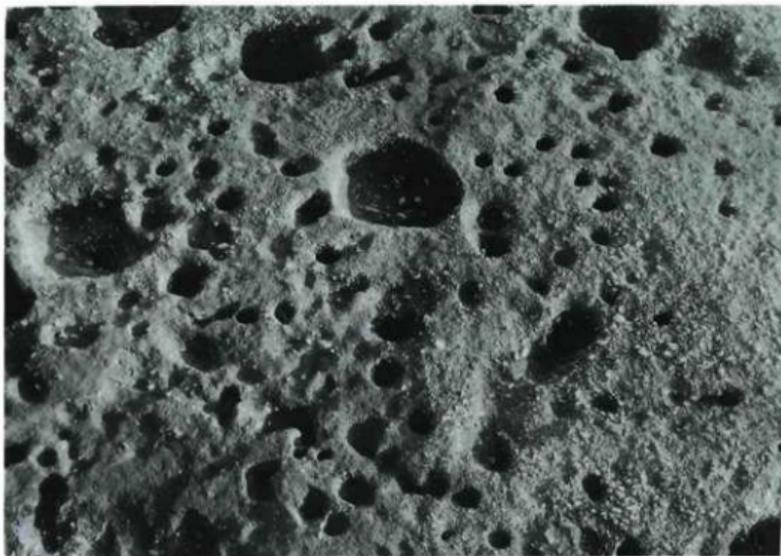
10. SH-2内土坑周辺出土遺物



11. 遺物出土状況



12. SH-2土坑周辺出土遺物



13. 建物Dと建物F周辺



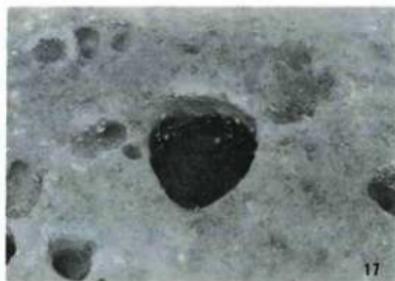
14. 建物Aと建物B周辺



15. 建物A地区周辺土坑群



16. SK-6



17. SK-41



18. SK-20



19. SK-14, 17



20. SE-1



21. SK-3 遺物出土状況



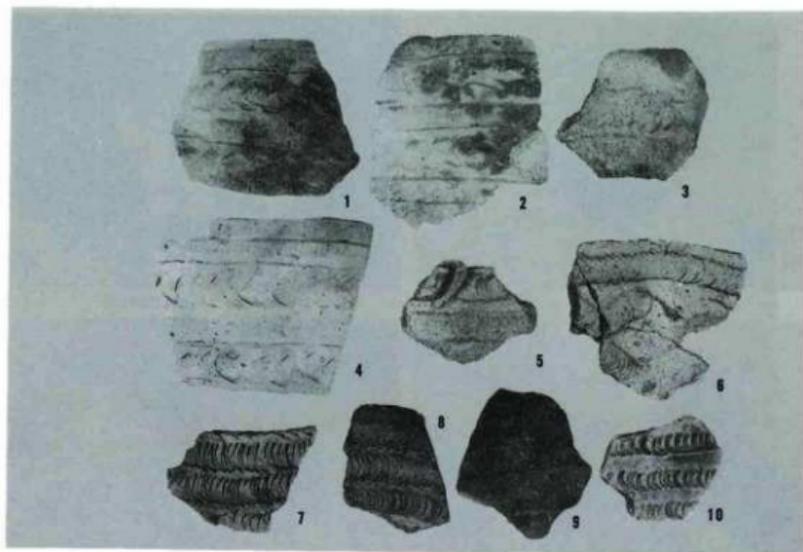
22. P-93 出土石片



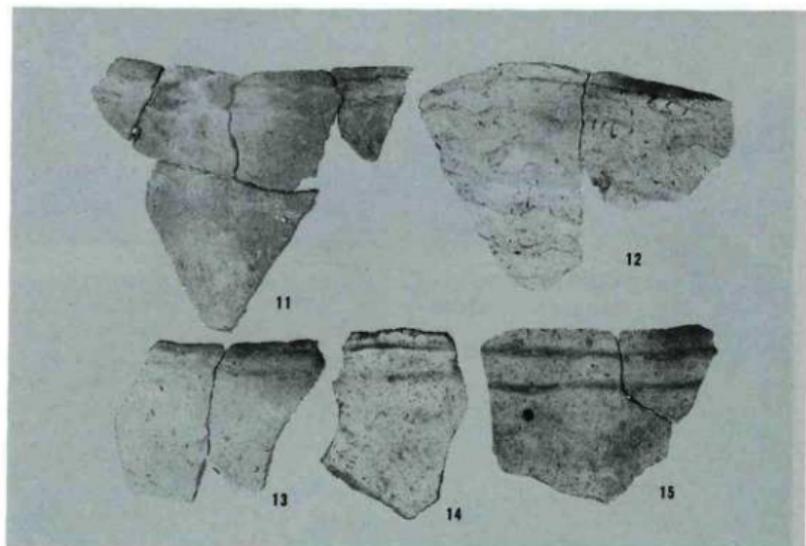
23. P-103 遺物出土状況



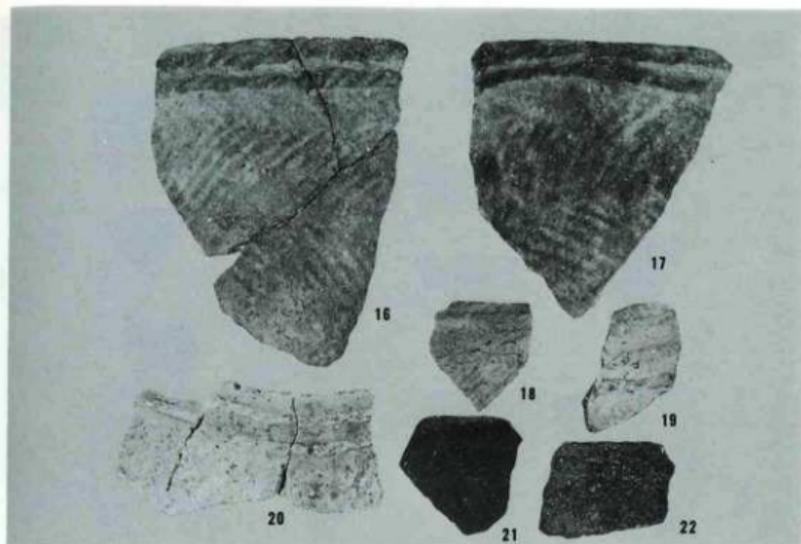
24. 現地説明会風景(1991.12.14)



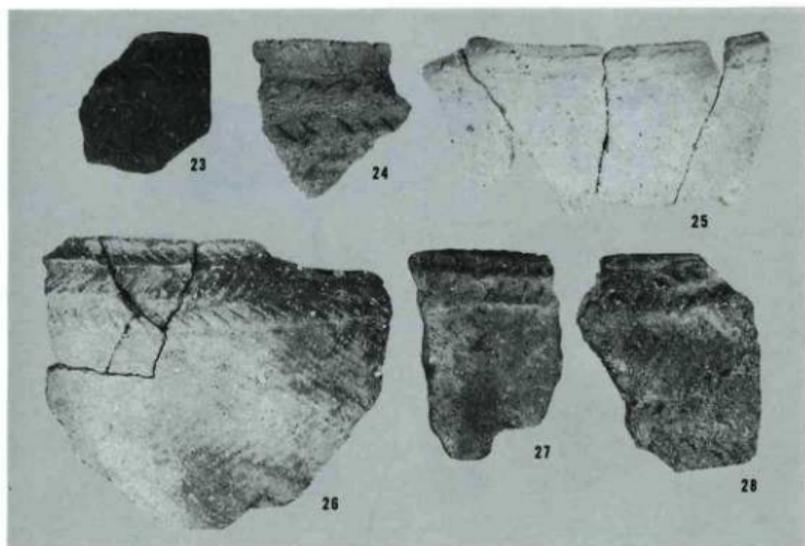
1. J1 爪形文系土器



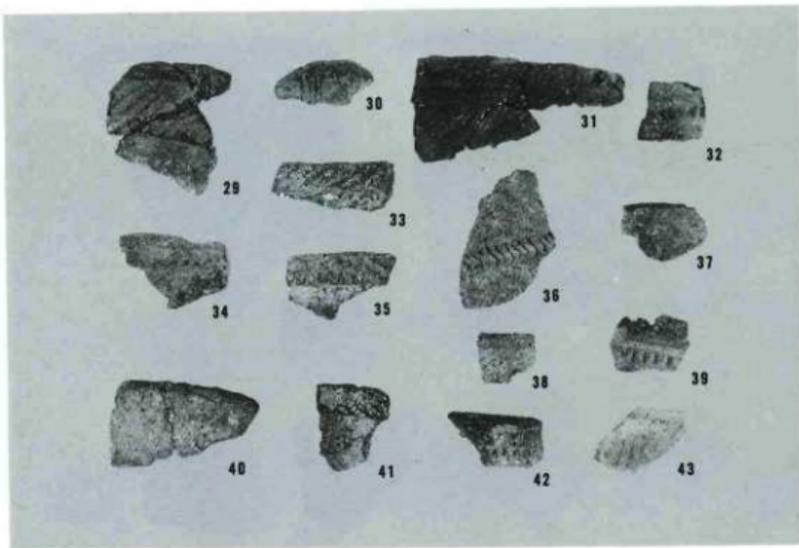
2. J2 突帯文系土器



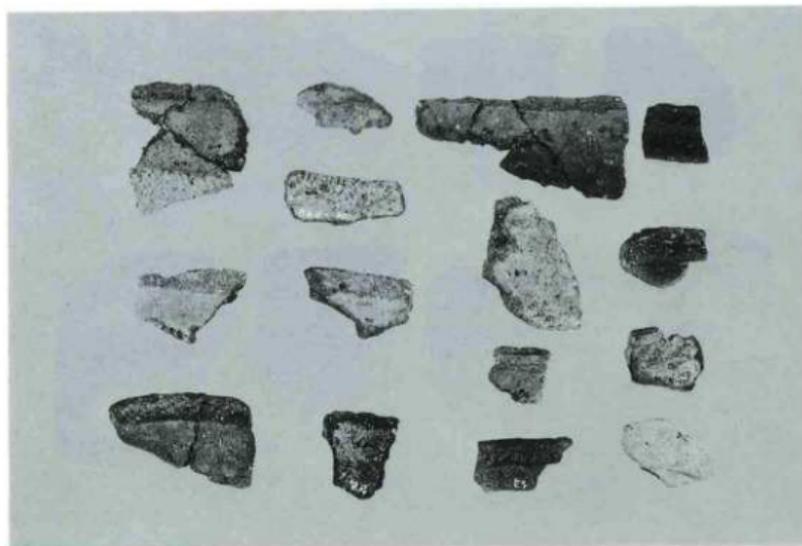
3. J2 突帯文系土器(縄文突帯)



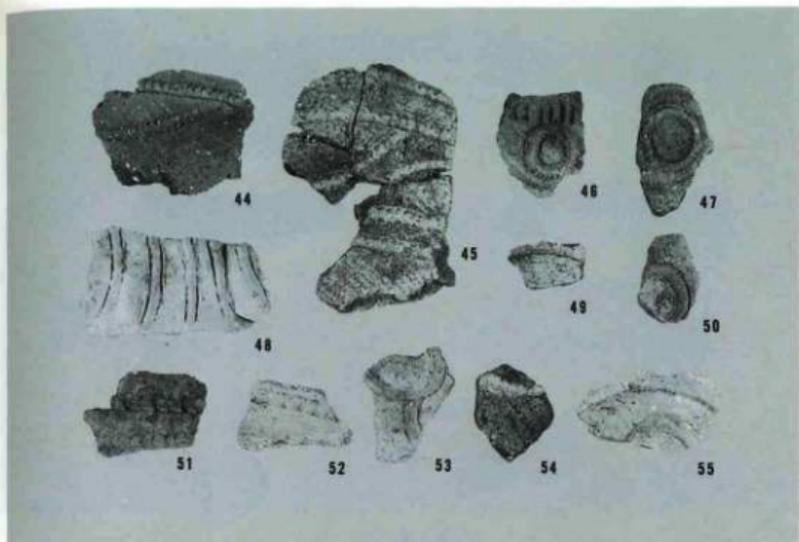
4. J2 突帯文系土器(刻み突帯)



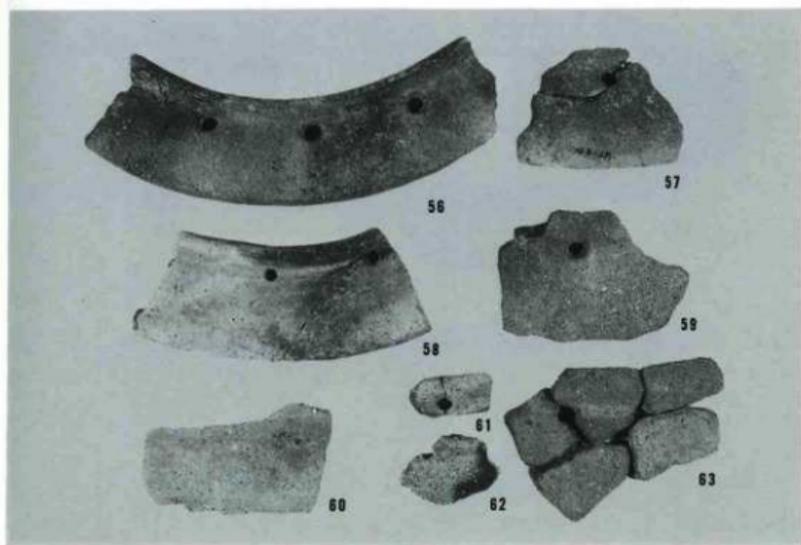
5. J 3 特殊突帯文系土器(表)



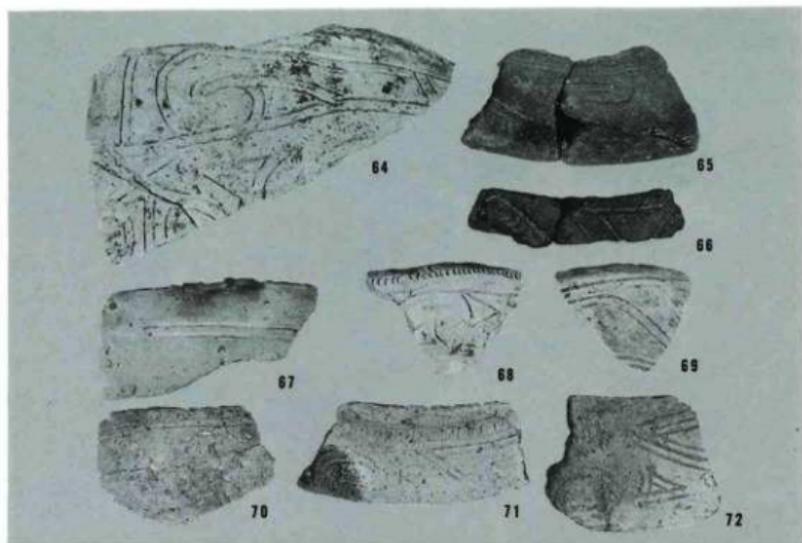
6. J 3 特殊突帯文系土器(裏)



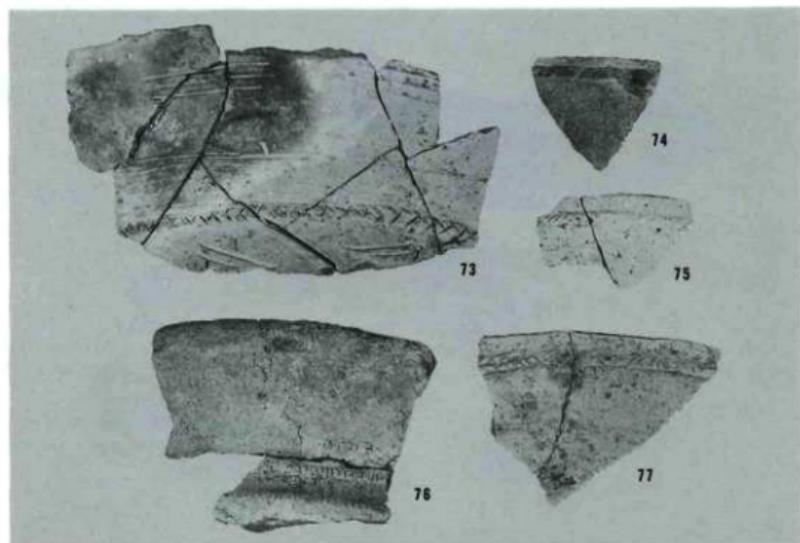
7. J 3 特殊突帶文系土器



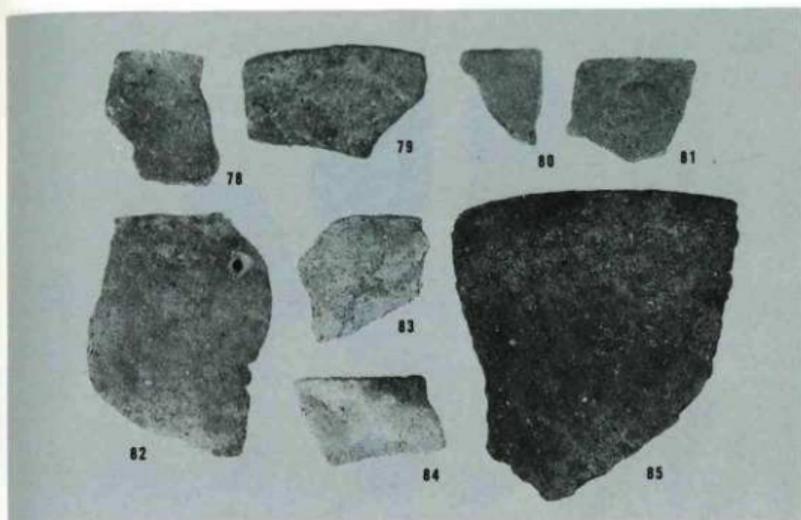
8. J 7 踏機系土器



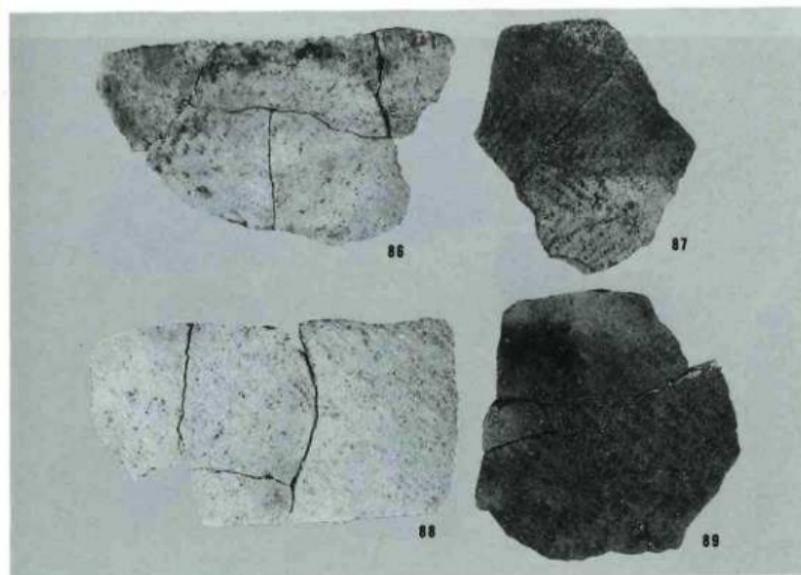
9. J 7 龍磯系土器



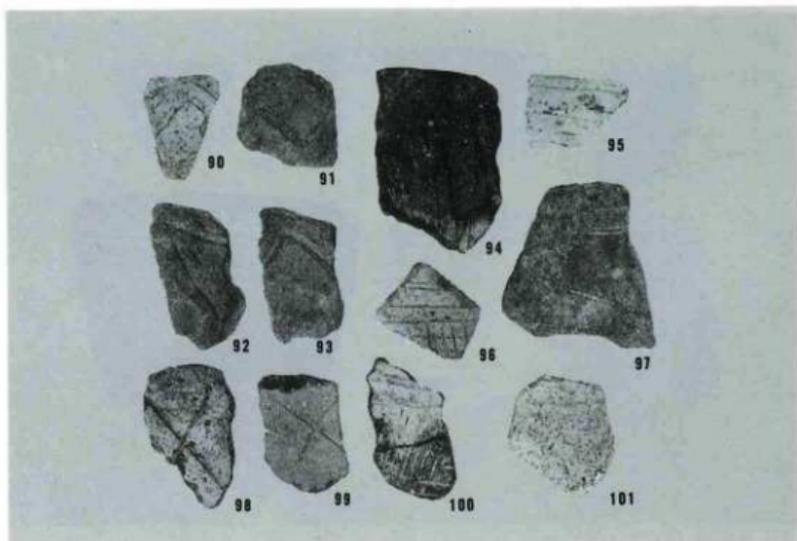
10. J 7 龍磯系土器



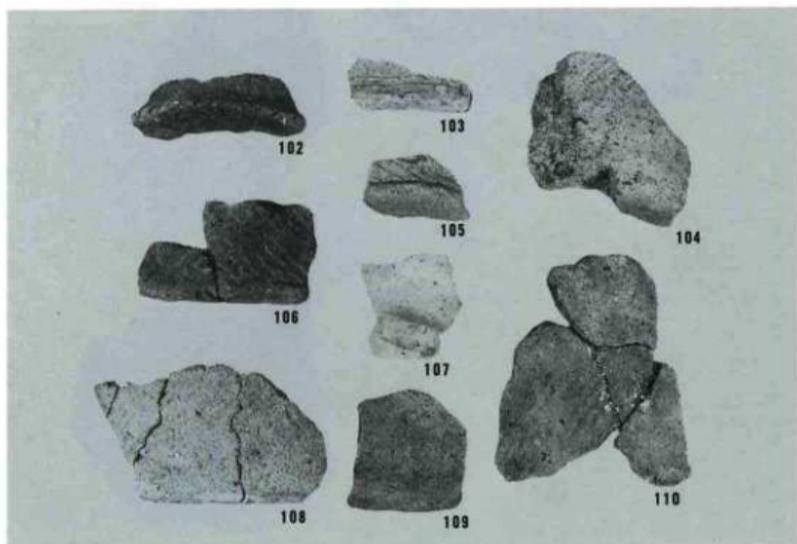
11. J 4 無文系土器



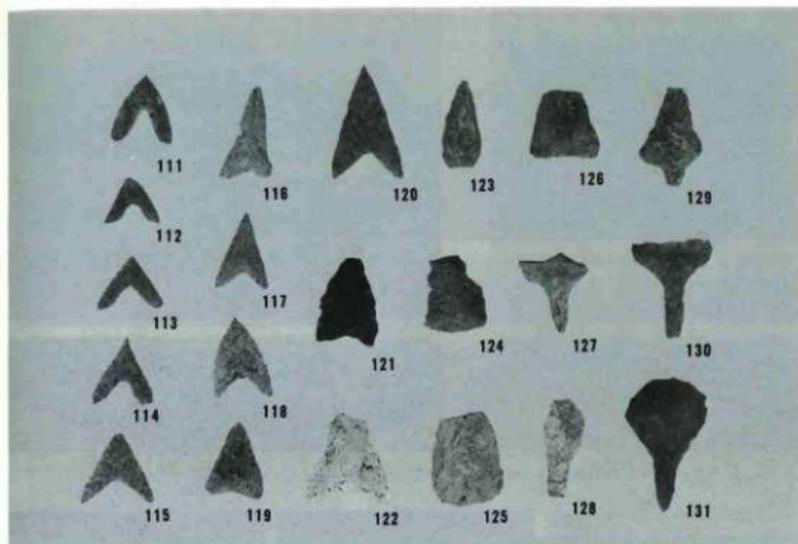
12. J 5 縄文地系土器



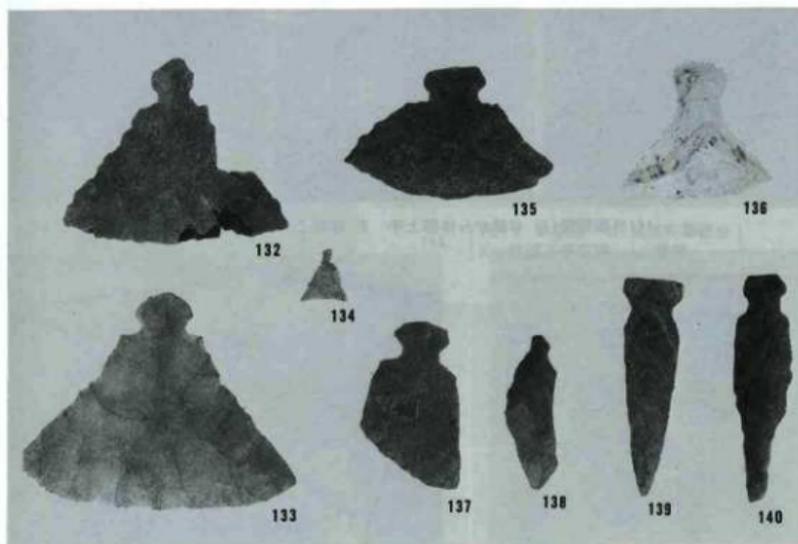
13. J 6 沈綫文系土器



14. J 6 底部



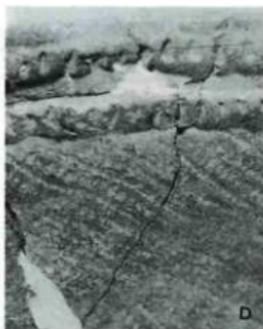
15. 石鏃・石鏃



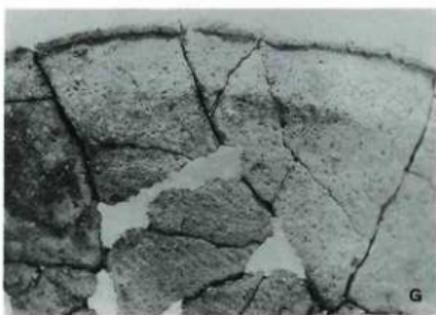
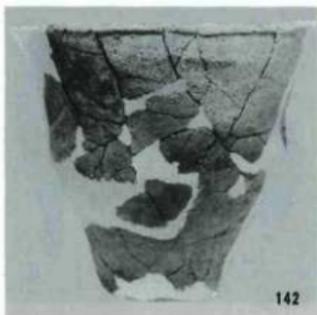
16. 石鏃



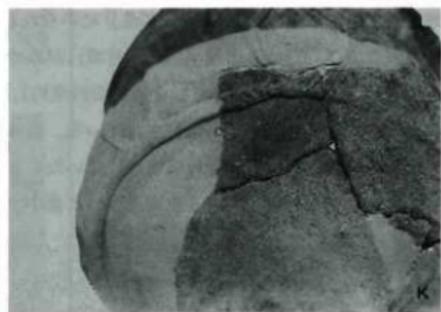
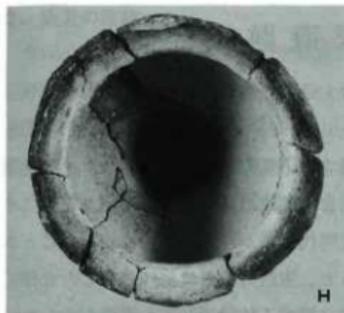
141各部分 (A 口縁部 B 内面指圧痕 C 口縁上部)



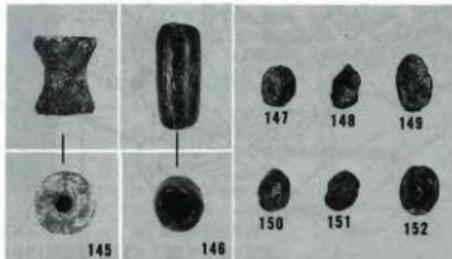
141外面調整 (D 口縁から体部上半 E 体部上半 F 体部下半)



142. (G 口縁部突帯と外面調整部分)



143. (H、I 口縁部 J 突珠突帯部分)  
 (K 体部下半突帯 L 底部)



## 第2章 狐塚遺跡

### 1. 位置と環境

滋賀県栗太郡栗東町のほぼ中心に、孤立峰の安養寺山(標高234m)が存在し、その琵琶湖側に狐塚遺跡が存在する。遺跡の北側には葉山川、南側には金勝川が西に流れる。こうした恵まれた自然環境のもとで、狐塚遺跡では縄文時代中期から人々が住んでいたことがわかっている。しかし稲作を始める弥生時代になると、生活の舞台は耕作に適した北部の沖積平野に移る。弥生時代中期後葉には狐塚遺跡に北接する坊袋遺跡でも遺構がみられ、弥生時代末頃には狐塚遺跡でも遺構・遺物がみられる。

古墳時代の集落は、野洲川自然堤防上の辻・高野・岩畑遺跡に集中し、ほかに中沢・小柿遺跡等があり、野尻遺跡では豪族居館とみられる遺構が検出されている。安養寺山西麓から西側には、中期以降次々と古墳が築造され、椿山・大塚越古墳のように全長100m近い規模をもつものや、馬具・武具をはじめとする豊かな副葬品をもつ新開古墳等がある。狐塚遺跡でも古絵図(「安養寺共有文書」)にみられる「けつね塚」(狐塚1号墳)のほか、1991年の調査で径約12mの円墳(狐塚2号墳)がみつまっている。

白鳳～奈良時代になると、狐塚遺跡の西南約1.3kmの岡遺跡には栗太郡衙が、北東約1kmの手原遺跡には白鳳寺院が想定されている。狐塚遺跡では集落跡がみつかり、墨書土器が出土している。11世紀以降は室町時代にいたるまで、狐塚遺跡では集落が展開する。集落は近世には遺跡の東側を通る東海道添いに集中するようになる。



図1 調査周辺図(S=1:20000)

## 2. 調査の経緯

今回の調査地は、滋賀県栗太郡栗東町安養寺7丁目616-1に所在する。1991年3月14日に高野俊三氏より倉庫建設に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼が出されたが、隣接地の調査で遺構が確認されていたため、1991年10月8日より調査を開始した。調査中、古墳周濠の一部が発見されたため、高野氏と協議し隣接する駐車場予定地に調査区を広げ、精査を行なう。12月8日、1月25日に現地説明会を行い、1992年1月31日に調査を終了した。



図2 トレンチ位置図



写1 第1回現地説明会



写2 木製品保護のため、P、E、Gを塗る

表1 調査スケジュール	
1991	8 試掘→耕土除去
10月	9 ↑ 検出 ・SX-1サブトレンチで 笠形木製品を確認
	21 ↓
	22 検出写真
	23 小溝掘削
	24 SX-3掘削
	28 ↑ SX-1上層掘削
11月	5 ↓
	6 ↑ SX-1中層掘削
	11 ↓ ↑ SX-2掘削 SK-1掘削
	12 ↓
	13 pit掘削、そうじ
	15 全景写真
	20 ↑ SX-1下層、最下層掘削
	26 ↓ 木製品検出
	29 ↑
	30 SX-1土層図作成 ↑ SX-1
12月	2 ↓ 平面図作成 ↓ 拡張
	3 ↑
	6 ↑ 写真撮影のためそうじ 記者発表
	7 ↑ 全景写真
	8 ↓ 第1回現地説明会
	11 ↑ 木製品とりあげ
	13 ↓ 拡張区SX-1
	14 ↓ 上層掘削
	16 ↑ 拡張区SX-1
	17 ↑ 中層掘削
	21 ↓ SX-1墳丘精査
	年末年始休暇
1992	1月
	7 ↓ SX-1墳丘精査
	10 ↑ 拡張区(前方部)SX-1
	17 ↓ 下層、最下層掘削、木製品検出
	18 ↑ 平面図作成
	21 ↓ I そうじ、遺物とりあげ
	24 SD-1掘削
	25 第2回現地説明会(栗東町文化財講座)
	26 実測
	28 航空写真撮影
	29 花粉サンプル採取(金原氏) ↑
	30 葦石平面図作成 撤収
	31 墳丘断り調査 ↓

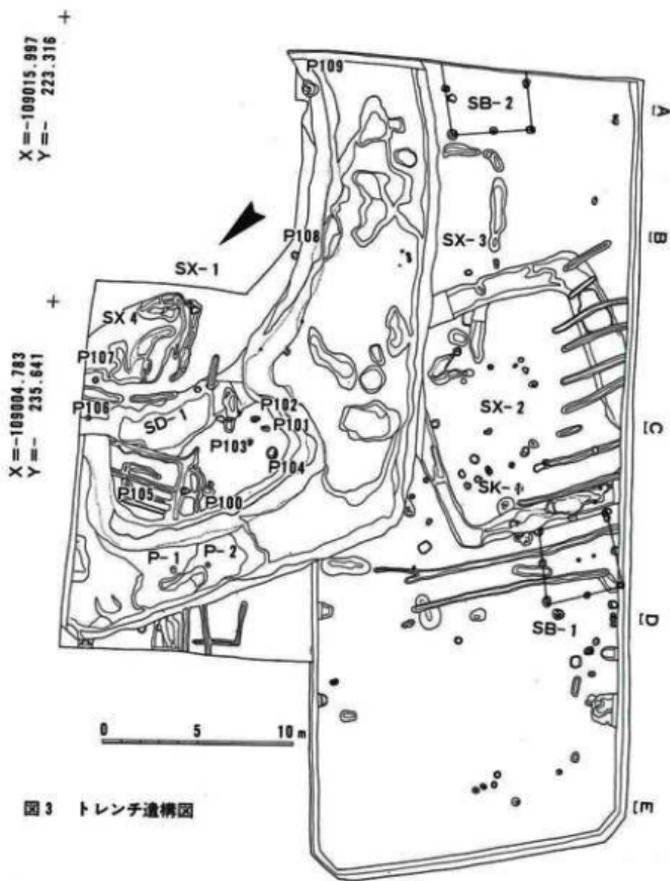


図3 トレンチ遺構図

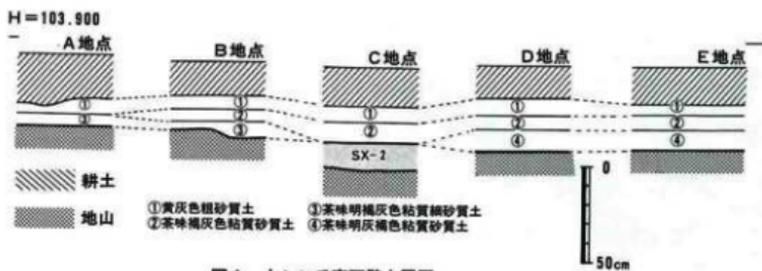


図4 トレンチ南西壁土層図

### 3. 調査の概要

**基本土層** T-1北西側壁面で確認した土層は、現地表面下約20cmは耕土であり、その下は厚さ約10cmの黄灰色粗砂質土(①層)である。②層は茶味褐色粘質砂質土、③(南東側)・④(北西側)層は茶味明灰褐色粘質砂質土が約10cm推積しており、以下が遺構ベース面である。遺構ベース面は南側コーナーで暗茶褐色粘質微砂質土、ほかは黄色粘質土であり、南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。暗茶褐色粘質微砂質土は北西～南西側一帯に広がり、縄文時代中期(船元式)の土器を含んでおり、当該期には沼沢地であったと考えられる堆積層である。調査区は、丘陵地より延びる舌状の微高地の先端にあたる。

**検出遺構** 本調査区では帆立貝式古墳(SX-1)、方墳、掘立柱建物、落とし穴状遺構、小溝が見つかった。SX-1は孤塚3号墳と呼称する。

#### 孤塚3号墳(SX-1)

**周濠(プラン)** 3号墳は帆立貝式古墳で馬蹄形の周濠をめぐらせている。検出面での幅は前方部で約4.5m、後円部は約6.4mである。墳丘部分の立面形は肩から底にかけて緩やかに傾斜しており、周濠外側への傾斜は急である。

周濠底は概ね平らであるが、後円部南側くびれ部付近には不整形の凹みが見られる。また、前方部側周濠の古墳中軸線上に近い所で、高さ約10cm、幅約1mの周濠に直交する高まりが見られる。さらにその北側の周濠中心部には、柱穴が2箇所ある。柱間距離は約1.8m。P-1は径25cm、深さ26cm。P-2は径20cm、深さ40cmである。ほかに南側くびれ部付近などに黒色粘質土および灰色粘質土を埋土とする不整形の凹みがあるが、いずれも浅いもので柱穴にはなり得ない。

**周濠(土層)** ほぼ均一の土層堆積状況である。検出面下約20cmの上層は、茶味灰褐色粘質細砂質土である。上半分は黄色味があり(①-2)、中世の遺物が含まれており、周濠の最終的な埋没の時期を示すものと思われる。中層は層厚約10cmの灰褐色細砂質土であるが、後円部東寄りのA-A'セクションではみられない。下層は明灰褐色もしくは暗褐色粘質土で、ゆっくりとした自然堆積作用によるものと考えられる。下層には7～8世紀の須恵器が含まれる。最下層は暗茶褐色腐植土で、下層の粘質土に密閉されて空気から遮断されており、木製品が多く遺存していた。また、最下層の上には、周濠肩部からの崩壊土が堆積している。後円部東側の一部の墳丘裾には炭化物が薄く堆積している。このほか北側くびれ部では、下層に砂が流入している。全体的に検出面下約60cmで周濠底に達する。

**周濠(遺物出土状況)** 最上層からは、中世の瓦質鍋・黒色土器が、上層からは青磁碗、須恵器、土師器が出土している。中層からは奈良時代の杯身等が出土している。下層の遺

土層分類表

①SX-1 上層	⑤葦石裏込め土
②SX-1 中層	⑥墳丘整形土
③SX-1 下層	⑦SD-1
④SX-1 最下層	⑧墳丘消滅後の遺構

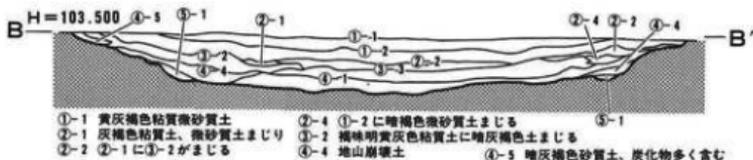
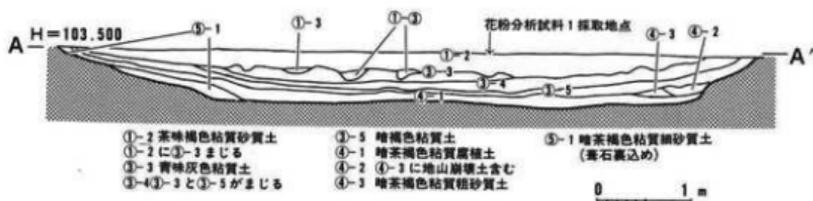
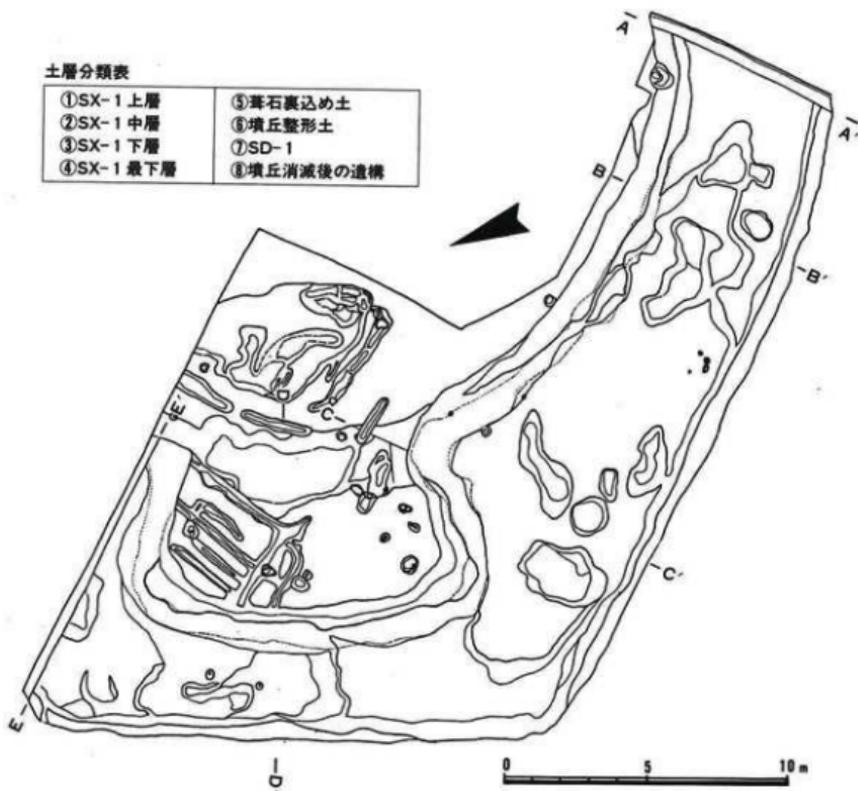


図5-① 3号墳周土層



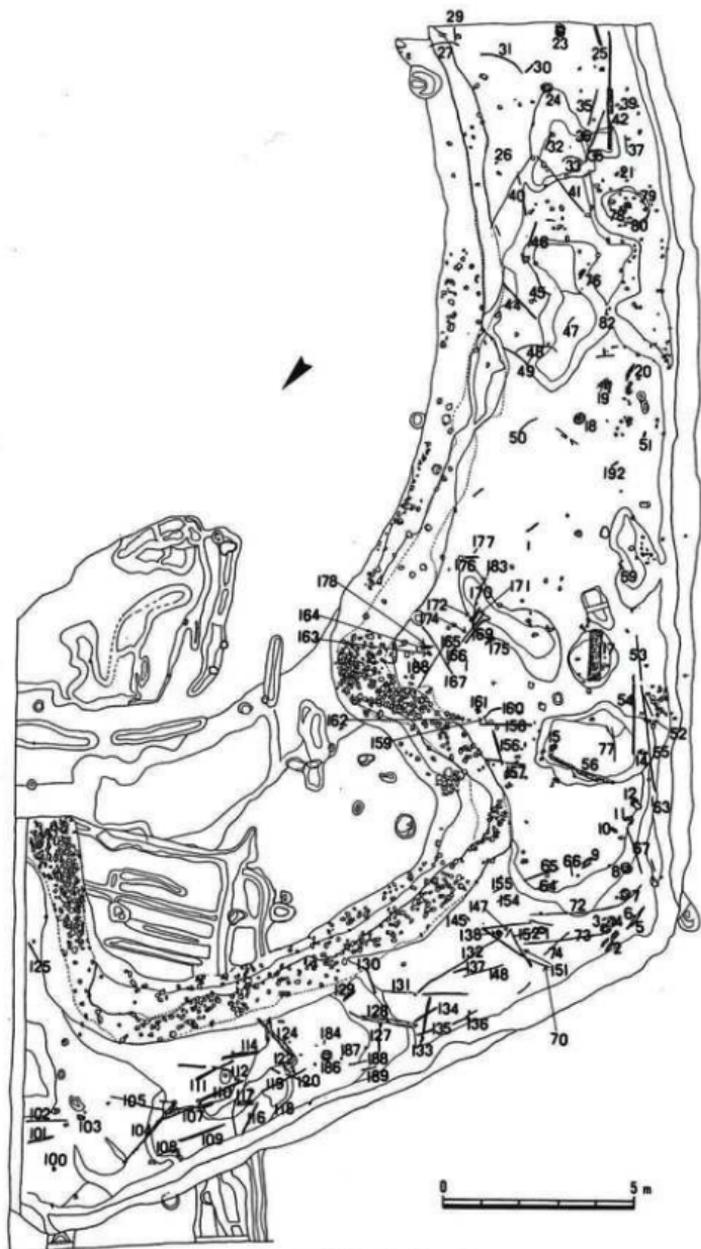


图6 3号墳木製品出土状況图

表2. 出土木製品一覧表

WNo	形状	備考	WNo	形状	備考	WNo	形状	備考
1	笠形	C小型	60	棒状	径3.1×長29.2	137	板状	幅5×長40
2	鳥形		61	板状	幅3.4×長19.9	138	笠形	C小型
3	笠形	B中型	62	棒状		139	笠形	C小型
4	笠形	B中型	63	棒状	長27.6	140	自然木片	
5	不明木製品	(板状)	64	棒状	長56.2	143	弓状	長210 他加工木片
6	笠形	C小型	65	棒状	径1.4×長約100	145	木片	
7	笠形	C中型	66	棒状	径1.4×長40.9 炭化	146	棒状	長120
8	笠形	A中型	67	棒状	径5.5×長120	147	木片	
9	木片	炭化	68	弓状	幅1.8×長75	148	棒状	幅2×長110
10	不明木製品		69	弓状	幅1.4×長39.8	150	棒状	長200
11	笠形	中型 炭化	70	板状	幅0.9×長75.4	151	板状	長110
12	笠形	中型 炭化	71	木片	炭化	152	棒状	幅1.4×長65
14	笠形	B中型	72	棒状		153	木片	
15	笠形	C小型	73	棒状	径2.5×長210	154	棒状	長35
17	板状	幅34.4×長120~	74	棒状	径3.4×長95.8	155	棒状	長25
18	笠形	C中型	75	加工木片	炭化	156	棒状	幅3.8×長138.1
19	笠形	C小型	76	笠形	中型、炭化	157	棒状	長110
20	板状	幅2.4	77	弓状	幅1.6×長60.5	158	板状	幅3.9×長140
21	加工木片		78	笠形	中型	159	棒状	径1.6×長27.6加工
22	笠(鳥)形片		79	加工木片		160	木片	炭化
23	笠形	A大型	80	加工木片		161	板状	幅10×長50
24	笠形	B中型	82	木片		162	木片	炭化
25	柱状	径8.3×長56.2~	100	笠形片	小型	163	笠形	小型
26	木片		101	板状	幅6×長70~	164	笠形	小型(163と同一か)
27	加工木片		102	棒状	幅1.8×長110~	165	棒状	幅1.4×長150
28	棒状	長約60 炭化	103	笠形片	中型	166	棒状	長60
29	棒状	長52.3	104	棒状	径6×長203.9	167	羽状	径2.6×長139.2 加工
30	棒状	幅3.5×長27.5~	105	棒状	幅1.7×長170~	168	棒状	長50
31	弓状	長118.4 炭化	106	棒状	長30	169	自然木	
32	棒状	長55.7	107	板状	幅10×長150	170	自然木	
33	弓状	長55.5	108	板状	幅2.4×長48.5	171	板状	長40
34	加工木片		109	板状	幅3.8×長81.7	172	柱状	粗い加工痕
35	棒状	幅2.8×長90.2	110	板状	幅4.0×長125	173	棒状	長10~
36	棒状	径1.2×長24.5 炭化	111	棒状	幅1.7×長110	174	棒状	幅3.9×長90 炭化
37	木片	炭化	112	板状	幅5.0×長140	175	板状	有孔
38	板状	長100	114	板状	幅8.0×長100	176	木片	板状
39	笠形	C小型	115	弓状	幅1.8×長82.7	177	棒状	幅1.5×長20
40	板状	幅3.3×長80~(角材)	116	棒状	径2.5×長104.5	179	棒状	幅1.2×長50
41	棒状	幅1.5×長187	117	板状	幅7.0×長60	180	木片	
42	板状	幅8.2×長160~	118	棒状	径1.2×長46	181	弓状	幅1.6×長53.7
42	板状	幅2.1×150~	119	棒状	幅2.8×長123.5(角材)	182	木片	
44	扁羊蹄		120	棒状	幅2.6×長120	183	棒状	径2×長43.7 加工
45	木端		122	鏃		184	棒状	径0.8×長29.3
46	弓状	幅1.5×長64.2	123	棒状	幅3.1×長130	185	木片	
47	棒状	径1.0×長37.5	124	自然木	炭化	186	笠形	A中型
48	弓状	幅1.8×長100.7	125	棒状	長60~	187	笠形	Aの突起部分
49	弓状	幅1.0×長69.7	126	板状	幅8×長50	188	棒状	幅1.5×長60
50	弓状	幅1.9×長約50 炭化	127	棒状	幅20×長70	189	棒状	長55
51	加工木片		128	板状	幅13×長160	190	木片	
52	棒状	長約90	129	木片	幅4.5×長25.5 炭化	191	木片	
53	棒状	長約400	130	板状	幅5×長70	192	木片	
54	板状	幅3.2×長約200	131	棒状	径2.9×長230	200	棒状	幅2.3×長89.6
55	棒状	径2.1×長42.8	132	棒状	径3×長260			
56	柱状	径9.8×長73.5	133	棒状	径4.8×長120			
57	棒状	長100~	134	棒状	径3.2×長64			
58	棒状	長50~	135	棒状	(径5×長40)			
59	板状	幅6.5×長23.3	136	棒状	幅2.4×長70			

○笠形の分類はP69参照  
 ○数字の単位はセンチメートルである。  
 小数点以下のないものは概数である。

物は少ないが、白鳳～奈良時代の須恵器がみられる。墳丘の肩部では、埴輪片が多くみられ、特に両くびれ部の周濠検出ライン上に集中している。前方部の墳丘肩部からは、蓋形埴輪片が出土している。最下層には、木製品・埴輪（硬質）が集中し、土師器甕が若干みられた。木製品のうち、笠形木製品は、T-1 南東壁下・くびれ部と南東壁の間・前方部周濠南側コーナー付近・前方部中軸線上にみられ、とくに前方部周濠南側コーナー付近に集中している。鳥形木製品は笠形木製品の集中していた前方部周濠南側コーナーで、「旗竿形木製品」は後円部南側墳丘裾部で出土した。棒状・弓状木製品は周濠全域より出土している。棒状木製品はとくに前方部側に多く、弓状のものは後円部寄りに多いという傾向がある。長さ1mを超す板状木製品は、くびれ部付近で出土し、その下には黒色土が薄く堆積していた。柱状木製品はT-1 南東壁下に1点、くびれ部付近に2点みられた。最下層で出土した遺物には、ほかに土師器甕がある。

**墳丘（規模）** 墳丘斜面の下半分には、葦石およびこれを固定するための裏込め土（暗茶褐色粘質砂質土）が遺存していた。この裏込め土の範囲を本来の墳丘の範囲として復元すると、径26mの後円部に、底辺がやや円みを帯びる台形の前方部がつく帆立貝式古墳となり、前方部最大幅は12.5m、前方部長6.5m、くびれ部幅10.5mである。墳丘の復元全長は32.5mである。

**墳丘上の遺構** 墳丘上からは、溝、不整形おちこみ、ピットがみつまっている。

（SD-1） くびれ部で、後円部の円丘をとりまく形に弧を描いて掘削されている溝である。これは墳丘成形のための層および葦石の裏込め土よりも古いことが土層より観察でき、墳丘築造に遡る遺構であると考えられる。埋土は上層が褐味黒色土、以下黄灰白色粘質土、灰茶褐色粘質土からなり、人為的な埋没と考えられる。遺物は須恵器・土師器・埴輪が出土しており、いずれも破片である。

（小溝） 幅約50cmの丸底の溝で、埋土は明灰色土である。墳丘削平後の耕作痕であると考えられる。

（SX-4） 不整形のおちこみで、埋土は茶味灰褐色粘質砂質土である。深さは10～15cm程度である。底は凸凹があり、一部小溝状になる部分がある。陶器片が出土している。

（P-100～109） P-104、106、109は、埋土が墳丘削平後に形成されたと思われる耕作痕のものと類似していることから、墳丘消滅後のものと考えられる。P-101、103もSX-4と類似した埋土であるので、墳丘削平後のものと考えられる。ほかのピットは、いずれも検出面からの深さが6～10cmと浅いものであるが、埋土が墳丘削平後のものと異なるので、古墳時代もしくはそれ以前に遡る可能性がある。

**葦石** 墳丘の斜面下半分には、葦石が遺存していた。葦石を固定しているのは暗茶褐色土

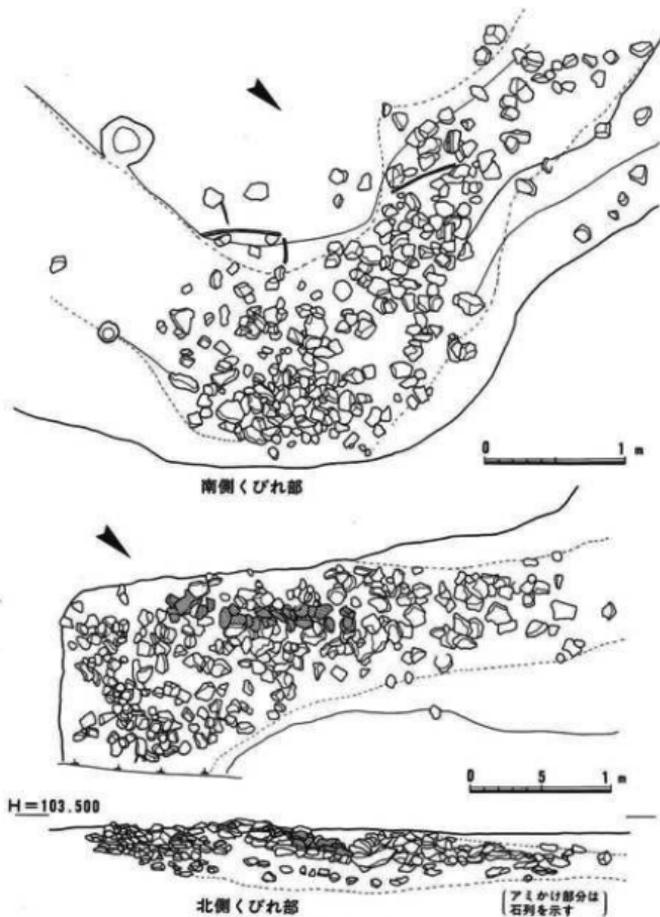


図7 葺石出土状況

で、3号墳全域で確認されている。

葺石は、くびれ部では検出面より周濠底までほぼ完全に遺っている。これに対して前方部ではまばらである。後円部では固定された葺石はほとんど遺っていないが、周濠底からは葺石とみられる多くの石が出土しており、この部分における葺石の崩落が著しく、本来は前方部と同様に葺かれていたものと考えられる。

遺存状況の良いくびれ部では、若干の規則性をもって葺かれている。第1に北側・南側くびれ部では、後円部側を細かい石で密に、前方部側を大きな石で葺いている。第2に、石は墳丘裾部より上に積み上げるように葺いている。第3に、北側くびれ部では、2個づ

つの石を前方部前面にかけて並べ石列をつくっている(アミかけ部分の石)。石列は前方部にかけてやや下向きに傾斜している。

石材については、チャートおよびこれの熱変成を受けたもの(珪岩)、黒ウンモ花崗岩、黒ウンモ変岩、藍青石ホルンフェルス、セキエイ、砂岩等があり、黒ウンモ変岩をのぞく他は、近隣で採取できるものである<sup>9)</sup>。

#### SX-2

帆立貝式古墳に先行する方墳である。墳丘は10.5×9.0mの長方形を呈し、長軸の方向は北を67°西へ振る。周溝は北東側で約1m、南西側で約2mである。溝の深さは10~15cmである。溝底は概ね平底であるが、北東側および北西側周溝の台状部寄りに部分的に幅約40cm、深さ約12cmの土坑状に深くなる部分がある。土坑状の部分の埋土は、灰褐色~褐灰色粘質微砂質土である。南西側および北西側周溝には、幅1~1.5m、長さ約2m、深さ約10cmの不整長方形の浅い落ち込みがみられる。

周溝の埋土は黒褐色粘質微砂質土が主体である。埋土からは須恵器甕片・土師器片・埴輪片が出土しているが、いずれも小片で時期判定の決め手には欠ける。溝底の掘りこみからは遺物は出土していない。

#### SX-3

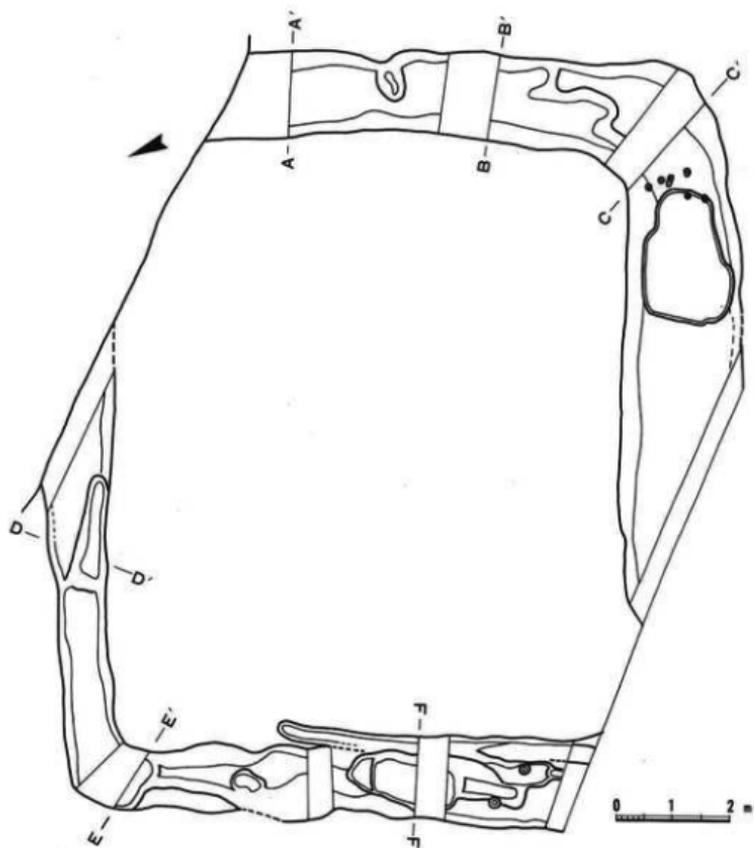
3号墳およびSX-1に先行する方形周溝状遺構である。1辺は11.5mで、主軸方向は北を42°西へ振る。周溝の遺存状況は悪く、幅約70cm、深さ約10cm程度である。溝は所々跡切れており、溝底のレベルは一定していなかったようである。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

#### SB-1

SX-2の北西隣で検出された2×2間の掘立柱建物である。中央には2個の東柱があり、高床式の建物であったと考えられる。建物の平面形はややいびつで、台形になっている。柱穴は不整形を呈し、1辺約40cm程である。東柱は円形で径約15cmと小さい。柱間は1.8~2.2mである。柱穴より須恵器小片が出土している。SX-2の北西側周溝肩部の一部がSB-1柱穴を切っているのでSB-1が先行するものと考えられる。しかし、両者の主軸方向が類似していること、SX-2の下限が3号墳築造以前でSB-1の上限は須恵器出現以降であるので、時差期は小さいものと考えられる。

#### SB-2

T-1南東隅で検出された2×2間以上の掘立柱建物である。主軸方向はN-56°-Wである。柱穴は隅丸方形で1辺約40cm、柱間は北西妻柱列が2.1m、側柱列が2.5mである。柱穴からは土師器片・須恵器片が出土しているが、いずれも小片で時期は不明である。



H = 103.500



① 黒褐色粘質微砂質土  
粗砂含む

② 褐灰色粘質微砂質土  
明黄灰色粘質土ブロック含む

H = 103.500



① ②と同じで  
ブロック土が多い

④ 灰褐色粘質土、  
粗砂含む

H = 103.500



H = 103.500



⑤ ②と同じでブロック土少ない

③ 暗褐色粘質細砂質土  
粗砂、明黄灰色粘質土ブロック  
含む

⑦ 明黄灰色粘質土に③層混じる

⑧ 褐灰色粘質粗砂質土

⑨ 明灰色粘質粗砂質土  
(小溝)

⑩ 灰褐色粘質微砂質土

明黄灰色粘質土ブロック含む

⑪ 明褐色粘質微砂質土

H = 103.500



H = 103.500



図 6 SX-2 遺構図

## SK-2 (落とし穴状遺構)

SX-2の墳丘部分で検出された遺構である。平面形は径約90~80cmの楕円形で、深さ約80cmである。坑底には径30cm、深さ約10cmのピットがある。埋土は茶灰色粘質細砂質土で、遺物は全く出土していない。隣接調査区で同様の遺構から縄文時代晩期の土器が出土していることや、沼沢地沿辺という立地条件より、晩期の落とし穴状遺構と推定される。

### 小溝群

SX-2を切って12条の小溝が検出された。SX-2と同様の方向である。幅は30~40cm、深さ約15cm程度で丸底である。埋土は灰褐色土である。須恵器・土師器・埴輪片・および黒色土器片が出土しており、中世の耕作痕と考えられる。

注① 葦石の石材は、南側くびれ部のものについて、栗東自然観察の森北原隆男氏に御教示を得た。

### 出土遺物(土器)

図化し得た遺物のほとんどは3号墳のものである。3号墳では、周濠内の各層から埴輪が出土している。以下、器種ごとに記述する。

### 円筒埴輪

口径を復元できたものは、径20~28cmの小型のもののみである。なかには大きく歪んでいるものがみられる。これらは外面調整によって大きく6類に分けられ、更に焼成の程度、器壁の厚さ、タガの形状、口縁の形状等によって細分することができる。なお、円筒埴輪はすべて破片で出土しており、完形として復元し得なかったこと、口縁部の方が多く遺存していたことから、口縁部を第1段め、以下第2段め……と呼称し、観察も上部が中心である。

外面調整には、ナデ後の2次調整としてB種ヨコハケ(一定間隔でハケの休止痕を有する)のみを有

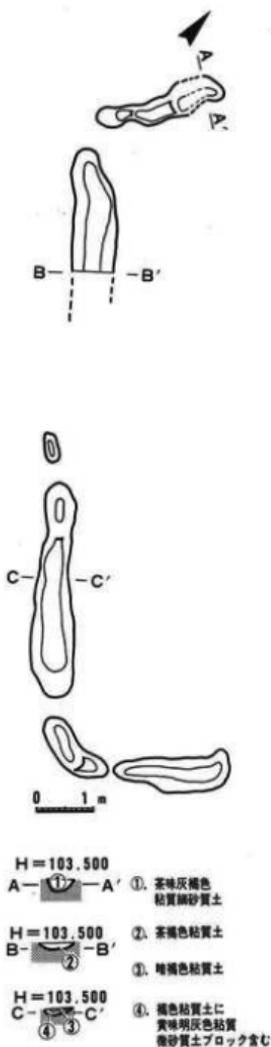


図9 SX-3遺構図

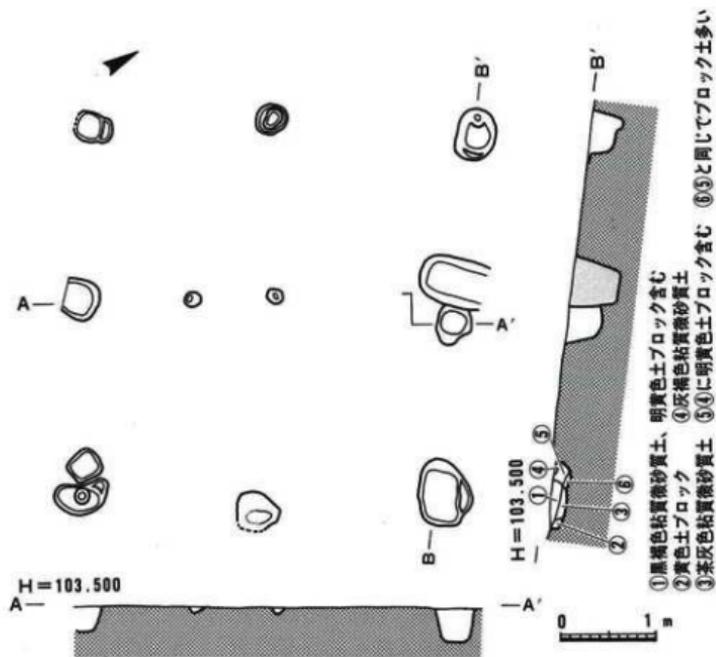


図10 SB-1 遺構図

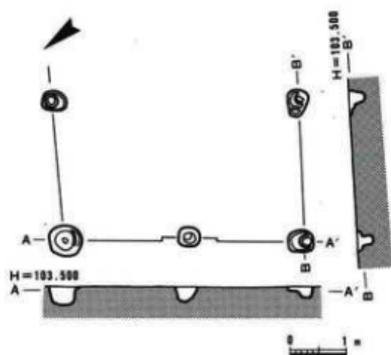


図11 SB-2 遺構図

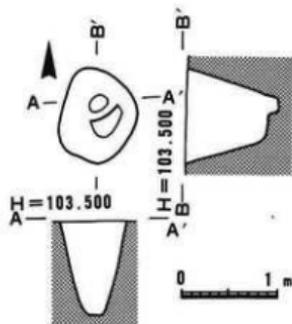


図12 SK-1 遺構図

するもの (A類)、第1段めをナデの後B種ヨコハケ、第2段めがナデのみのもの (B類)、第1段めにタテハケ、第2段めにナデの後B種ヨコハケを施すもの (C類)、タテハケのみのもの (D類)、口縁部は不明であるが、タテハケを有しその下段をナデのみでおわるもの (E類)、すべてナデのみによるもの (F類) の6類に分けることができる。

タガの形状には、タガの突出が小さく、上面より下面の突出度が小さいもので、下面をハリツケの際に波状におさえるもの (a類)、突出が小さく、上面と下面の突出度がほぼ同じでタガの幅も狭いもの (b類)、突出はa類よりも大きく、上面が下面より突出が大きいもの (c類)、突出は小さく、上面と下面の突出度が同じであるが、タガの幅は広くハリツケの際のヨコナデの幅も広いもの (d類)、突出度が大きくタガの幅が広いもの (e類)、突出度が大きくタガの幅が狭いもの (f類) に分けられる。

口縁の形態は、外反するものが主体となっているが、端部の形状により、平らで角ばっているもの (イ類)、イ類に類似するが外面の端部を外側に鋭く突出させるもの (ロ類)、端部の角を丸くするもので中央がやや凹むもの (ハ類) に分けることができる。

焼成の程度には、硬質のものと軟質のものがあり、硬質のものには、須恵器と同じように灰色に焼けるものと赤っぽいものがある。器壁は厚いもの (約1cm)、薄いもの (約7~8mm) がある。

以上の観点からA~F類の円筒埴輪を細分すると以下ようになる。

A-①類 外面ヨコハケ、硬質で、タガa類、口縁部イ類のもの。器壁はうすい。内面は第1段め上半がヨコハケのもの、ナナメハケのものがあり、以下はナデによる。ヘラ記号を有するものがあり、透孔右上に//と書くもの (②)、// (⑤) がある。記号はいずれも第2段めもしくはそれ以下である。(①~⑦)

A-②類 外面ヨコハケで、軟質のもの。形状はA-①とほぼ同じ。透孔右上にヘラ記号 (//) を書く。(⑩)

A-③類 外面にB種ヨコハケを有する。硬質で器壁は厚い。タガe類。口縁部および透孔は本類が破片1点のみ (⑧) の出土であり不明である。

B-①類 第1段めB種ヨコハケ、第2段めをナデによるもので、軟質のもの。タガb類口縁部イ類。内面は第1段めのみナナメハケ。第1段めにヘラ記号 (×) を有する。第2段めに楕円形透孔をあける。(⑨⑩⑫)



図13 タガ、口縁端部の形態

B-②類 何段めにあたるか不明であるが、B種ヨコハケを施し、その下段をナデのみによるもののうち、硬質のもの。タガはC類。タガの上を押えている箇所がある。(13)

C-①類 第1段めにタテハケ、第2段めにB種ヨコハケを施すもの。硬質で、タガはd類、口縁はイ類(14・15)ロ類(16)の2種がある。器壁の厚さ1/2のところまでを丸く削りとる記号を施す(15・16)。内面は口縁部上部にヨコハケを施し以下ナデ。(14~16)

C-②類 口縁部が不明のため、何段めにあたるか不明であるが、タテハケを施し、その下の段にB種ヨコハケを施す。硬質で、タガはC類。赤色味があり内面にタテハケを施すもの(17)と、灰色で内面をナデによるもの(18)がある。(17・18)

D-①類 タテハケのみによるもので、硬質、灰白色を呈する。タガは突出度の大きいf類で、口縁部はハ類である。胎土はやや粗い。(19・20)

D-②類 D-①類をのぞく、タテハケのみによるもの。硬質でタガC類の底部片(21)、硬質(赤色)で、内面をナメハケにより、タガb類、口縁部イ類のもの(22)、胴部片で内面をナデにより、タガC類のもの(23)がある。

E類 口縁部がないため何段めになるか不明であるが、タテハケを施した下の段をナデの

分類	調整	タガ	焼成	口縁	記号								
A	①		a	硬質 (灰) (赤)	イ		C	②		c	硬質 (赤)	-	
			③		c	硬質 (灰)		-					
	②		a	軟質	イ		D	①		f	硬質 (灰)	ハ	
③		e	硬質 (灰)	-		②			-	硬質 (赤)	イ		
B	①		b	軟質	イ		E			d	硬質 (赤)	-	
	②		c	硬質 (赤)	-			F	①		d	硬質 (灰)	イ
C	①		d	硬質 (灰)	イ ロ		②			d	軟質		

表3 円筒埴輪分類

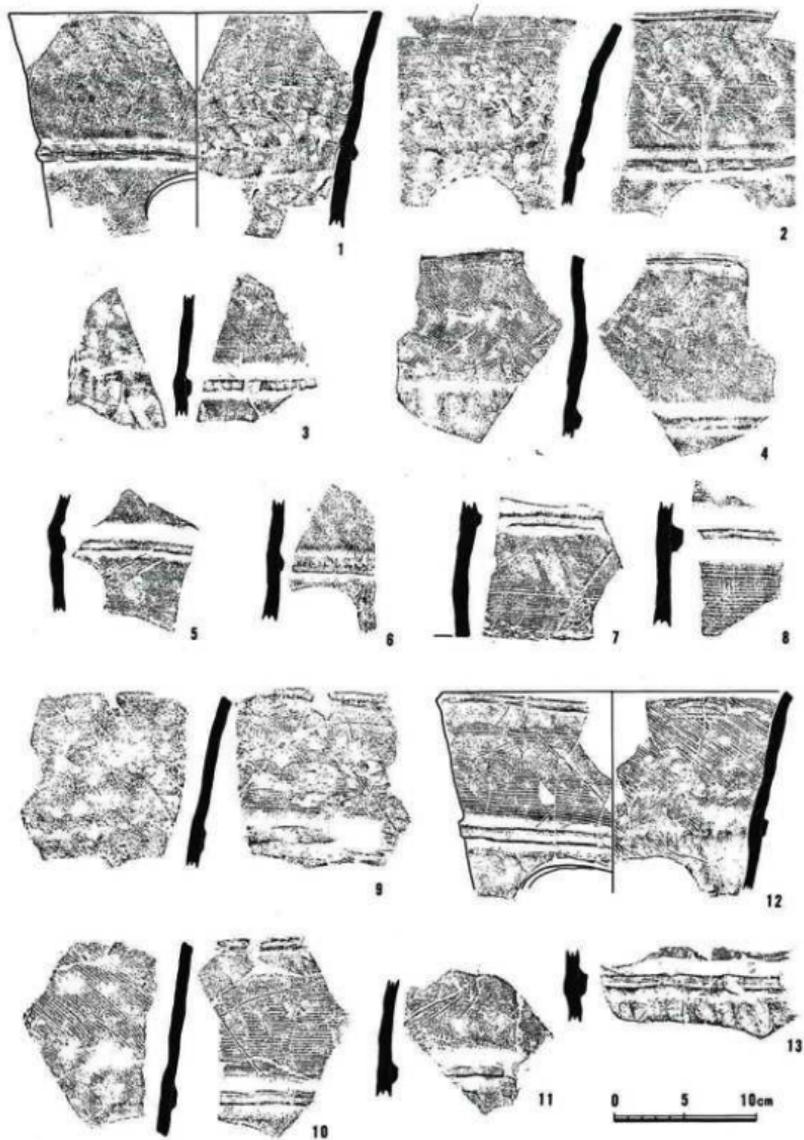


图14 3号墳出土円筒埴輪A、B類

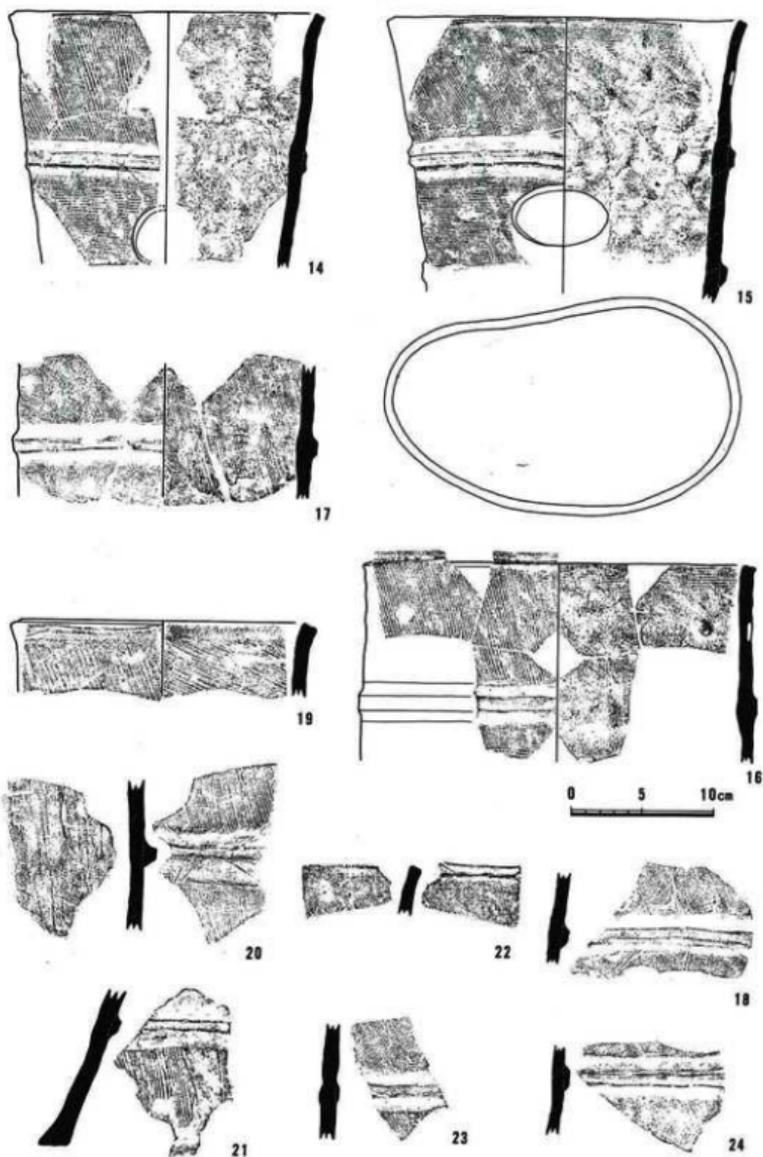


图15 3号填出土 円筒埴輪C、D、E類

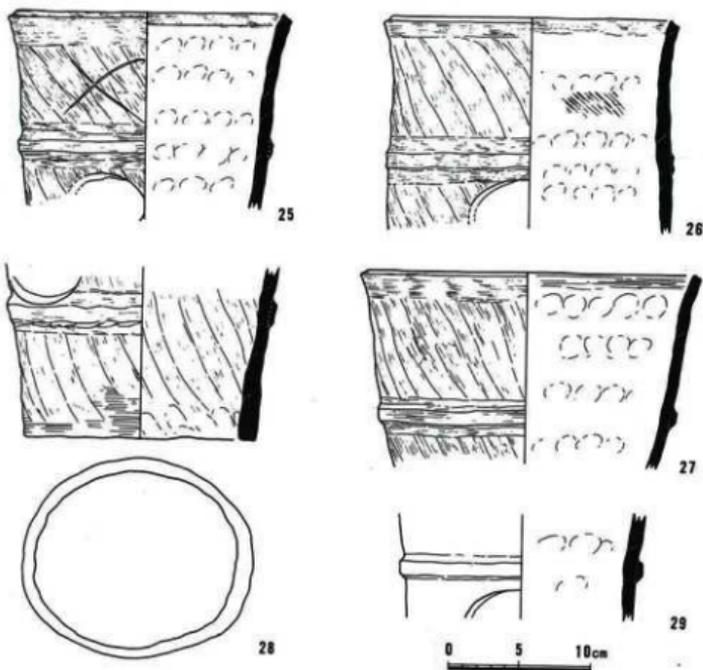


図16 3号墳出土 円筒埴輪F類

みで終るもの。内面ナデで、タガはd類である。(24)

F-①類 外面をナナメ方向のナデのみによる、硬質のもの、タガd類、口縁部イ類。内面は第1段め上部のみヨコハケを施す。第2段め(25, 26) および底から2段め(15)に楕円形透孔をあける。第1段めにヘラ記号(X)を施す(25)。底部をナナメ方向の粗いナデで調整する。

F-②類 外面をナナメ方向のナデのみによって調整する軟質のもの。タガはd類で、楕円形の透孔をあける。(23)

#### 朝顔形埴輪

図化し得たものは3点である。⑩⑪は軟質のものである。⑩は口縁部径40cmで、外面をタテハケで調整し、赤彩をする。⑪は口縁部外面をタテハケによる。内面は不整方向のハケ調整である。⑫は硬質のもので、口縁部外面をナデ、肩部外面はヨコハケ、口縁部内面をナナメハケによる。肩部にXとみられるヘラ記号を施す。

#### 蓋形埴輪

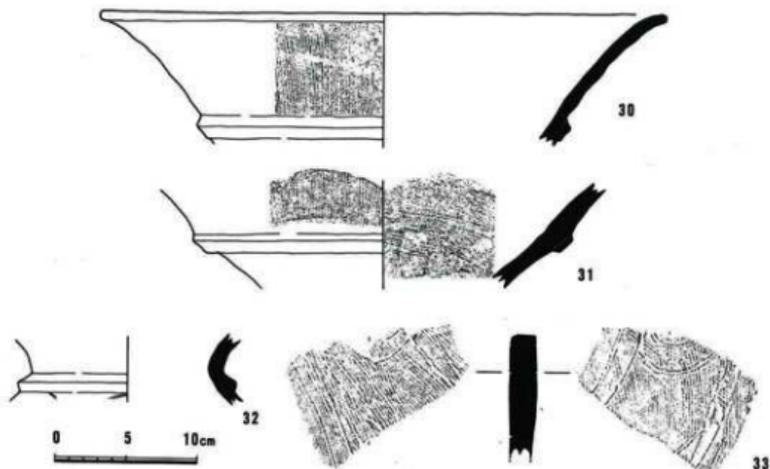


図17 3号墳出土 朝顔型、蓋形埴輪

⑳は立ち飾りの破片である。ハケ調整のあと、ヘラで文様を描く。片面に赤彩の痕跡がみられる。器壁は1.8cmである。

その他の遺物

3号墳上層出土土器 39は須恵器杯身である。平らな底部から外反した体部をたちあげ、端部は鋭くおさめる。平城VIに相当する時期である。

3号墳中層出土土器 37は須恵器杯身である。体部はまるく、口縁部は内傾して外反し、端部は外反させてまるくおさめる。体部外面のほとんどをヘラケズリで調整している。中村編年I-3に相当する時期である。

3号墳下層出土土器 34は須恵器高杯脚部である。端部は下に折りまげる。38は須恵器平瓶である。肩部に稜をもつもので、体部下半はヘラケズリを施す。34、38は平城Iに相当する時期である。

3号墳最下層出土土器 36は土師器甕である。体部外面はハケ、口縁部外面はヨコナデによる。体部内面はヘラケズリで調整する。

このほか、3号墳周濠からは、銅もしくはガラスのスラッグと考えられる破片が数点出土している。

出土遺物（木製品）

木製品が出土したのは、すべてSX-1最下層で、この層を密閉する役割を果たしていた下層（粘土層）より上の堆積土中からは木製品は出土していない。



図18 3号墳出土 須恵器・土師器

### 笠形木製品

平面形および断面形により、3つのタイプに分けることができる。また、その大きさにより、大型(35cm)、中型(26~33cm)、小型(17~25cm)に分けることができる。いずれも、心去り材を用いている。

Aタイプ 頂部に突起がつくものである。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するが、その長辺は丸味があり楕円形にちかい。笠の上面はやや直線的であり、裾は面取りされる。中央には長方形の完通する孔を穿ち、下半は断面ハの字形に大きく割られている。突起は削り出してつくったもので、頂部は平らである。このタイプには、大型のもの、中型のものがある。

W23 唯一大型のものである。長径32cm、短径32cm。突起を含めた高さは13.5cmである。

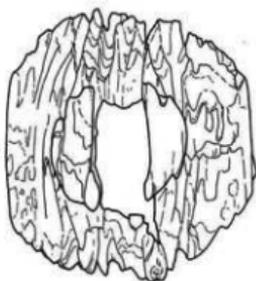
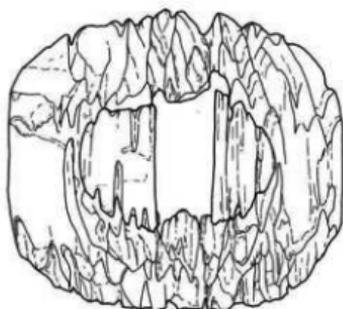
W8 長径27.5cm、短径25.5cmの中型のもの。突起を含めた高さは13cmである。

W186 突起はないが、笠の部分の形状がAタイプと類似し、また付近に突起と考えられる破片が出土しているので、Aタイプに含めてよいと考えられる。

Bタイプ 頂部の突起がないものである。W4がこれにあたる。中型で平面形は円形にちかい。断面形はAタイプと類似する。孔は完通するもので下半は大きく割られている。直径29cm、高さ10cm。このタイプのものは、突起のつくAタイプとあまり差がないので、Aタイプの突起部分が失われた形である可能性もある。

Cタイプ 笠の頂部に平坦面をもち、断面台形を呈するタイプである。平面形は円形もしくは楕円形で、中型のもの、小型のものがある。とくに小型のものはCタイプのものに限られる。中央に完通する長方形の孔を穿つ。小型のものの中央の孔は、下半を大きく割ることはなく、底面をやや広くする程度で、中型のものも割りは小さい。

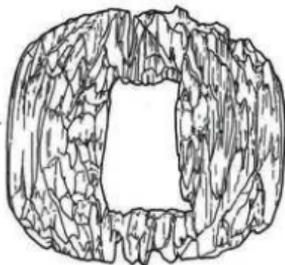
W19 直径22.5cm、短径17cmの小型のもの。裏面には加工痕が残る。



W23



W 8



W 4



W186

図19 3号墳出土木製品①

0 10 20cm

W138 直径18.5cm、短径17.5cmの小型のものである。

W18 径約29cmの中型のもの。平坦面からの屈曲部に加工痕が残る。

鳥形木製品 (W 2)

「鳥が翼を開いて飛んでいる姿を平面的に模した大型のもの<sup>9)</sup>」で、頭部と尾部が破損し、

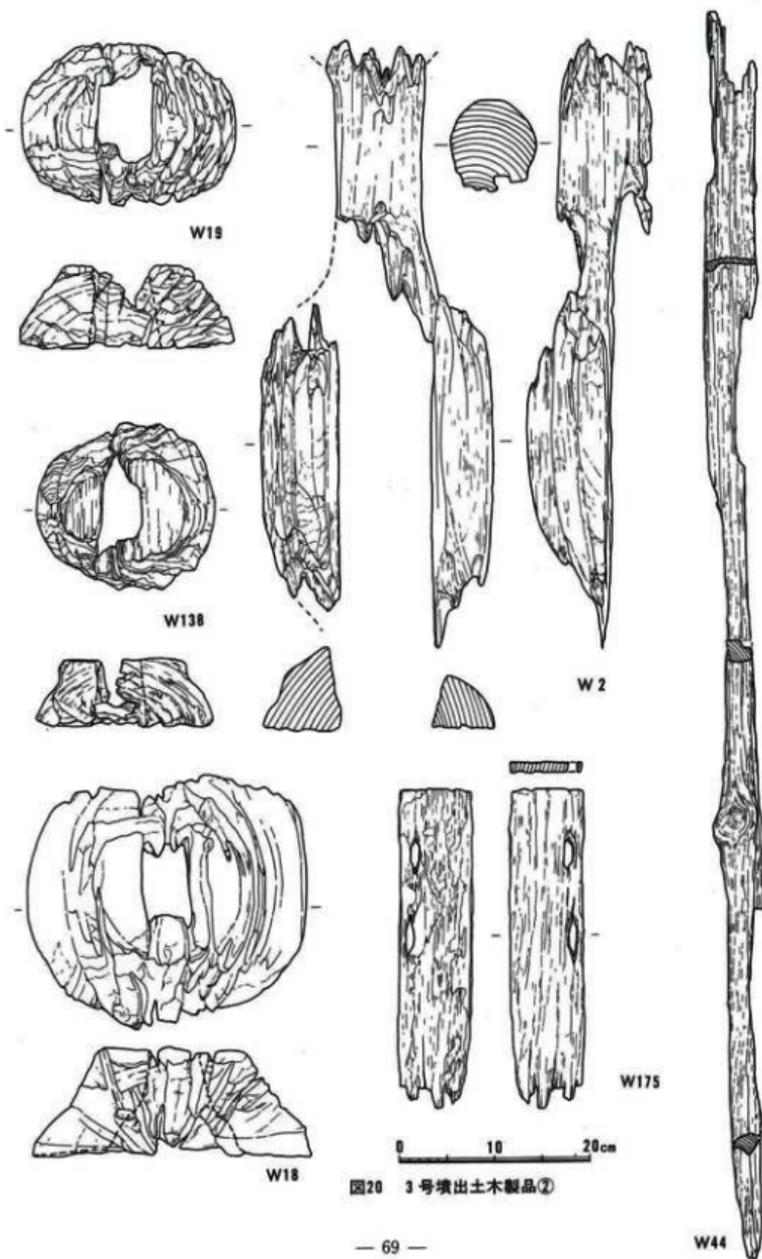


图20 3号出土木製品②

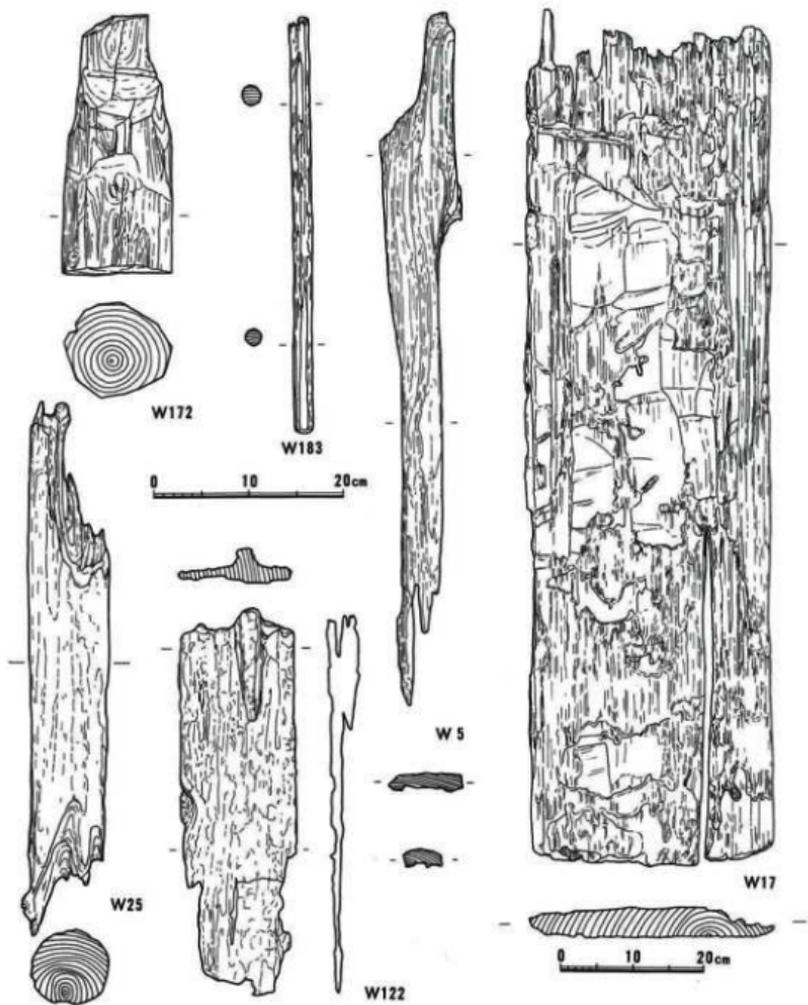


図21 3号墳出土木製品③

組み合わされるべき羽の部分も不明となったもの。腐植のため孔の部分で、体部が2つに分かれている。首部は断面円形で、胴部の底面は平らである。現存長64cmである。笠形のもの同様、心去り材を用いている。

旗竿状木製品 (W44)

全長130.3cm。腐食が著しく加工痕は認められないが、1方の先をV字状に細く削りだしているようである。V字状から下は30cm程のところまでやや幅広になっており、断面一形に削っているようである。さらに下部はやや細くなり、断面方形で、先端はやや鋭くなっている。

#### 板状木製品

W174 幅7.5cm、長さ33cm、厚さ約1cmの木製品である。柾目材を用いている。完通する2個の孔が直列しているが、当初からのものか、腐食によるものかは判別できない。

W17 幅34cm、長さ120cm以上、厚さ約4cmの大型の柾目材である。一方の表面は、粗くはつた痕跡がみられる。短辺の一边はやや丸味を帯びる。もう一方は不明であるが、端部近くに斜めに削って段をつくっている部分がある。

#### 柱状木製品

笠形木製品や鳥形木製品の出土数と比べて、これと組み合う可能性がある、一定の太さをもつ柱状木製品は非常に少なく、下に記述する2点のみである。

W25 径8.3cm、長さ56cm以上の丸材である。両端は破損と腐食のため不明である。材の心は端に寄っており、より大きい材を加工して丸くつくったものであろう。

W172 径11cm、長さ27cmの短い柱状木製品である。全体的に粗く加工されている。一方の端は平らに削り、もう一方は断面長方形に細く削りだされている。

#### 木製鋤 (W122)

一木スキの身の部分。身の長さは37cmを測る。加工痕等は不明である。

#### 棒状木製品

周濠内の最下層から多くみつかっている。遺存状況は悪いものが多い。なかには、長さ4mを超える長いものや、先端をコの字状に割るものがある。

W183 径1.8cm、長さ43cm以上、柾目材を用いる。一方の端部を丁寧に丸く加工し、表面には細かい面取りを施している。何らかの柄である可能性がある。

#### 不明木製品

W5は板目材を用いる、厚さ1cmの木製品である。

このほか、周濠最下層に多くみられたものに弓状のものがある。細かな枝を払ってあり、端部を切りおとしているなどの簡単な加工が施されている。

注①高橋美久二『「木製埴輪」とその起源』『古代の日本と東アジア』1991

#### 参考文献

『栗東の歴史』第一巻古代・中世 栗東町史編さん委員会 1988

- 【栗東町埋蔵文化財調査 1990年度年報Ⅱ】 財団法人栗東町文化体育振興事業団  
1992
- 大崎隆志 「近江栗太郡安養寺古墳についての二、三の考察」『滋賀考古』第7号 1992
- 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978
- 中村 浩 『和泉陶邑窯の研究』 1981
- 高橋美久二 「「木製埴輪」とその起源」『古代の日本と東アジア』1991
- 高橋美久二 「「木製埴輪」再論」『京都考古』1988
- 西藤清秀・林部均 「橿原市四条遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1987年度』  
奈良県橿原考古学研究所 1988
- 西藤清秀 「木製樹物」『古墳時代の研究』9 1992
- 土生田純之 「菅田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古学論集』 1998
- 高野 学 「古墳をめぐる木製樹物」『季刊考古学』第20号 1987

#### 4. 考察

##### (考察1) 栗東町、狐塚古墳周濠出土木製遺物の樹種と花粉分析

天理大学附属天理参考館 金原正明

環境文化研究所 金原正子

#### 1. 周濠出土木製品の樹種同定

周濠出土木製品70点の樹種同定を行った。試料は現地では切片を採取したほか、木片をもちかえり切片を作製したものがある。標本は試料からカミソリによって木材の横断面・放射断面・接線断面を切りとって作製した。同定は顕微鏡によって木材組織の特徴を観察し現生標本との特徴と比較して行った。6分類群が同定され、それぞれ写真に示した。結果は一覧表に示し、以下に特徴を記す。

##### a. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞からなる針葉樹材で、分野壁孔が典型的な窓状である。コウヤマキ材は保存性がよく水湿に耐える。

##### b. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管・軸方向柔細胞・放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行がゆるやかである。分野壁孔は典型的なヒノキ型でほとんど1分野に2個存在する。

##### c. ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管・軸方向柔細胞・放射柔細胞からなる針葉樹材で、分野壁孔の型と個数が腐朽のため確認できないが他の特徴がヒノキと酷似するものをヒノキ科に一括した。ただし、ヒノキである可能性が高い。

##### d. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型ないし大型の道管が配列する放射孔材で、放射組織は単列と広放射組織の複合放射組織の分布を示す。

##### e. ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型の道管が散在する散孔材である。道管は20前後の階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は2・3細胞列幅からなる異性である。

##### f. サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

小型の道管が散在する散孔材である。道管は数の多い明瞭で細かい階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は単列異性である。

木製品は、総計するとコウヤマキ材が最も多く、38点(54.3%)にも達する。ヒノキ科材16点(22.9%)、ヒノキ材11点(15.7%)、コナラ属アカガシ亜属材2点(2.9%)、サカキ材2点(2.9%)、ヤブツバキ材1点(1.4%)と続く。ただしヒノキ科はヒノキである可

能性が高く、ヒノキ類として一括すると27点(38.6%)となる。木製遺物の形状でみると、笠形や鳥形を主にコウヤマキ材が使用され、棒状や板状のものヒノキ類が使用される特徴がある。コウヤマキ材は近畿地方中央部の5・6世紀の一般の集落遺跡ではほとんど使用されておらず、橿原市四条古墳や天理市小墓古墳(いずれも調査中)で知られるように選択的に古墳に使用される特徴がある。

本遺跡出土の木製遺物は全体として木材の腐朽が進み解剖学的特徴が不鮮明になっている。このことはこれらの木製遺物(木製品)が製作後直ちに堆積物中に埋没し保存されたのではなく、かなり時間が経過した後堆積物中に埋没したことを示唆している。

また、コウヤマキ材とヒノキ類の材の多用は、推定される植生からみてあまり多く分布しないこれらの樹木を木材として多量に供給できる製材の専業集団のような機構が当時存在していたことを示唆するものと考えられる。

表4 粟東町狐塚古墳出土木製遺物樹種一覧表

No	形状	樹種	No	形状	樹種
W-1	笠形	コウヤマキ	W-72	棒状	サカキ
W-2	鳥形	コウヤマキ	W-73	棒状	サカキ
W-3	笠形	コウヤマキ	W-76	笠形	コウヤマキ
W-4	笠形	コウヤマキ	W-78	笠形	コウヤマキ
W-5	不明	コウヤマキ	W-81	棒状	ヒノキ
W-6	笠形	コウヤマキ	W-100	笠形	コウヤマキ
W-7	笠形	コウヤマキ	W-103	笠形片	コウヤマキ
W-8	笠形	コウヤマキ	W-104	棒状	ヒノキ科
W-9	炭化木片	ヒノキ科	W-109	棒状	コウヤマキ
W-10	不明	コウヤマキ	W-109	棒状	ヒノキ科
W-12	笠形	コウヤマキ	W-119	棒状	ヒノキ科
W-14	笠形	コウヤマキ	W-122	鏝	コナラ属アカガシ亜属
W-15	笠形	コウヤマキ	W-125	棒状	ヒノキ科
W-17	板状	ヒノキ	W-130	板状	ヒノキ科
W-18	笠形	コウヤマキ	W-131	棒状	ヒノキ
W-19	笠形	コウヤマキ	W-132	棒状	ヒノキ科
W-21	加工木片	コウヤマキ	W-133	棒状	ヒノキ科
W-23	笠形	コウヤマキ	W-134	杭	コウヤマキ
W-24	笠形	コウヤマキ	W-138	笠形	コウヤマキ
W-25	柱状	コウヤマキ	W-139	笠形	コウヤマキ
W-31	弓状	ヒノキ科	W-146	棒状	ヒノキ
W-34	加工木片	コウヤマキ	W-156	棒状	ヒノキ
W-38	板状	ヒノキ科	W-158	棒状	ヒノキ科
W-39	笠形	コウヤマキ	W-163	笠形	コウヤマキ
W-40	板状	ヒノキ科	W-164	笠形	コウヤマキ
W-41	棒状	ヒノキ	W-167	弓状	コウヤマキ
W-42	板状	コウヤマキ	W-169	自然木	ヤブツバキ
W-44	旗竿状	ヒノキ科	W-172	柱状	コウヤマキ
W-45	木端	コウヤマキ	W-175	板状	コナラ属アカガシ亜属
W-46	弓状	ヒノキ	W-181	弓状	ヒノキ科
W-51	加工木片	コウヤマキ	W-183	棒状	ヒノキ
W-54	板状	ヒノキ	W-186	笠形	コウヤマキ
W-56	棒状	ヒノキ	W-190	木片	ヒノキ科
W-59	板状	コウヤマキ	W-192	木片	コウヤマキ
W-62	棒状	ヒノキ	W-200	棒状	ヒノキ科

## 2. 周濠堆積土の花粉分析による植生の復原

試料は調査区の東側(試料1-1~8)と北側(試料2-1~5)の古墳周濠を含む壁面から採取した。試料採取の対象とした堆積層は、周濠内最下位の泥炭質粘土からその上位につながる奈良ないし平安時代のシルト・粘土である。試料は小さなブロックで採取しもちかえた。

花粉粒の抽出はブロック試料の内部の新鮮な部分を用い、水酸化カリウム処理・フッ化水素酸処理、アセトリシス処理を施して行い、石炭酸フクシンで染色した後グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製した。検鏡は200倍から900倍で行い、花粉粒が200~300個以上になるまで計数した。

結果は花粉組成図に表し、主な分類群を写真に示した。

花粉組成の変遷は東壁(試料1)と北壁(試料2)で局所的な違いはあるものの、ほぼ同じ傾向を示す。

樹木花粉の占める割合は下部で70~80%を占め上部に向かって減少傾向を示し、最上部では50%以下となる。樹木花粉は下部でコナラ属アカガシ亜属・クリーシイ属・マテバシイ属・コナラ属コナラ亜属の広葉樹とスギ・イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科の出現率が高く、上部ではコナラ属コナラ亜属以外は低率となる。特にクリーシイ属・マテバシイ属とスギの減少は著しい。また、最下層でニフトコ属・ガマズミ属が特徴的に出現する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が優占し、上位に向かって増加傾向を示す。他にヨモギ属も一定の出現率を示す。また、ガマ属・ミクリ属・サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などの水湿地植物が特徴的に出現し、特にガマ属・ミクリ属は下部で多い。

以上の結果からみて、当初周辺地域は比較的森林の多い環境で、コナラ属アカガシ亜属を主としクリーシイ属・マテバシイ属・コナラ属コナラ亜属・スギ・イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科などのまじる照葉樹が分布していたと推定される。築造された古墳には改変地に入り込みやすいニフトコ属・ガマズミ属が入り込み繁茂していたとみられる。周濠にはガマ属・ミクリ属を主とする水湿地植物が生育している。イネ属型を含むイネ科花粉が出現しており周囲にはある程度の水田が営まれていたことを示唆する。また、ヨモギ属の花粉の出現は周囲に比較的乾燥した環境があったことを示す。上部になると、周辺地域の森林が減少し、水田の増加が推定される。水湿地草本もオモダカ属などの水田雑草の性格をもつ草本が主となる。



## (考察2)年輪年代法による木製品の年代測定

奈良国立文化財研究所 光谷拓実

樹木の年輪を使った年代測定を年輪年代法( dendrokronology )という。年代測定の可能な木材には、約100層以上の年輪が刻まれていて、しかも年代を割り出す基準の暦年標準パターンがすでに作成されている樹種に限られる。ヒノキは現在から紀元前732年まで、スギが紀元前651年まで、コウヤマキが西暦22年から西暦741年まで作成済みである。この年代確定範囲においては、1年単位の年代測定が可能である。

狐塚3号墳の発掘調査では、その周濠の下層および最下層から、笠形木製品や板状木製品が出土した。これらの木製品の年代は、円筒埴輪や土器の年代から6世紀前半のものと推定されている。このなかから、比較的年輪の多い笠形木製品7点、板状木製品1点を選び年代測定をおこなった。以下にその結果の概略を報告する。

### 試料と方法

年代測定の試料として選定したのは、コウヤマキ材の笠形木製品7点、ヒノキ材の板状木製品1点である。このなかで、板状木製品には約1.7cmほど辺材部(樹木の周辺部を占める白味がかかった部分で、白太ともいう。)が残存している。このような形状のものは、伐採年代に近い年代を求めることができる。他の7点は、いずれも辺材部の失われたものばかりであるから、伐採年代より古い年代を示すことになる。

年輪幅の計測は、専用の読取器を使用し、木製品の柁目面でおこなった。計測した年輪データは、コンピューターに入力し、ヒノキの暦年標準パターン(317B.C.~883A.D.)やコウヤマキの暦年標準パターン(22A.D.~741A.D.)との照会に備えた。コンピューターによる年輪パターンの照合は、相関分析手法によった。

### 結果

試料とした木製品8点の計測年輪数や年輪パターンの照合によって、得られた残存最外年輪測定年代は、表-7に示した。これらを見ると、コウヤマキの笠状木製品7点のうち1点を除く6点は、年輪パターンの照合が成立し、それぞれの残存最外年輪測定年代を求めることができた。このなかで、最も新しい年輪年代はW78の西暦376年である。

したがって、この原材は376年以降に伐採されたことが確定した。多分、原木から笠形に加工するときに削除された年輪を加算すると、これらの伐採年代は5世紀以降になる。

つぎに、ヒノキの板状木製品の年輪パターンと、ヒノキの暦年標準パターンとの照合は成立し、その残存最外年輪測定年代を西暦444年と確定できた。残存している辺材部1.7cm

のなかには、31層の年輪があった。普通、樹齢200～300年のヒノキであれば、3cm前後の辺材部のなかに50層前後の年輪が刻まれている。とすると、この板材にはあと20層から30層の年輪が加算されることになり、いくら多く見積ってもその伐採年代が6世紀に入ることとは推定しがたい。この板状木製品がどういう経緯で周濠内に入り込んだかは、知るよしもないが、もしこれが笠形木製品と同時期のものであれば、狐塚古墳の築造年代を当初の発掘所見とは異なって、5世紀後半と改めていかなければならない。再度、出土状況や土器編年について再検討を要する。

表5 狐塚3号墳出土木製品の年輪年代

試料	材種	計測年輪数	年輪年代
W17	板状 ヒノキ	172	444 A. D.
W8	笠形 コウヤマキ	132	366 //
W12	// コウヤマキ	114	363 //
W14	// コウヤマキ	124	356 //
W76	// コウヤマキ	135	360 //
W78	// コウヤマキ	182	376 //
W103	// コウヤマキ	150	327 //

## 5. 小結

### ①狐塚3号墳復元のために

狐塚3号墳は馬蹄形周濠を有する帆立貝式古墳で、復元した規模は、全長32m、周濠を含めると約41mになると想定できる。墳丘部分はずでに削平されており、耕作痕がみられる。残存していた墳丘肩部から裾までの間には若干の盛土の痕跡がみられた。くびれ部では周濠掘削時に墳丘部分をややえぐり気味に削り、成形する際に丁寧に層を重ね、なだらかな斜面をつくりだしているようである。さらにその上に、暗茶褐色土によって葦石を固定している。3号墳の立地する地点は、丘陵より舌状に延びる微高地であり、地山は安定しているので、土層の優劣による客土ではなく、周濠を掘削する際にまず粗掘りし、さらに整形しているものであろう。

3号墳築造に際して特徴的であるのは、SD-1の存在である。SD-1は後円部と同じカーブでくびれ部に円形に巡らされているもので、先述の盛土層に切られていることから、3号墳築造に先立って、後円部にほぼ重なる円形の溝があったと考えられる。この溝の性格としては、第1に3号墳築造以前にその後円部と相似形の円墳があり、3号墳がその円墳をつくり替えて築造されたもので、溝はその円墳の周濠であるものとするもの、第2に、3号墳築造の際に、まず後円部にあたる地点に円形の浅い溝を掘り、これをもとにして後円部をつくったとする、設計プランに係る溝である、という2通りが考えられる。SD-1からは埴輪片が出土していることや、埋まり方が人為的であると考えられるので、溝として機能していた時期は短かいと考えられ、その性格も、設計上のものとする可能性の方が高いと思われる。

次に周濠から出土した遺物によって、3号墳を考察してみたい。

木製品が出土したのは最下層に限られている。最下層の土層は自然堆積と考えられ、しかも、外側の肩部からの崩壊土が堆積する以前に埋没していると考えられる。木製品の落下は、墳丘削平など大規模な崩壊に伴うものではなく、自然に落下したものか、抜かれて捨てられたものと思われる。出土地点にはある程度まとまりがあり、笠形木製品は、前方部周濠コーナー部分に集中している。ここでは鳥形木製品もみられる。ほかの笠形木製品

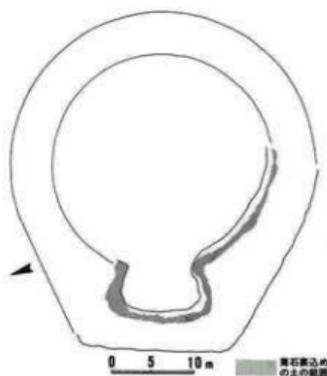


図24 3号墳復元図

は、2～3点ずつ散在している。また、棒状木製品は前方部周辺に集中しており、4mを超す細長い棒状木製品を含めて、周濠外側寄りにあつまっている。これに対して、弓状木製品は後円部南側において多くみられる。周濠内には、滞水も考えられるので、重量のない木製品は浮遊も考えられるが、棒状木製品と弓状木製品については、両者の出土地点は2分されており、また長いものが多いので、ある程度落下時の原位置を留めていると考えられる。これらは、古墳を装飾していた柵状もしくは手すり状のものである可能性がある。これらの材は枝を払っただけの粗雑なものが多いが、樹種はヒノキ類を中心に、限られた材を用いている。

円筒埴輪は周濠内各層、各地点にみられたが、特徴としては、最下層より出土する埴輪のほとんどが須恵質であるという点である。これに対して墳丘肩部にみられるものや、中層より上でみられるものは、赤っぽい色を呈する軟質のものが多い。須恵質の埴輪については、墳丘の周縁にあったものが、棒状や笠形の木製品とともに儀礼の終了後早い段階で濠内に埋没したものと考えられる。肩部に多く出土した軟質の埴輪は、表面にローリングを受けたものがあり、落下した年代が最下層埋没時とは異なり、一定の年月を経て転落した可能性が高い。この差は、古墳を飾る際に、須恵質のものや木製品を墳丘裾部に、軟質のものは墳丘の上部に置き分けられていたことから生ずると考えられる<sup>②</sup>。置き分けの原因については、工人集団による分担のためということも考えられるが、むしろ、須恵質のものと軟質のものの色調の違いにより墳丘の装飾を考えてなされた結果であると想定できる。

### ②3号墳の年代について

周濠の埋没が終了したのは中世になってからであり、濠内には長期間にわたる遺物が含まれる。五層に分けた土層のうち、下層が堆積する段階には7～8世紀に下る須恵器が混じるので、最上層から下層までの間に含まれる土器類は、古墳の年代を知る手がかりにはなり得ないのである。古墳に明らかに伴っていたと考えられる遺物は、埴輪類・木製品類・最下層出土土器と考えられる。

最下層より出土した土器の点数は少ないが、図化できた土器壺は、須恵器出現以降にあらわれるもので、5世紀後半から6世紀初頭ころのものと考えられる。

埴輪のうち、円筒埴輪について川西編年にあてはめて考えると<sup>③</sup>、Ⅳ期の要素としては、B種ヨコハケをもつこと、タガの突出度が大きく断面台形のものが含まれること、がある。ただしこの場合のB種ヨコハケは、タテハケを施した後のヨコハケではなく、ナデ調整の後のヨコハケである。Ⅴ期の要素をもつものに、D～F類のように、タテハケやナデによる1次調整のみでおわるものがある。また、タガは低平なものも多く、底部調整を施すものが一部みられる。

近年、このように1つの古墳で外面調整にタテハケとヨコハケが混在するなど川西編年の複数の期にまたがる埴輪が出土する古墳の出土例が増加しており、「円筒埴輪様式」を明らかにする必要性を説かれている。こうした中で、古市古墳群における研究では、とくに小型円筒埴輪がⅡ～Ⅴ期にタテハケのみの型式があるなど、川西編年にあてはまりにくいという<sup>9)</sup>。

3号墳出土の円筒埴輪は径20cmのものがそのほとんどである。スタイルはタガの低平化にみられるようにⅣ期的なものは少なく、タガの突出度が大きいe、f類は稀少である。調整ではB種ヨコハケを残すものの、その際の一次調整はタテハケでなくナデのみであること、底部調整を施すものがあるなど全体的にみるとⅤ期的な要素が多く、Ⅳ期の要素を若干残す程度であると考えられる。しかし、その年代については、近江の特殊性や古墳の規模や序列との関係、量と調整手法との関連などについて、今後詳細に検討していったうえで判断されるべきであろう。

他の埴輪は、蓋形埴輪1点のみである。これは立ち飾り部の破片ではあるが、鱗の誇張がめだつ段階のものであり、大阪府黒姫山古墳出土例や京都府上人ヶ平1号墳出土例に類似するもので、小型・無紋のものが現われる前の段階のものであると考えられる<sup>9)</sup>。

多量に出土した木製品について、木製品のスタイルによる年代は、全国でも比較的出土例が多い笠形木製品について、もともとの笠の形状をどれだけ残しているかという点で求められている。これによれば、笠形木製品の中央にある孔の下半を蓋の形に忠実に大きく抉るものを古く、下半を大きく抉ることがなくまたは底部の抉りこみすらないものを新しく6世紀代以降のものとしてされている<sup>9)</sup>。3号墳出土例では古いとされる前者にあたるものがA・B類、新しいとされるものがC類である。C類は笠形木製品の過半数を占めており、とくに小型のものが多いことが特徴である。つまり、5世紀段階に通用のものと6世紀以降の可能性がある高いタイプが混在している状況である。

光谷氏による年輪年代から割りだされた木製品の実年代は、A.D.444年が最も近い時期であるとされた。年代の求められた板状木製品が古墳築造に伴って製作されたものであるなら、古墳の年代は5世紀後半代に求められる。

埴輪や木製品などの従来の編年によって年代を考えると、須惠器出現以降で、5世紀の末かもしくは6世紀に入る時期であると考えられる。しかし、年輪年代による実年代では5世紀後半と、若干異なる。この年代幅については、年代の手がかりとした埴輪等の遺物について、従来の編年観によれば年代幅の広い遺物が同時に出土する例があり、今後、近江の地域性や過渡期にある埴輪の調整のちがいにみられる出現率、さらに木製品の埋没の経緯などを検討していく必要がある。

### ③狐塚遺跡と安養寺古墳群

狐塚遺跡の位置する安養寺山の西側には、中期の有力な古墳群が存在する。とくに名神高速道路敷設の際にみつかった山麓の古墳群は規模は小さいながらも、馬具・武器、鏡をはじめとする豊富な副葬品をもち、4世紀末から5世紀中頃まで連続と築造されている。また、山麓から延びる丘陵上には、椿山・大塚越古墳があるが、椿山古墳は全長99mの帆立貝式古墳、大塚越古墳は全長約75mの前方後円墳と、規模の大きい古墳がつけられている。さらに1991年の調査では、椿山古墳の東100mの地点で径約12mの円墳（狐塚2号墳）ほか、低墳丘と考えられる方墳5基がみつき、方墳のうち1基からは溝内埋葬と考えられる遺構がみつき、勾玉、算盤玉、ガラス小玉、紡錘車が出土している。こうした副葬品は、主体部に葬られた人物の有力さをうかがい得ることのできる資料である。また、地元で保管されている文書（「安養寺共有文書」）では、2号墳と3号墳の間に「けつね塚」と記され、円丘らしい丸印がつけられている（狐塚1号墳）。『栗太郎史<sup>®</sup>』によれば、これは別名「ばくち山」ともいい、明治維新前に石櫛内で賭博を打っていたという伝承があり、横穴式石室の存在を考慮することができる。規模は3号墳よりやや大きめであろうと考えられる。狐塚遺跡における古墳の築造順は、2号墳がⅣ期のみの埴輪を有するものであり、狐塚2号墳→狐塚3号墳→狐塚1号墳、ということになる。以上のように、安養寺山西側には、山麓の小規模かつ豊富な副葬品をもつ一群と、大塚越古墳から横穴式石室をもつであろう狐塚1号墳にいたるまでの一連の古墳があったことが明らかになってきた。これらの古墳のうち今回みつかった3号墳から出土した木製品は畿内とほとんどかわらない製作技術を有しており、3号墳の被葬者は畿内と関わりの深い地元の有力な首長であったと推察される。

注

- 1 宇治市五ヶ庄二子塚古墳では川西編年Ⅳ期に相当するⅠ類の埴輪とⅤ期に相当するⅡ・Ⅲ類の埴輪があり、出土地点の分析から、前方部墳頂部および堤の外側にⅠ類を後円部および前方部段築上、堤の内側にⅡ、Ⅲ類をならべているとされる。

宇治市教育委員会「五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告」1992

- 2 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978
- 3 天野末喜 松村隆文「埴輪の種類と編年Ⅰ円筒埴輪—近畿」『古墳時代の研究』9古墳Ⅲ埴輪 1992
- 4 松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期—畿内を中心に—」『鳥居前古墳総括編』1990
- 5 土生田純之「菅田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988  
西藤清秀「木製樹物」『古墳時代の研究』9古墳Ⅲ埴輪 1992
- 6 滋賀県栗太郎役所「栗太郎史」 1926

図版1遺構



検出状況



狐塚遺跡全景



SX-1 前方部周濠木製品出土状況



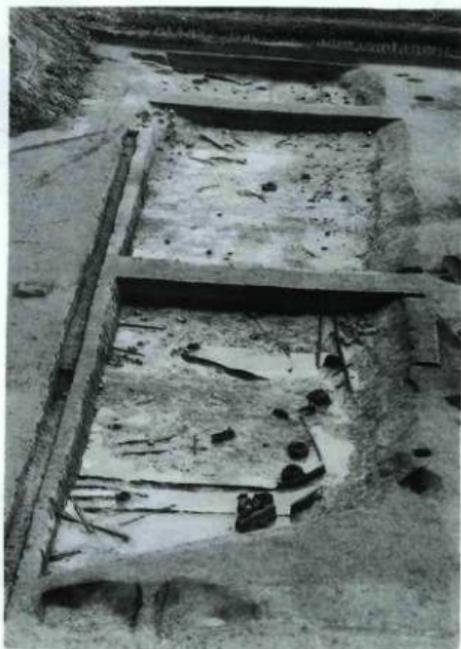
木製錫出土状況



W17(板材)出土状況



笠形・鳥形木製品出土状況



SX-1 木製品出土状況



南側くびれ部基石検出状況(南東から)



北側くびれ部基石検出状況(東から)



前方部基石検出状況(西から)



SX-1 周濠土層堆積状況



前方部葦石裏込め土



SX-1 周邊掘削風景



くびれ部断ち割り状況



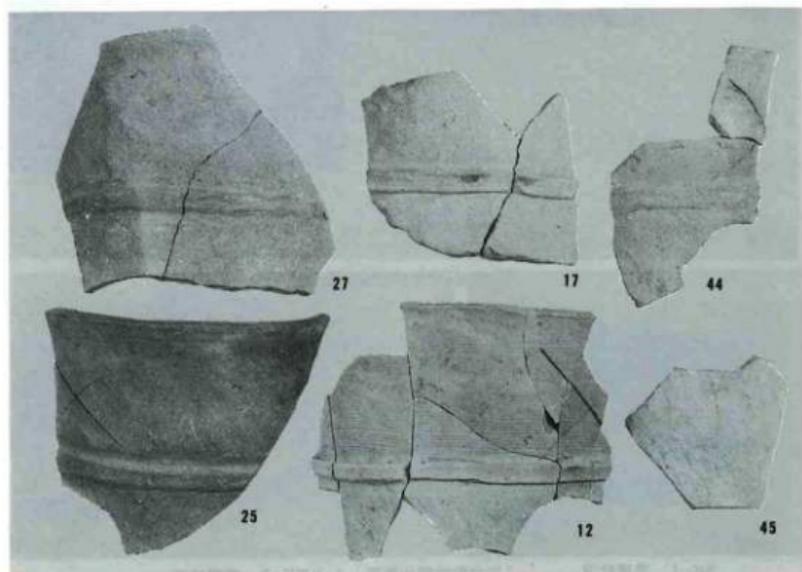
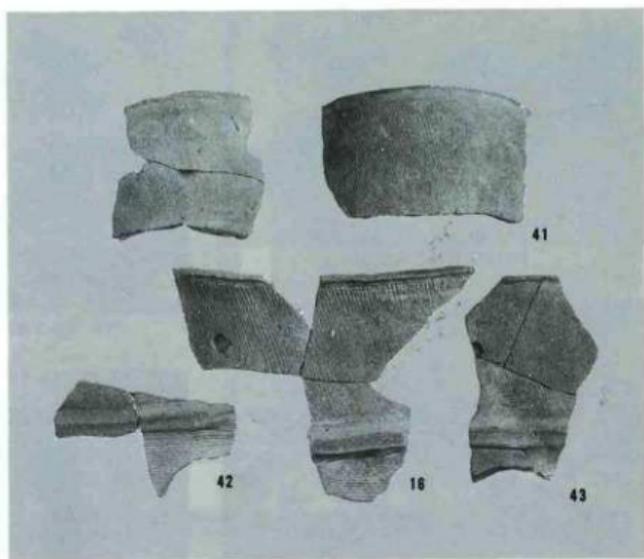
笠形木製品とりあげのための  
ウレタン吹きつけ

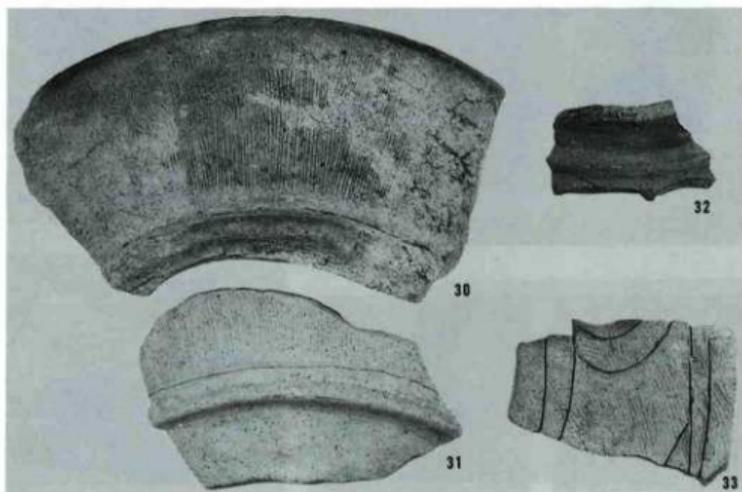
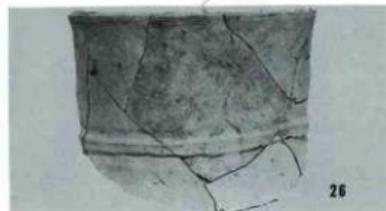
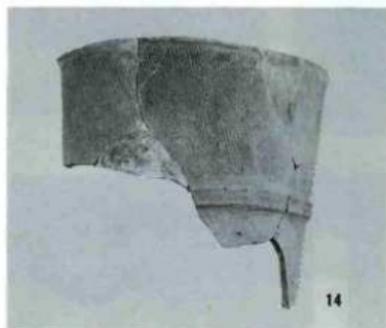
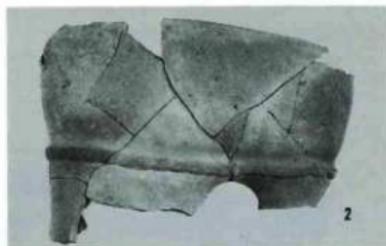
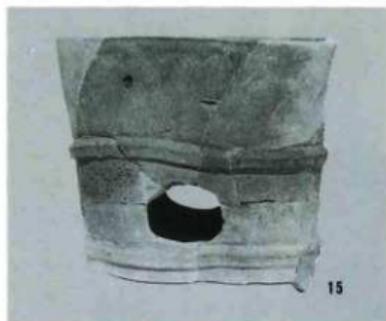


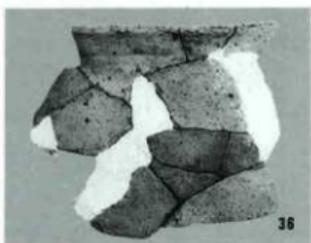
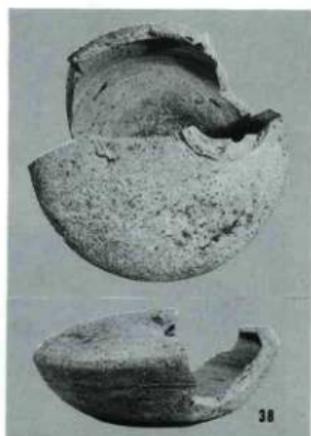
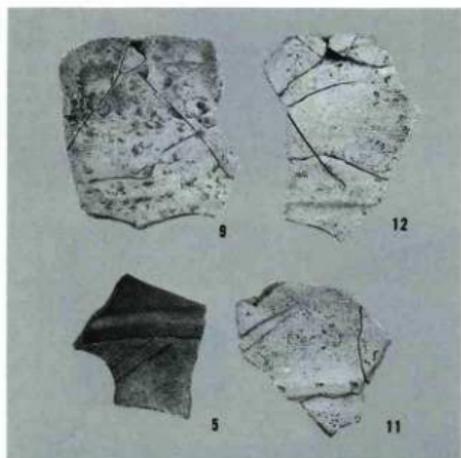
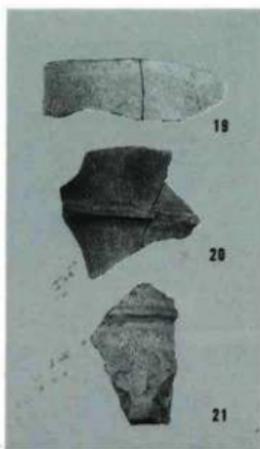
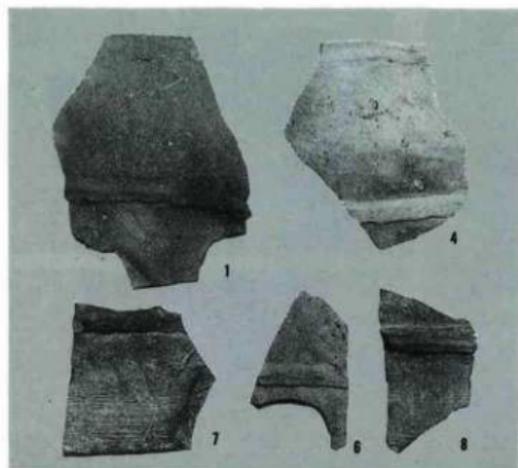
SK-1 発掘状況

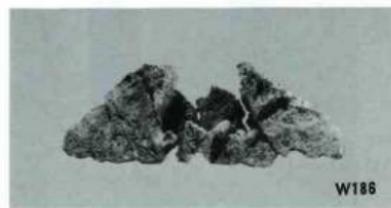
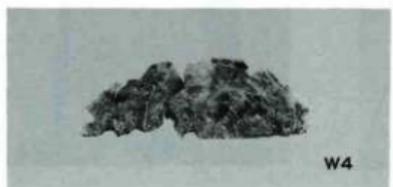
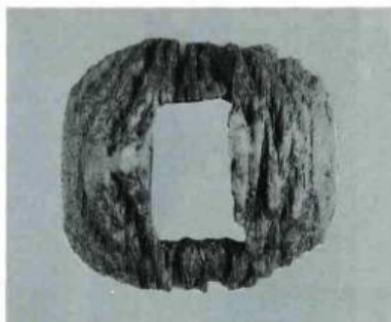
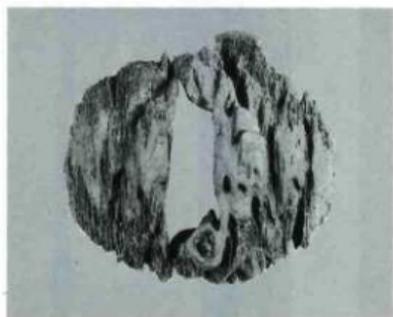
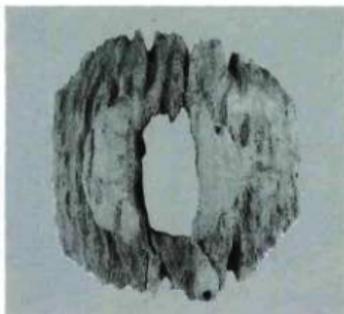
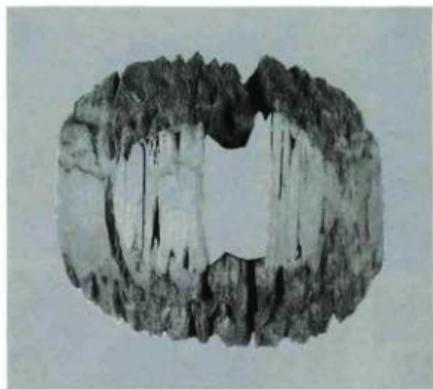


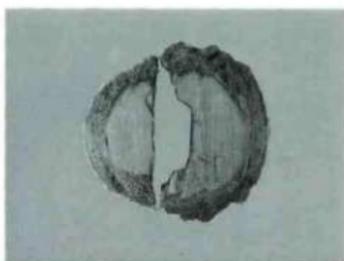
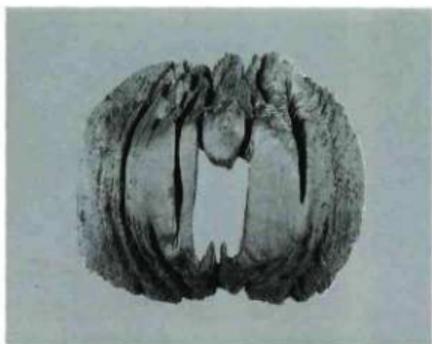
SX-2 発掘状況





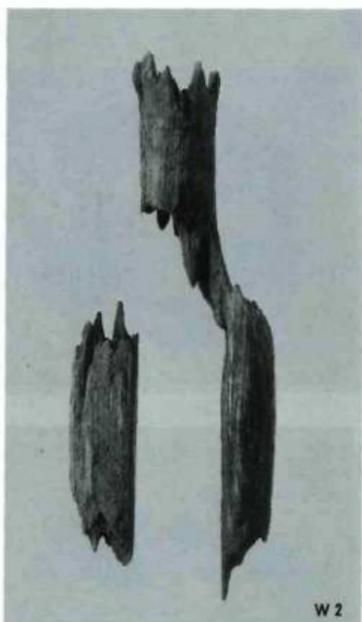






W138

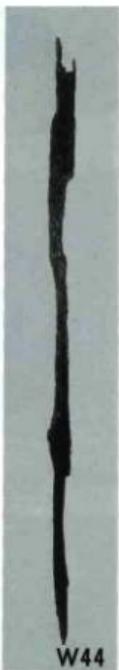
W



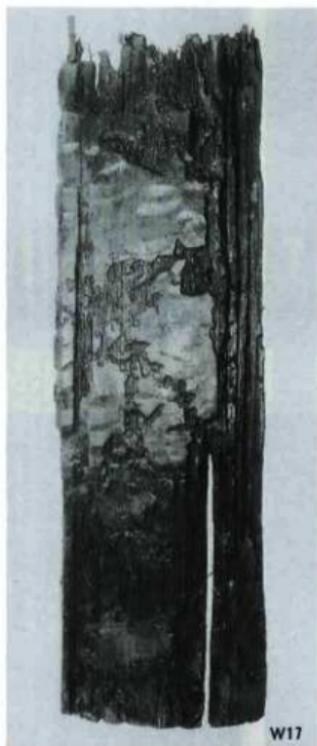
W 2



W 5

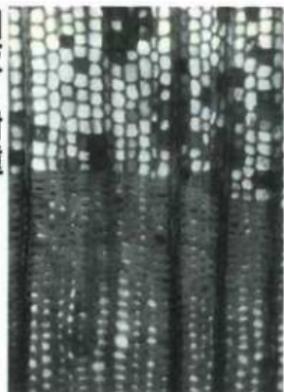


W44



W17 加工痕





1a コヤマキ W-172  
横断面×60



1b 同左  
放射断面×240



1c 同左  
接線断面×60



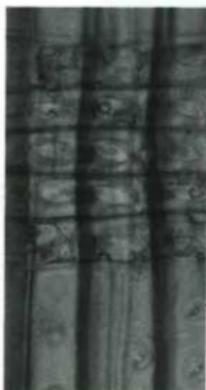
2a コヤマキ W-186  
横断面×60



2b 同左  
放射断面×240



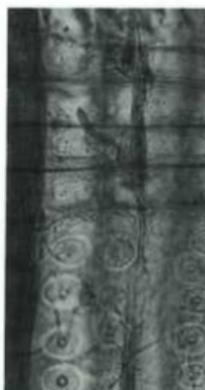
2c 同左  
接線断面×60



3 コヤマキ W-2  
放射断面×240



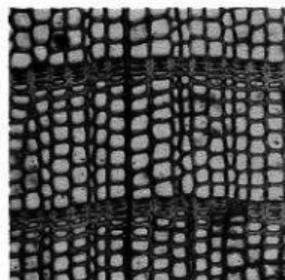
4 コヤマキ W-5  
放射断面×240



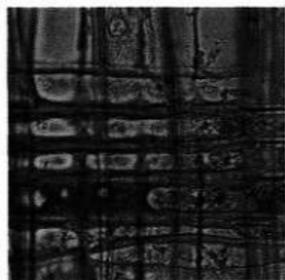
5 コヤマキ W-18  
放射断面×240



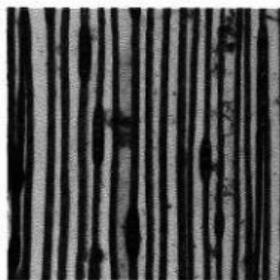
6 コヤマキ W-138  
放射断面×240



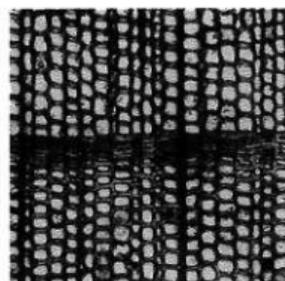
7a ヒノキ W-41  
横断面×60



7b 同左  
放射断面×240



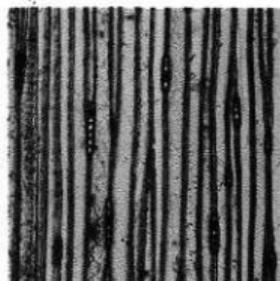
7c 同左  
接線断面×60



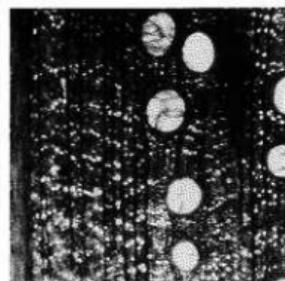
8a ヒノキ W-183  
横断面×60



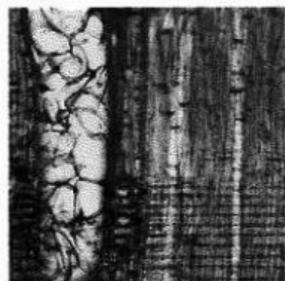
8b 同左  
放射断面×240



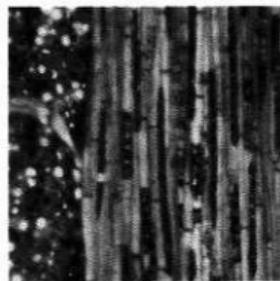
8c 同左  
接線断面×60



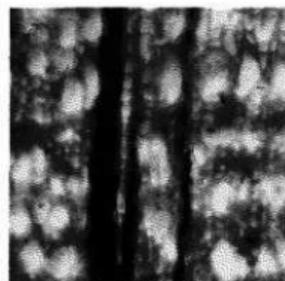
9a コナラ属アカガシ亜属 W-175  
横断面×24



9b 同左  
放射断面×60



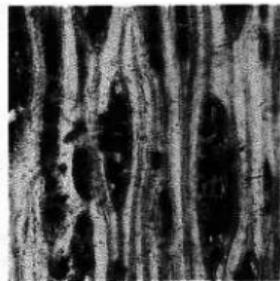
9c 同左  
接線断面×60



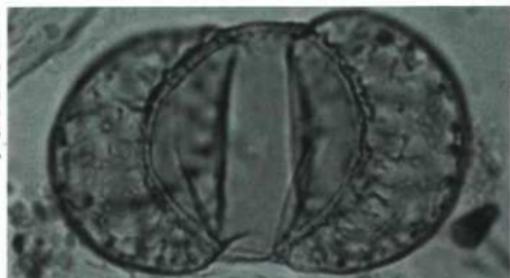
10a ヤブツバキ W-169  
横断面×120



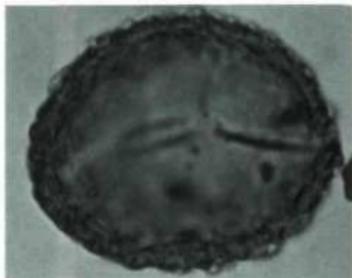
10b 同左  
放射断面×240



10c 同左  
接線断面×120



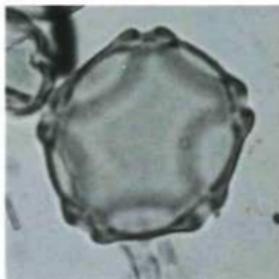
1. マキ属



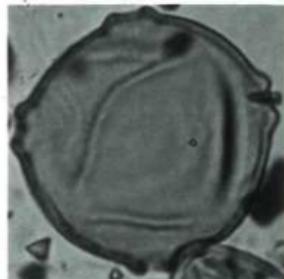
2. コウヤマキ



3. スギ



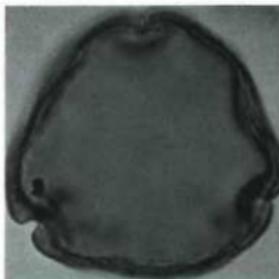
4. ハノキ属



5. クマシデ属-アサダ



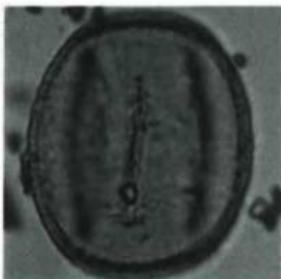
6. クリーシイ属-マテバシイ属



7. ブナ属



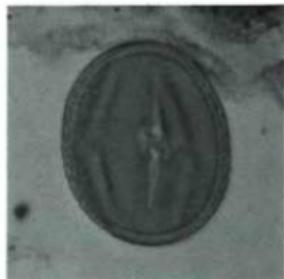
8. コナラ属アカガシ亜属



9. コナラ属コナラ亜属

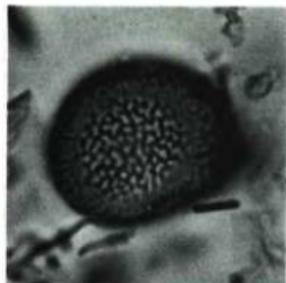


10. ニワトコ属-ガズミ属

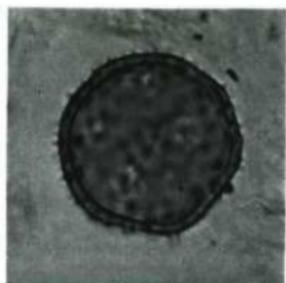


11. マメ科

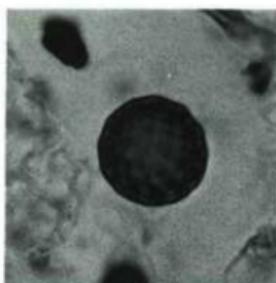
(×1000)



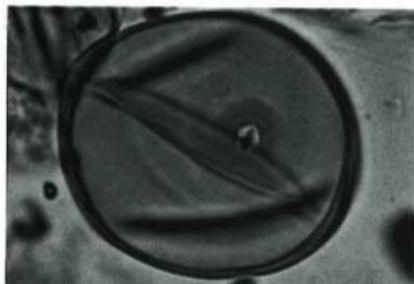
12. ガマ属-ミクリ属



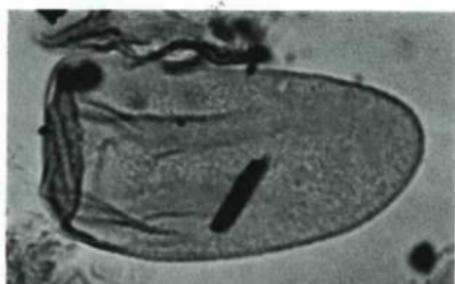
13. オモダカ属



14. アカザ科-ヒユ科



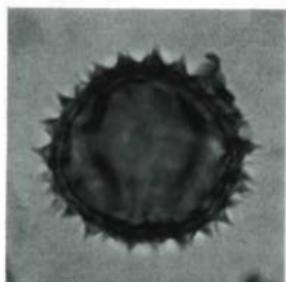
15. イネ科(イネ属型)



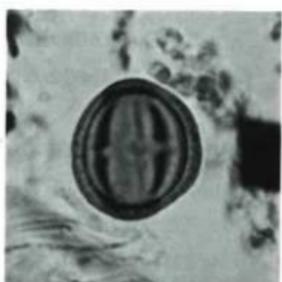
15. カヤツリグサ科



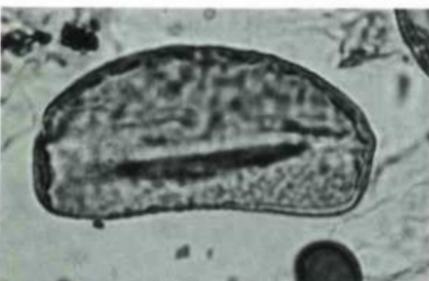
16. ゴキツル



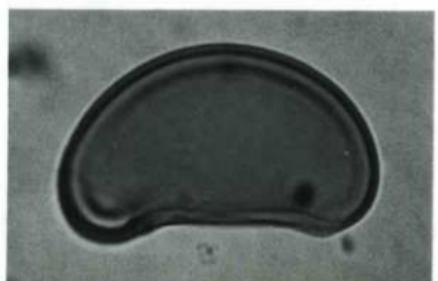
17. キク亜科



18. ヨモギ属



19. ミズアオイ属



20. シダ植物草条溝胞子

### 第3章 資料紹介 井戸出土の祭祀遺物 上鈎遺跡

上鈎遺跡の井戸跡から出土した7世紀中頃の一括遺物を紹介したい。上鈎遺跡は、標高約100m前後の沖積低地に位置し、主に葉山川が形成した自然堤防状微高地に弥生時代後期から近世に至るまで集落が形成されている。調査は、大字上鈎字中田夫224-1において1991年4月4日から5月20日にかけて実施した。

本調査地は、旧東海道と国道1号線の間であり、比較的遺構密度の濃い地点である。今回の調査では、7世紀の井戸の他に13世紀から14世紀の井戸3基や15世紀の堀(SD-1)、柵列、区画溝を伴う掘立柱建物跡が出土しており、北西250mに推定されている足利義尚の「鈎の陣」(1487年)との関連が注目される。

7世紀の井戸(SE-7)は、井戸枠は抜き取られたと思われる存在しなかったが、掘り方は、1辺1.4m、深さ1.5mを測る平面正方形のもので、他の遺構の方位が栗太郎主条里(南北の線が東へ約30°振る)と同一であるのに対し、ほぼ正南北の方位をとる。

写真①に見るように田の水入れ時期に当たり、畦畔崩壊の箇所もありSD-1を完掘しなかったため、発見が遅れ乱雑な調査しか行えず詳細な記録がなされなかったが、最下層の暗黒灰色粘土層か



図1 調査地位置図

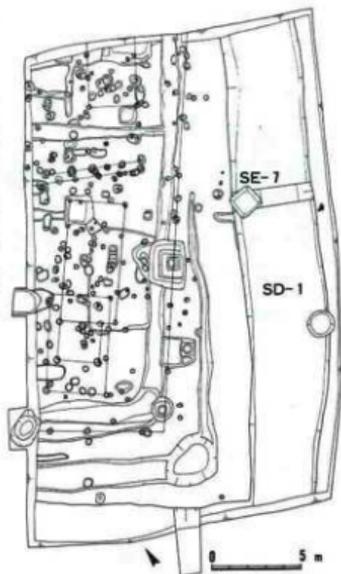


図2 遺構全体図



写① 調査地全景(西から撮影)

らは斎串や土器などの良好な一括資料を得ることができた。以下それらの遺物を写真にそって紹介したい。

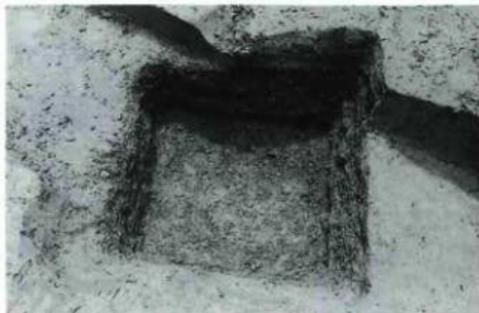
1は平瓶で、やや外反して開く口縁が付くもので、体部外面下半及び底部はヘラ削り、他は回転ヨコナデ調整で、胴部上面から肩部にかけてカキ目調整を行う。肩部にはボタン状円板を1個貼り付ける。また、底部中心には薬指・中指・人指し指の圧痕が明瞭に残る。

2は蓋環で、まるみのある天井部に乳頭状のつまみが付く、口縁部は打ち欠いている。3は蓋環で、ややまるみのある天井部に宝珠形つまみが付く。内面のかえり先端は口縁の下方には突出しない。

4は甕で、口縁部がわずかに内わんしてひらき上端部に面をつくる。外面には一条の沈線がめぐる。体部外面は平行叩き、内面は同心円の当具痕を残す。5は土師器甕で、

体部内面はハケ目、底部はナデ調整、口縁部内面はヘラ描きの線刻が2条みえる。体部及び口縁部外面はハケのちナデ調整、底部はヘラ削りである。6は土師器環で、体部内面に放射状の暗文を施し、外面はヘラ磨きと削り調整、口縁上端部外面に凹線状の段を有する。

7は高坏脚部で、ラップ状に開き裾端部に面をつくる短い脚部である。8は甕の口縁部と思われる須恵器片で1条の沈線がみえる。9はヒョウタン類の果皮と思われる植物遺体。10はどれも一方の先端が焼け焦げている焼えさしと呼ばれる木片で、写真右下端のもので



写②

SE-7 (北から撮影)

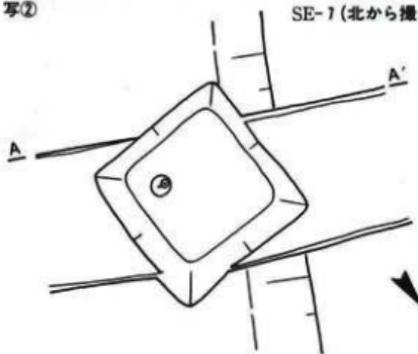


図3

SE-7 平面・断面図

長さ13cm。11・12は斎串で、2点出土している。奈良国立文化財研究所の分類によると<sup>註1</sup>、11は上端を圭頭状にして下端を剣先状につくり、上端の切り込みは両側とも同箇所から2回入れるCⅢ式である。そして12は両端を圭頭状につくり、上端の切り込みは両側とも1回のみであり、BⅢ式となる。

以上各遺物を簡単に見てきたが、これらの遺物は土器の特徴から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期のもので、その年代は7世紀の中頃に求められる。上鈎遺跡では7世紀代の遺構は少なく、当調査区でもSE-7のみであった。周囲に存在すると思われる同時期の遺構が未調査であるが、7世紀代の井戸に対する祭祀を示す興味ある一例としてとらえたい。

註1、奈良国立文化財研究所史料第27冊 「木器集成図録」近畿古代篇 1984

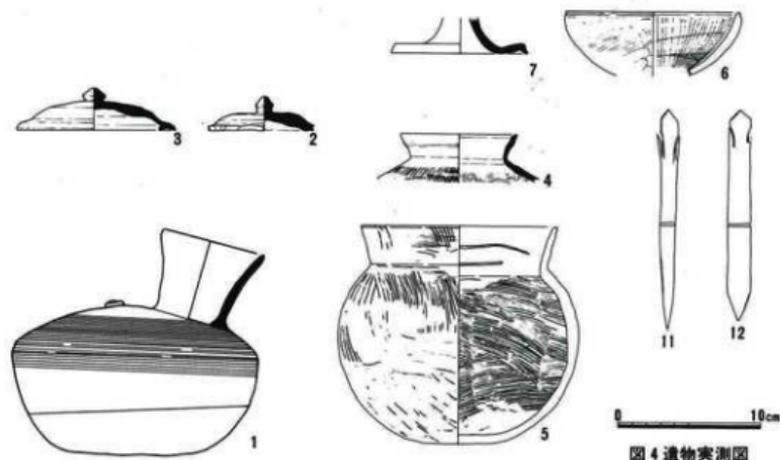
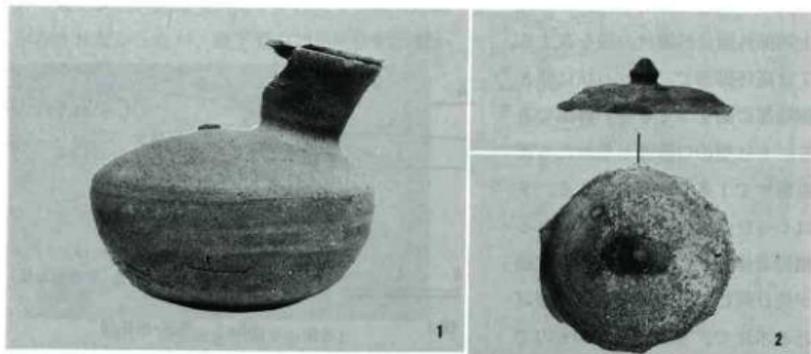
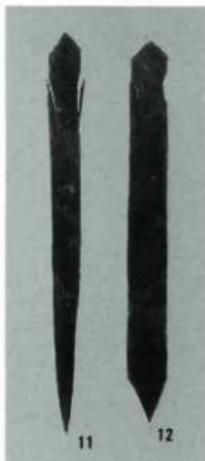
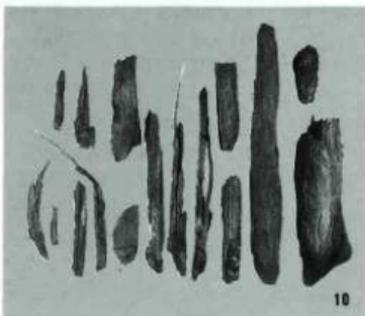
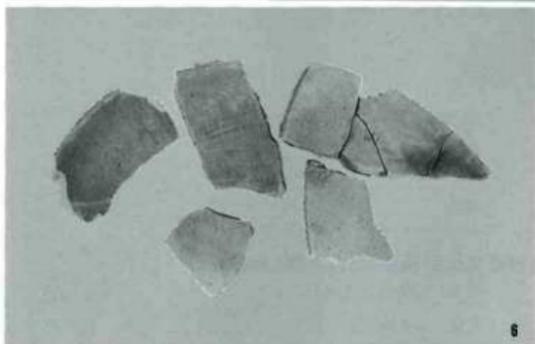
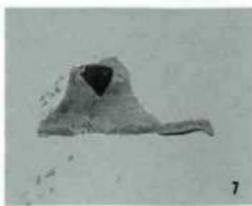
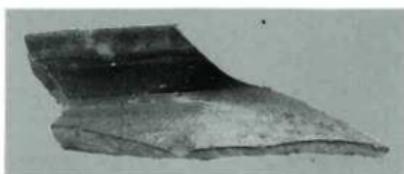


図4 遺物実測図





**栗東町埋蔵文化財調査 1991年度 年報Ⅱ**

—下鈎・孤塚・上鈎遺跡—

発行日 平成5年3月31日

編集・発行 財栗東町文化体育振興事業団  
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1  
栗東町民体育館内

TEL.0775-53-4321

印刷・製本 宮川印刷株式会社  
滋賀県大津市富士見台3-18

TEL.0775-33-1241